

2009 年度卒業論文

ポーランド兄弟団と寛容
Bracia Polscy i Tolerancja

東京外国語大学 外国語学部
ロシア・東欧課程 ポーランド語専攻
杉本啓 (学籍番号 6805093)

目次

目次.....	1
凡例.....	3
序論.....	4
1. 本稿の目的.....	4
2. 先行研究.....	5
3. 研究方法.....	6
第1章 ポーランドにおける初期宗教改革とポーランド兄弟団の誕生	7
1. 宗教改革のはじまり	7
2. ポーランドにおける宗教改革	8
2-1. シュラフタの勢力拡大	9
2-2. プロテスタントの流入	11
2-3. ポーランドにおけるプロテスタントの勃興	12
3. ポーランド兄弟団の誕生	13
3-1. イタリア文化の流入	14
3-2. ポーランド兄弟団の誕生	15
第2章 形成期ポーランド兄弟団	18
1. 歴史背景.....	18
2. ポーランド兄弟団	19
2-1. ポーランド兄弟団の組織	19
2-2. 三位一体に関する議論	20
2-3. ラクフ誕生とモラヴィア兄弟団との接触	22
2-4. 急進主義をめぐる論争	24
3. 全盛期に向かうポーランド兄弟団	26
3-1. ソツィーニの登場	26
3-2. レヴァルトウフの学校	29
3-3. 迫害	30
第3章 最盛期ポーランド兄弟団と亡命	32
1. 歴史背景.....	32
2. ポーランド兄弟団の黄金期	33
2-1. ラクフ学院と印刷所	34
2-2. 国内活動	35
2-3. 国外活動	37
2-4. 対抗宗教改革の攻撃とラクフの解体	39

3.	「大洪水」と「大亡命」	40
3-1.	ラクフ解体後のポーランド兄弟団	41
3-2.	大洪水	42
3-3.	「大亡命」とその後	45
第4章	ポーランドにおける寛容とポーランド兄弟団による寛容の実践	50
1.	宗教改革期のヨーロッパ	50
1-1.	再洗礼と反三位一体派	50
1-2.	16-17世紀の西欧諸国における宗教改革の経過	52
2.	ポーランドにおける宗教的寛容	54
2-1.	宗教改革以前のポーランドにおける寛容の伝統	54
2-2.	16世紀ポーランドにおける寛容	58
2-3.	ワルシャワ連盟協約	60
3.	ポーランド兄弟団による寛容の実践	62
3-1.	初期ポーランド兄弟団とラクフ	63
3-2.	サルマチアのアテネ	64
第5章	ポーランド兄弟団の寛容思想	66
1.	宗教的寛容思想について	66
2.	宗教改革期の寛容思想	67
2-1.	再洗礼派	67
2-2.	セルヴェトウスの影響	69
2-3.	宗教平和論者	70
2-4.	近世の寛容論者たち	71
3.	ポーランド兄弟団の寛容思想	74
3-1.	16世紀の寛容令	74
3-2.	ソツィーニと『ラクフ教理問答』	76
3-3.	ソツィーニ派	77
	終論	80
	巻末資料 I 主要人物略歴 (50音順)	85
	巻末資料 II 歴史年表	96
	巻末資料 III 地図	102
	参考文献一覧	103
	Streszczenie	106
	あとがき	109

凡例

1. 地名・人名の日本語表記について
 - ・ 現在ポーランド国内にある地名については、ワルシャワを除いてポーランド語に従った。
 - ・ 現在ポーランド国外にある地名については、当時属していた言語圏の言語に従った。
 - ・ 人名に関しては、その人物の出生地が当時属していた言語圏の言語に従って表記した。ただし、特に慣用化された表記方法が存在する場合は、そちらを採用した。
2. 初出の人名には、その原語表記及び生没年を併記する。ただし、巻末資料「主要人物略歴」に掲載のある人名については、これを省略する。
3. 同姓同名の人物については、先に生まれた者の名に（シニア）、後に生まれた者の名に（ジュニア）と追記した。ただし、（ジュニア）が（シニア）の息子とは限らない。
4. 引用文において、特に筆者の補足説明が必要な場合、（ ）を挿入した。一方、引用文における〔 〕は、引用の一部である。また、……は省略を意味する。
5. 聖書を引用する際には、『新約聖書』新訳聖書翻訳委員会訳、岩波書店、2004年を利用した。
6. 本稿に登場する地名は、可能な限り巻末資料 III「地図」に掲載した。ただし、巻末資料 I「主要人物略歴」にのみに登場する地名は掲載していない。

序論

1. 本稿の目的

15 世紀初頭、ポーランド王国は異教徒であるリトアニアと結び、キリスト教を奉ずる同胞であるドイツ騎士修道会と戦い、様々な民族・宗教をその内に包含する複合民族・複合宗教国家となった。16 世紀になり宗教改革が始まって、ポーランドではカトリック教会による新教徒迫害は、比較的穏やかであった。欧州各国で宗教的迫害に遭った人々の多くがポーランドを亡命先に選択したことから、この国は「異端者の避難所」(azył heretyków) と呼ばれた。また、現代の研究者タズビルが「火刑なき国家」(państwo bez stosów) と評したように、当時のポーランドにおける宗教的理由による死刑執行の例は非常に少なく¹、度重なる宗教戦争の勃発にもポーランドは中立を貫いた。

こうした環境の中、ひとつの反三位一体派グループがポーランド・カルヴァン派から分離する形で誕生し、彼らは「ポーランド兄弟団」(Bracia Polscy) を自称した。カトリック、プロテスタント諸派は、同じく三位一体に異を唱えて破門された 4 世紀の聖職者アリウス Arius (250 頃-336) とそれを支持した人々にちなみ、嫌悪をこめて彼らを「アリウス派」(Arianie) と呼んだ。彼らは、ファウスト・ソツィーニをその精神的指導者に据えたことから、のちにヨーロッパ中で「ソツィーニ派」(Socynianie) として知られるようになり、この呼称は反三位一体派異端の代名詞とも言えるほどの地位を得る²。最終的にはトランシルヴァニア発の「ユニテリアン派」という名称³が反三位一体派を指すものとして広く認知されるようになるものの、16、17 世紀におけるソツィーニ派の知名度は非常に高かった。ともかく、彼らに関しては以上のような様々な呼称が存在するものの、本稿では、野沢協、中山昭吉の見解⁴に倣い、また個人的な思い入れからも、彼らの自称である「ポーランド兄弟団」をその正式な呼称として使用したい。ただし、場合に応じて、「アリウス派」、「ソツィーニ派」も使用することもある。

¹ 1539 年、カタジナ・ヴァイグローヴァ Katarzyna Wajglowa (生没年不明) という老女が三位一体の教義を否定したことで火刑に処せられているが、それ以外に宗教的理由による火刑の例はほとんどない。

Janusz Tazbir, *Reformacja, kontrreformacja, tolerancja*, Wrocław 1996 (以下 *Reformacja* と略記), s. 60-61.

² こうした例は、ベールの著作「ピエール・ベール「強いて入らしめよ」というイエス・キリストの言葉に関する哲学的注解」『寛容論集』(野沢協訳)(ピエール・ベール著作集第 2 巻)法政大学出版社、1979 年(以下、「哲学的注解」と略記)などに顕著に見られる。

³ デーヴィッド・B・パーク『ユニテリアン思想の歴史 自由宗教の歴史の原史料による述作』(紺野義継訳)アポロン社、1978 年(以下『ユニテリアン思想の歴史』と略記)、47 頁に「ユニテリアンという名称それ自体は、トランシルヴァニアに源をもち、1600 年にそこで使われたのが最初である」とある。

⁴ ピエール・ベール『歴史批評辞典』III (ピエール・ベール著作集第 5 巻)(野沢協訳)、法政大学出版会、1987 年、1340 頁の訳者注 608 及び中山昭吉『近代ヨーロッパと東欧』ミネルヴァ書房、1991 年、65-74 頁を参照。

彼らは、激しい迫害に耐えながら、ほぼ 1 世紀にわたってポーランドで活動を続け、国内外に一定の影響を与えた。その影響力は、その頃まさに形成期にあった西欧啓蒙思想へも及んだとして、現在でも、非常に高い評価を受けている⁵。にも拘らず、わが国における彼らの知名度は皆無に等しい。

ところで、ポーランド兄弟団についての数少ない邦語資料の中に、次のような記述がある。

ポーランドでは寛容思想の具体的な表明が、カルヴァン主義の改革教会の内部に生まれた反三位一体派グループの教義に見られた⁶。

現在の日本人の語感では、ごく一般的に思われるこの「寛容」という概念は、特にキリスト教文化圏ヨーロッパにおいては、宗教と密接に関わっている。「寛容」という言葉が意識されるようになったのは、キリスト教の宗派对立が起こった宗教改革がきっかけであり、啓蒙思想期になって宗教的用語であった「寛容」は、現在のような一般的な意味を持つようになった。宗教的概念であった「寛容」が普遍的な意味を持つようになるまさに転換期に、寛容思想を掲げて活躍したポーランド兄弟団。以上を踏まえ、寛容の国ポーランドの実態を明らかにするとともに、そんなポーランドに生まれ育ったポーランド兄弟団の、「寛容」との関わりを明らかにすることを本稿の目的として設定したい。

第 1 章では、導入として、ポーランド兄弟団が誕生することとなった背景を探るため、ポーランドにおける宗教改革の受容についてまとめた。次に、ポーランド兄弟団の活動の歴史を便宜上 2 つに分け、第 2 章、第 3 章とした。すなわち、ポーランド兄弟団の誕生から、彼らが最盛期を迎える 1600 頃年まで——第 2 章——と、彼らの最盛期から亡命まで——第 3 章——である。第 4 章、第 5 章ではポーランド兄弟団の「寛容」との関わりについて、「実践」と「論理」という 2 つの側面から解明を試みている。

2. 先行研究

わが国におけるポーランド兄弟団研究としては、中山昭吉の論文「ポーランド兄弟団と形成期西欧啓蒙思想——ロック研究への一視点⁷」及び、著作『近代ヨーロッパと東欧』がある。後者の第 2 章「ポーランド兄弟団（ソツィーニ派）と初期西欧啓蒙」は、前者が

⁵ 例えば、『新カトリック大事典』3、上智学院新カトリック大事典編纂委員会編、研究社、2009 年、902 頁には「聖書の合理主義的解釈、教会と国家の分離、戦争における無抵抗主義など、西欧の近代思想に及ぼした影響は大きい」との記述がみられる。

⁶ ヘンリ・カメン『寛容思想の系譜』（成瀬治訳）平凡社、1970 年、163 頁。

⁷ 中山昭吉「ポーランド兄弟団と形成期西欧啓蒙思想——ロック研究への一視点」『京都産業大学論集』人文科学系列 13、1986 年（以下「ポーランド兄弟団」と略記）。

加筆修正されたものであり、ポーランド兄弟団の誕生から亡命までの歴史がまとめられた上で、ポーランド兄弟団と初期西欧啓蒙思想の関係が指摘されている。それ以外に彼らについて知りうる邦語文献としては、カメンの『寛容思想の系譜⁸』やミウオシュの『ポーランド文学史⁹』があるが、情報量は決して多くはない。その他、『新カトリック大事典』や『キリスト教大事典¹⁰』には、「ソツィーニ主義」として若干の説明がなされている。

一方、欧米では彼らに関する研究は盛んに行なわれており、その蓄積は膨大なものである。19世紀中葉から現在に至るその研究史については、中山昭吉がすでに前掲書において10頁にわたってまとめているため¹¹、ここでは、同書の選抜にもれた文献として Zbigniew Ogonowski, *Arianie polscy*, Warszawa 1952、最近の研究として Zenon Gołaszewski, *Bracia polscy*, Toruń 2004 を挙げるに留める。

3. 研究方法

ポーランド兄弟団の歴史については、前掲の Gołaszewski, *Bracia polscy* がおそらく最新の研究書であることから、主要参考文献として使用。ただし、歴史事実の誤認を防ぐためにできるだけ多くの文献を併用した。ポーランド兄弟団の思想に関しては、Zbigniew Ogonowski, *Socynianizm polski*, Warszawa 1960 および、700 lat myśli polskiej. *Filozofia i myśl społeczna XVI wieku*, red. Lech Szczucki, Warszawa 1978 ; 700 lat myśli polskiej. *Filozofia i myśl społeczna XVII wieku*, cz. 1-2, red. Zbigniew Ogonowski, Warszawa 1979 を利用した。また、本稿で言及する人物については、主に *Bibliografia literatury polskiej Nowy Korbut*, 1-3, Warszawa 1963-1965 (以下 NK と略記) 及び *Polski Słownik Biograficzny*, 1-34, Kraków-Wrocław-Warszawa-Gdańsk-Łódź 1935-1993 (以下 PSB と略記) に拠った。

⁸ カメン『寛容思想の系譜』、163～171頁。原本は Henry Kamen, *The rise of toleration*, London 1967.

⁹ チェスワフ・ミウオシュ『ポーランド文学史』（関口時正他訳）未知谷、2006年、66～71頁。

¹⁰ 『キリスト教大事典』日本基督教協議会文書事業部キリスト教大事典編集委員会編、教文館、1963年、667頁。

¹¹ 中山『近代ヨーロッパと東欧』、65～74頁を参照。

第1章 ポーランドにおける初期宗教改革と

ポーランド兄弟団の誕生

本章では、ポーランド兄弟団が誕生した時代背景を整理するため、宗教改革がポーランドに波及し、浸透していった過程を確認し、その中でポーランド兄弟団がいかにして誕生したのかを明らかにする。その導入として、1517年に始まったとされるヨーロッパの宗教改革の流れについても少し触れる。

1. 宗教改革のはじまり

宗教改革は、1517年、マルティン・ルターMartin Luther (1483-1546) が教会の扉に「95ヶ条の論題」を貼り出したことから始まったとされているが、それ以前から、カトリック教会に対する批判は存在した。古くは、12世紀に起こった異端であるヴァルド派¹²をそうした存在と見なすことができよう。14世紀後半になると、教会大分裂や聖職者の墮落などによって教皇庁の権威は失墜し、イングランドでジョン・ウィクリフ John Wycliffe (1320頃-1384) がカトリック教会を批判。次いで、その影響を受けたボヘミアのヤン・フス Jan Hus (1369-1415) が教会の腐敗を攻撃した。カトリック教会は3人の教皇の並立という異常事態を收拾するため、コンスタンツに公会議を召集。この公会議で、フスは異端宣告を受けて火刑に処せられ、死後30年経っていたウィクリフは、その墓を暴かれ、遺骸は燃やされた。

15世紀半ばから、印刷技術の向上によって多くの宗教書が発行されるようになった。聖書が唯一無二の権威と見なされるようになり、人文主義者たちは聖書から翻訳の誤りや余計な注釈などを取り除き、原文を復元する考証作業に取り組むようになった。こうした作業によって、彼らは、当時のカトリック教会の儀式や典礼が、聖書に則しているものばかりではないことに気づいた。彼ら人文主義者のうち、最もその名を知られたのが、ロッテルダムのエラスムス Erasmus (1467頃-1536) であった。エラスムスは福音書の教えに立ち返る必要性を示し、彼自身はカトリック教会に忠実でありつづけたものの、間もなく始まる宗教改革の指導者たちに大きな影響を与えた。

1515年、ローマ教皇庁の認可に伴い贖宥状の販売が開始された。規律の厳しいアウグス

¹² 1170年頃に全財産を貧しい人に分け与え、キリスト者として清貧を追求しようと活動したリヨンの商人ピエール・ヴァルド Pierre Valdo (1140-1206) の考えに共鳴し、集まった人々。教会権威を軽視し、説教活動を行なったとして1184年に破門されたが、地下活動を通してボヘミアを中心に散在し、生き延びた。

ティヌス修道会の修道僧であり、ヴィッテンベルク大学の神学教授であったルターは、1517年10月31日、贖宥状を攻撃する「95ヶ条の論題」をヴィッテンベルク城教会の扉にはり出した。これが、ルターとローマとの決別の日とされている。ルター論題はドイツ全土で大きな反響を呼んだ。反教権主義、聖職者の墮落に対する憎悪、教会財産への羨望などがまじり合い、ドイツ社会はルターの教えを熱狂的に受け入れていった。ルター自身は、ザクセン選帝侯フリードリヒ Friedrich III (1463-1525) の庇護をうけ、1522年には新約聖書のドイツ語訳を出版している。1524年には、ルターの影響を受けたドイツ西南地方の農民達が、賦役の軽減などを訴えて反乱を起こしたが、ルター本人はこれを批判、1525年に反乱は鎮圧された。しかし、宗教改革の勢いはとどまる所を知らず、反カトリック、反皇帝派の諸侯や都市を中心に推進されていった。ドイツに根をおろしたルター派は、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンなどの北欧諸国にも拡大していった。

ジャン・カルヴァン Jean Calvin (1509-1564) が宗教改革運動にその身を投じたのは1533年から34年にかけてのことだと言われている¹³。1536年3月にバーゼルで出版された『キリスト教綱要』によって知られたカルヴァンは、神の絶対性を徹底して強調、ルターの教えをカトリックに近すぎるとして否定し、独自の立場を築いていく。1541年、カルヴァンはジュネーヴにおいて教会改革を断行。以後この都市を中心に、宗教改革を指導していく。カルヴァン主義はネーデルラント、フランス、イングランド、スコットランドなど、ヨーロッパ中に広がっていった。

2. ポーランドにおける宗教改革

ポーランドの詩人、チェスワフ・ミウオシュ Czesław Miłosz (1911-2004) は、ポーランドにおける宗教改革の展開を次のように描写している。

ポーランドにおけるプロテスタンティズムの成長は急速で、規模も大きかったが、比較的短命に終わった。たとえば、1500年に生まれた人間を想定してみると、この人は、マルティン・ルターが有名な意見書を掲げて現れたとき17歳になっていたはずである。そしてポーランドとリトアニアでは、ドイツから来た新しい宗教上の理念にただちに反応したこと、そしてこの反応がカルヴァンの教えへの熱烈な注目に変わったことを見るであろう。この人は、49歳から64歳のあいだにポーランドでカルヴァン派が事実上の勝利をおさめ、議会でプロテスタントが多数を占めるのを見るであろう。だが、もしこの人が70歳ないし80歳に達したなら、プロテスタント運動

¹³ オリヴィエ・クリスタン『宗教改革』（佐伯晴郎監修、木村恵一訳）創元社、1998年、70頁。

の崩壊が目前に迫っている徴候に気づくだろう¹⁴。

ポーランドにおける宗教改革が、80年足らずで失速してしまったのは何故だろうか。この疑問は、ポーランド兄弟団の歴史を追っていくことで自然と明らかになるであろう。ここでは、シュラフタが大きな権力を握っていたことを、ポーランドにおける宗教改革の特徴と捉え、そうした環境でプロテスタント教会が、どのようにポーランドに流入し、勢力を拡大したかを確認する。

2-1. シュラフタの勢力拡大

15世紀末頃から、ポーランドでは、宗教改革受容の基盤が着々と形成されていった。つまり、ポーランドの特権階級であるシュラフタ *szlachta* の勢力拡大である。ポーランドの宗教改革は、他のヨーロッパ諸国と比べて極めて個性的な展開をしたように思われるが、シュラフタが政治的、経済的立場を強めたことが、その主な原因として挙げられるだろう。16—18世紀のポーランドは、「シュラフタ共和国」(*Rzeczpospolita szlachecka*)とも呼ばれており、シュラフタは王権をある程度制限するほどの力を持っていた。この時代のシュラフタの特徴としては、ポーランドの総人口に占める割合が非常に高かったことが挙げられるだろう。彼らは、多いときには総人口の10%弱を占めるほどの勢力を誇っていた¹⁵。

シュラフタは15世紀末から、その経済的、政治的立場を強固なものにしていったのだが、彼らの経済的立場を安定させた要因として、バルト海貿易の発展が挙げられる。当時、西ヨーロッパで人口の増大などによって穀物需要が高まると、東ヨーロッパからの安価な穀物が求められるようになった。バルト海に接する港町グダンスク *Gdańsk* を経由しての穀物の輸出は増加し、16世紀を通してその輸出量は10倍になったとも言われている。こうした状況を見たシュラフタを中心とした領主層は、穀物の増産のため、開墾などによる領主直営地の拡大を図った。また、労働力確保のため、様々な法によって農民を土地に縛りつけ、賦役を強化し、結果として、賦役農場制が発達した。このようにして得られたシュラフタ層の経済的安定は、彼らの政治的立場をも強めることとなった。

国政におけるシュラフタの権力は、1374年の「コシツェの特権¹⁶」(*Przywilej koszycki*)、1422年の「チェルヴィンスクの特権¹⁷」(*Przywilej czerwiński*)、1454年の「ニェシャヴァの特権¹⁸」(*Przywileje nieszawskie*)などを通して、徐々に大きなものになっていった。15

¹⁴ ミウォシュ『ポーランド文学史』、61頁。

¹⁵ 白木太一「近世ポーランドのシュラフタ文化とポルスコシチ」関口時正・田口雅弘編『フォーラム・ポーランド2005-2006年会議録』ふくろう出版、2007年、37頁。

¹⁶ ルドヴィク1世 *Ludwik I Węgierski* (在位1370-1382)が、次期ポーランド国王に自身の娘を即位させることを条件に、シュラフタに認めた免税特権。

¹⁷ いわゆる「人身保護律」。正規の判決なしには、国王といえどもシュラフタの財産を没収することはできないことが確認された。

¹⁸ 新たな課税、軍事動員には地方議会の承認を条件とする、という取り決め。

世紀末から、中流シュラフタが構成する地方議会から、全国的な問題を論議するために、ポーランドの全国議会であるセイム (Sejm) に代表を送るようになり、この地方議会の代表者たちが第二の議院を形成した。元老院 (上院) を構成していたのは、高位聖職者 (大司教、司教) と政府高官 (大法官、宮内長官など) 及び地方高官 (知事、城代など) であり、1504 年には 87 名が出席していた¹⁹。一方、代議員 (下院) はそれぞれの地方から 2 名ずつ、40 人ほどのシュラフタの代表者で構成されていた²⁰。この二院制議会の原則が確立したのは 1493 年のことである。1505 年には、「ニヒル・ノヴィ法」(Nihil novi) が採択され、国王は上下両院の合意がなければ法律を制定することができなくなった。これは、二院制議会を公式に承認するものだった。こうして、シュラフタは、政権を握っていた教会やマグナートと対立しながら、「シュラフタ共和国」を築いていった。

16 世紀初頭、上院を基盤としたズィグムント 1 世 Zygmunt I Stary (在位 1506-1548) の政策に不満を持ったシュラフタは「法令執行運動」(Ruch egzekucyjny) を始めた。この運動は、過去に定められたものの、正しく守られていない法令の公正な執行を要求するという形を取って始められた。ズィグムント 1 世が死去し、ズィグムント 2 世アウグスト Zygmunt II August (在位 1548-1572) の統治が始まるとさらに活発になり、下院を中心に、反王権、反マグナートの特徴を帯びるようになったこの運動は、財政、軍事などの分野における改革をも要求するようになった。さらに、カトリック教会もその批判の対象となった。当時、ポーランドの聖職者は非常に裕福であり、様々な特権を有していた。ポーランドにおける耕作可能な土地の約 10% はカトリック教会に属していたという²¹。カトリック聖職者の財産については、つぎのような記述がある。

例えば、クラクフの司教は、自身の司教区に属する 225 の村に 49 の荘園と 17 の邸宅を所有していたし、グニェズノの大司教は 1521 年に 292 の村に 74 の荘園を持ち、ヴロツワフのある司教は 1534 年、161 の村に 35 の荘園を所有していた²²。

また、宗教改革前から、ポーランド聖職者の墮落は、他のヨーロッパの国々の例にもれずひどいものだった。カトリック聖職者のこうした墮落や富、教会裁判権などに代表される大きな権力に不満を持ったシュラフタたちは、聖職者に国防費を負担させること、カトリック教会の司法権を制限することなどを訴えた。さらに、カトリック内部からの批判も存在した。1550 年、プシェミスル Przemyśl 司祭であったスタニスワフ・オジェホフスキ Stanisław Orzechowski (1513-1566) は、聖職者の妻帯禁止に反対を示した。プシェミスル

¹⁹ 白木太一『近世ポーランド「共和国」の再建 四年議会と五月三日憲法への道』彩流社、2005 年、44 頁。

²⁰ ステファン・キェニエーヴィチ編『ポーランド史』(加藤一夫・水島孝生訳) 1、恒文社、1986 年、172-173 頁。

²¹ Zenon Gołaszewski, *Bracia polscy*, Toruń 2004, s. 42.

²² Zbigniew Ogonowski, *Arianie polscy*, Warszawa 1952, s. 37.

司教ヤン・ヂャドゥスキ Jan Działowski (1496-1559) の警告にも拘らず、オジェホフスキは多くのシュラフタやマグナートの支持を得、翌年、結婚に踏み切った。ヂャドゥスキは彼を破門し、国外追放を試みたが、強力なマグナートの反対により、失敗に終わった。このように、カトリック教会を牽制して権力の獲得を求めるシュラフタと、高位聖職者の墮落に不満を持つ下位聖職者の利害が一致し、そこにポーランドでの勢力拡大を目指すプロテスタントが加わることで、ポーランドにおける宗教改革は展開していった。

2-2. プロテスタントの流入

プロテスタントの第一波として、ルター派が、ドイツとの結びつきが強いバルト海沿岸部やシロンスク Śląsk 地方、ヴィエルコポルスカ Wielkopolska 地方などを中心に、ポーランドに流入した。1525 年には、グダンスクを中心とした王領プロイセン Prusy Królewskie において、市長の圧制に抵抗する農民一揆が起こった。彼らはラテン語のミサを廃止しドイツ語で行うことなども要求していた。この一揆が掲げたスローガンは、まさにその当時ドイツで起こっていた農民戦争においてみられたような、ルター派の色彩を帯びていた。また、この時までには、当時のドイツ騎士修道会の総長、アルブレヒト・フォン・ブランデンブルク=アンスバッハ²³ がルター派に改宗している。こうしたことから、1520 年初頭には、ルター派はすでにポーランドに流入していたと推定できよう。ルター派は、ドイツ系都市民の間で強い支持を得ることに成功したが、そのドイツ的で、世俗君主と結びつきの強い性格を嫌ったシュラフタ層にはあまり浸透しなかった。従って、ルター派の主な活動地域がプロイセンを越えて広がることはなかった。

1540 年代になると、フス派の流れを汲むボヘミア兄弟団やカルヴァン派がポーランドへと流入する。1548 年 6 月、シュマルカルデン戦争²⁴の結果祖国を追われたボヘミア兄弟団の一派がポズナンへやってきた。ポズナン Poznań 司教のベネディクト・イズドビェンスキ Benedykt Izdbiński (1488-1553) は、2 ヶ月後の 8 月にはすでに国王ズィグムント・アウグストから、彼らをヴィエルコポルスカから追放するようという命令を受けた。彼らはその後、プロイセン公国 Księstwo Pruskie へと移動するが、そこではルター派からの迫害を受け、ヴィエルコポルスカへと戻り、秘密裡に礼拝を行いつつ、徐々に信者を獲得していった。彼らがポーランドで生き延びることができたのは、レシュチンスキ家 Leszczyńscy、グルカ家 Górkowie、オストロルク家 Ostrorogowie などのヴィエルコポルスカ地方の有力なマグナートたちが彼らを保護したためだった。また、彼らの持つ反ドイツ的な性格は、

²³ Albrecht von Brandenburg-Ansbach (1490-1568) : ドイツ騎士修道会の最後の総長。1525 年の世俗化の後には、プロイセン公 (在位 1525-1568) となる。なお、アルブレヒトのルター派改宗の経緯については、阿部謹也『ドイツ中世後期の世界』(阿部謹也著作集第 10 巻)、筑摩書房、2000 年、397-412 頁に詳しい。

²⁴ カトリックを支持する神聖ローマ皇帝と、プロテスタント諸侯たちが結成したシュマルカルデン同盟との間で争われた戦争。1546 年に勃発し、1547 年にプロテスタント諸侯の敗北で幕を閉じた。ルター派との連合による独立教会の設立というボヘミア兄弟団の企ては、この敗北によって頓挫してしまった。

ポーランド人に受け入れられやすかった。ポーランド人の反ドイツ感情の助けを借りて、ボヘミア兄弟団は勢力を拡大していった。1557年までにヴィエルコポルスカに30の教会が建てられた。また、三十年戦争が始まると、再びボヘミア兄弟団がポーランドへ流入した。彼らはレシュチンスキ家の保護を受け、その所領レシュノ Leszno に住み込んだ。1518年には300世帯だったレシュノの人口は、1568年には2000世帯にまで増加したという²⁵。

一方でカルヴァン派は、主にマウオポルスカからポーランドへ浸透した。カルヴァン派は、ルター派を嫌ったシュラフタ層を大きく惹きつけ、ポーランドの宗教改革の中心となった。カルヴァン派をカトリック教会批判の道具として捉えたシュラフタは、挙って改宗を始めた。リトアニアでは、強力なマグナートであるラヂヴィウ家 Radziwiłłowie がカルヴァン派のパトロンとなった。16世紀末には16-20%のシュラフタがカルヴァン派へ改宗したといわれている。彼らは国会においても、大きな勢力を誇った。1562年にはカルヴァン派が正統カルヴァン派である「大教会」(Ecclesia Major) と反三位一体派の「小教会」(Ecclesia Minor) とに分裂し、ポーランドの宗教改革は新たな局面を迎えることになる。

しかし、大半のシュラフタ層にとって、カルヴァン派はカトリック教会を牽制するための道具でしかなかったという改宗動機の不純さ、また、プロテスタントが総じて農民層には受け入れられなかったという事実が、ポーランドにおける宗教改革の弱点となり、後の対抗宗教改革の成功を導く結果となった。

2-3. ポーランドにおけるプロテスタントの勃興

ポーランドにおける宗教改革に大きな影響を与えた人物として、エラスムスの名が挙げられる。彼は16世紀のヨーロッパにおいて大きな名声を博しており、ポーランドの知識人たちもみな、彼に尊敬の念を抱いていた。エラスムス自身は、カトリックを捨てることはなく、教会の分裂に反対する立場を取った。熱心なエラスムス主義者の中には、後にポーランドにおける対抗宗教改革の指導者となるホズィウシュ枢機卿 Hozjusz (1504-1579) などのようなカトリックの有力者がいる。一方、エラスムスは、宗教改革初期にはルターに好意的な態度をとったことが知られており、また、弟子であるヤン・ワスキ Jan Łaski (1499-1560) がポーランドにおける宗教改革の第一人者として、ホズィウシュと対立したように、エラスムスが宗教改革に大きな影響を及ぼしたことも確かである。

ヤン・ワスキは裕福なシュラフタの家に生まれ、彼の叔父であり、彼と同名のヤン・ワスキ Jan Łaski (1456-1531) は、ポーランドの首座大司教であった。ワスキはウィーンやボローニャ大学、パドヴァ大学で神学、ラテン語、ギリシア語、ドイツ語、イタリア語などを学び、ポーランドに戻るとカトリック聖職者となった。1525年にはバーゼルに赴き、エラスムスのもとに数ヶ月滞在している。彼はエラスムスの影響で、教会の改革を志すようになり、1540年頃から、プロテスタントの活動家として、イングランドなどで活躍をし、ジ

²⁵ Tazbir, *Reformacja*, s. 81.

ヨン・ア・ラスコの名で著名になる。1556年にポーランドに戻ると、彼はカルヴァン派教会を組織し、その指導者として、ポーランドにおけるすべてのプロテスタント、つまりカルヴァン派、ルター派、ボヘミア兄弟団の統合を目指したが、1560年、志半ばで死去した。彼の死の後、ポーランドにおける宗教改革の勢いは失速していくこととなる。

16世紀半ば、ルター派の大学への留学を禁じた王の勅令にも拘わらず、ポーランド人学生の多くがヴィッテンベルク大学に留学した。1546年のルターの死と1547年のカール5世 Karl V (在位 1519-1556) によるヴィッテンベルク占領²⁶の後には、ポーランドにおける改革派教会の学問の中心は1544年にケーニヒスベルク²⁷ Königsberg に建設された大学に移る²⁸。また、宗教改革運動と結びついて、ポーランド語が神学に使用されるようになり、1552年と1563年には聖書のポーランド語訳が生まれた。1564年にはカルヴァン主義者のヤン・モンチンスキ Jan Mączyński (1520-1584頃) によるラテン語・ポーランド語辞典、1568年にはアリウス派のピョートル・スタトリウスによるポーランド語の文法書が発行された。また、ピンチュフ Pińczów のカルヴァン派のアカデミーやグダンスク、トルン Toruń、エルブロンク Elbląg のルター派の学校などでは、教科としての「ポーランド語」が扱われるようになった。また、「ポーランド文学の父」とも呼ばれたミコワイ・レイ Mikołaj Rej (1505-1569) のような偉大な文学者の支持を受け、プロテスタントはさらに勢いを増していった。また、カトリックのシュラフタも、状況が許せば躊躇無くプロテスタントを支持することがあったのも、ポーランドの特徴だといえる。

3. ポーランド兄弟団の誕生

ポーランド兄弟団はカルヴァン派から分裂する形で誕生した。彼らの誕生までには、ポーランドに反三位一体思想を根付かせようとする、先駆者たちの地道な努力があった。ここでは、ポーランド兄弟団が成立した過程を概観するが、それにはまず、ポーランドに対するイタリアの影響について触れておく必要があるだろう。

²⁶ シュマルカルデン戦争最中の1547年、カール5世がミュールベルクの戦い Schlacht bei Mühlberg でプロテスタント諸侯の中心人物であったザクセン選帝侯ヨハン・フリードリヒ Johann Friedrich (在位 1532-1547) を破った。ヨハン・フリードリヒは選帝侯の地位を奪われ、ヴィッテンベルクを含む領地を失った。

²⁷ 現在のロシア領カリーニングラード Калининград。当時はドイツ語圏プロイセン公国領であったことを踏まえ、本論では大学名をケーニヒスベルク大学と表記する。ポーランド語名はクルレヴィエツ Królewiec。

²⁸ 伊勢田奈緒「ポーランドにおける宗教改革運動の受容についての一考察」『和泉短期大学研究紀要』第25号、2004年（以下「ポーランドにおける宗教改革運動」と略記）、107頁。

3-1. イタリア文化の流入

ポーランド兄弟団がカルヴァン派から分裂するきっかけとなったのは、反三位一体思想であった。ポーランドにこの思想が流入した経路は恐らく一つではないが、イタリアの影響は非常に大きかったと考えられる。

イタリアにおける反三位一体派の形成には、1553年のカルヴァンによるミカエル・セルヴェトゥス Michael Servetus (1511-1553) の処刑が影響している。この出来事についての詳しい説明は後に譲り²⁹、ここでは、セルヴェトゥスが奉じた反三位一体思想が、彼の死やその後の論争によってヨーロッパ各地、特にイタリアに浸透したという事実を確認しておく。

1518年、国王ズィグムント1世がミラノ公の娘、ボナ・スフォルツァ Bona Sforza (1494-1557) を妃として迎えたことをきっかけに、イタリアのルネサンス文化がポーランドに流入することになった。イタリアの宮廷人、聖職者、建築家、画家などがポーランドへ押し寄せたのだが、その中にはセルヴェトゥスの流れを汲む反三位一体派の人々も含まれていたと予想することができる。少なくとも、ポーランドとイタリアの交流が活発化し、行き来が容易になったことは間違いない。イタリアの大学に留学したポーランド人の中にも、反三位一体思想に染まって帰国する者がいた。14世紀のパドヴァ大学におけるポーランド人学生数は全学生の1%に満たなかった³⁰ようだが、16世紀には、全学生の4分の1をポーランド人留学生在が占めることもあった³¹という。ここにも、ポーランド＝イタリア間の交流の活発化を見ることができる。イタリアに限らず、当時のシュラフタは子供を留学させることに積極的だった。この様子を、ミウオシュは次のように記している。

ポーランド人の紳士は、勉学のため外国に旅行しなければ一人前とみなされなかった。彼らは普通、北イタリアの大学で学んだが、プロテスタントへの関心からヴィッテンベルク、チューリヒ、バーゼルなどに行く者も少なくなかった³²。

ボナ王妃自身はカトリック教徒であったが、彼女がもたらしたイタリアのルネサンス文化の影響を多分に受けた息子ズィグムント・アウグストのもとで、ポーランドが「寛容の国」という名声を得るに至ったことや、イタリアとの交流が盛んになったことが、反三位一体思想がポーランドに浸透する助けとなったことに着目すれば、彼女は図らずもポーランド兄弟団の誕生に大きく貢献してしまったと言えよう。

²⁹ 第4章、第5章を参照。

³⁰ 児玉善仁『イタリアの中世大学：その成立と変容』名古屋大学出版会、2007年、343-344頁。

³¹ 中山『近代ヨーロッパと東欧』、79頁。

³² ミウオシュ『ポーランド文学史』、59頁。

3-2. ポーランド兄弟団の誕生

ポーランドに反三位一体思想を根付かせようと尽力した先駆者達は、1530 年前後に生まれた世代だった。こうした人々の足どりを辿ることで、ポーランド兄弟団誕生の経過を概観したい。

ピョートル・ズ・ゴニョンヅァはゴニョンツ Goniądz という小都市の非シュラフタ階級の家に生まれた。彼はクラクフ大学で学び、イタリアのパドヴァ大学へ留学した際、同大学の法学教授であったマッテオ・グリバルディ Matteo Gribaldi (1506-1564) と出会った。セルヴェトゥスの信奉者であり反三位一体思想を奉じていたグリバルディは、セルヴェトゥスの著述を紹介するなどして、ピョートル・ズ・ゴニョンヅァが反三位一体派に転じるきっかけとなった。彼は、1555 年にポーランドへ帰国する途中、モラヴィアを通った際にアウステルリッツ³³ Austerlitz のモラヴィア兄弟団を訪ねた。彼らはドイツ農民戦争の後に祖国を追われた再洗礼派の団で、当時 2000 人ほどが 100 人から 400 人単位のいくつかの共同体に分かれ³⁴、原始教会を模範とした、質素で敬虔な原始共産主義的生活を営んでいた。また、彼らは暴力反対の趣旨で木製の剣を帯びていた。ズ・ゴニョンヅァは彼らの影響を受け、反三位一体思想に加えて再洗礼主義をも受け入れ、彼らに倣って腰に木製の剣を携えてポーランドに帰国した。

彼はカルヴァン派のパトロンだったリトアニアのミコワイ・ラヂヴィウ・チャルニ Mikołaj Radziwiłł Czarny (1515-1565) の庇護を受け、リトアニアでカルヴァン派の聖職者となった。1556 年 1 月、マウオポルスカ地方のセツェミン Secemin に召集されたカルヴァン派宗教会議において、彼は反三位一体派としての立場を表明し、カルヴァン派教会を混乱に陥れた。この出来事は、ポーランドにおける反三位一体派の存在の最初の表面化と捉えることができ、ポーランド兄弟団自体はまだ存在していなかったものの、その歴史はここから始まったとも言える。ポーランドのカルヴァン派はズ・ゴニョンヅァをメランヒトン Philipp Melancton (1497-1560) のもとに送ることで、考えを改めさせようと考えた。この年の 2 月には、彼はすでにヴィッテンベルクに到着し、メランヒトンとの討論を求めたが、彼の思想は異端視され、町から追放された。12 月にはカルヴァン派宗教会議にて、彼の破門が決定された。その後も彼はリトアニアを中心に、熱心に布教活動を行なった。

ジョルジョ・ビヤンドラータは、ポーランドの三位一体派のみならず、トランシルヴァニアにおけるユニテリアン派の形成にも大きな役割を果たした人物である。彼は 1550 年代初めに、ボナ王妃や、ハンガリー王サポヤイ・ヤーノシュ Szapolyai János (在位 1526-1540) の死後未亡人となったイザベラ・ヤギェロンカ³⁵ に仕えるため、ポーランドとトランシルヴァニアを訪れていた。その後、親友のアルチャーティ Gianpaolo Alciati (?-1581) と共に、パドヴァにカルヴァン派の共同体組織しようと試み、その結果迫害を逃れるために 1557

³³ 現在のチェコ領スラフコフ・ウ・ブルナ Slavkov u Brna。

³⁴ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 52.

³⁵ Izabela Jagiellonka (1519-1559) : ズィグムント 1 世とボナの娘であり、ズィグムント 2 世の実姉にあたる。

年にジュネーヴへ逃亡した。セルヴェトゥスの処刑直後のジュネーヴにいた多くの反三位一体派の影響で、ビヤンドラータは反三位一体説を奉ずるようになり³⁶、カルヴァンと対立。無慈悲な宗教改革者を恐れ、1558年にポーランドへ逃れてきたのだった。彼は、ポーランドでは反三位一体思想を直隠しにかくし、熱心なカルヴァン派の医師として活動した。こうした基盤作りが功を奏し、彼はカルヴァン派の指導者だったヤン・ワスキから信頼を得、彼の計らいによってミコワイ・ラヂヴィウ・チャルニと知り合うことができた。1559年の春、国王ズィグムント・アウグストに命じられ、ビヤンドラータはトランシルヴァニアで床に伏していたイザベラ・ヤギェロンカの侍医となり、彼女が1559年9月に死去するまで、トランシルヴァニアで看病を続けた。ヤン・ワスキが他界した後のポーランドに戻ったビヤンドラータは、1560年9月14日から19日にかけて召集されたカルヴァン派宗教会議において長老に選出され、カルヴァン派運動の指導的立場に立つと共に、慎重に反三位一体思想を広めていった。

ミコワイ・ラヂヴィウ・チャルニは、ビヤンドラータを気に入っていた一方で、プロテスタント運動を擁護するマグナートの中心人物として、カルヴァンとの関係も重要視していた。1560年、カルヴァンがラヂヴィウに宛てた書簡においてビヤンドラータを批判した際、ラヂヴィウは両者の調停者となることを決意した。1561年7月、彼はカルヴァンへの使者として、マルチン・チェホーヴィツを選んだ。チェホーヴィツは当時、ラヂヴィウの招きに応じて、ヴィルノ³⁷ Wilnoのカルヴァン派教会に新しく設置された学校に教師として赴任していた。彼はビヤンドラータやピョートル・ズ・ゴニョンヅアの影響を受けた反三位一体主義者であった。ラヂヴィウからカルヴァンに宛てられた書簡を預かったチェホーヴィツは、10月9日にカルヴァンと面会した。チェホーヴィツが預かったこの書簡は、ビヤンドラータを擁護するもので、カルヴァンが理不尽にビヤンドラータを侮辱しているという主張が遠まわしに書かれていた。また、カルヴァンのビヤンドラータに対する態度はキリスト教の指導者として相応しいものではない、という批判までもがなされた³⁸。しかし、ポーランドの大貴族からの手紙も、カルヴァンを納得させることはできなかった。チェホーヴィツの任務の失敗は、ポーランド史におけるカルヴァン派の転換点となった。この出来事をきっかけに、ビヤンドラータの信奉者たちはカルヴァンからますます離れていったのである。チェホーヴィツはモラヴィアの再洗礼派のもとに立ち寄ってからポーランドに戻り、反三位一体論の布教活動に努めた。

1562年4月2日、ビヤンドラータはピンチュフに召集されたカルヴァン派宗教会議において反三位一体主義の色彩を帯びた信仰告白を行なった。聴衆からの圧倒的な支持によって、ポーランドに反三位一体思想が根付いたことを確信すると、ビヤンドラータはイタリアからアルチャーティやヴァレンティーノ・ジェンティーレ Valentino Gentile (1520頃-1566)

³⁶ パドヴァ大学で学んだ際、グリバルディの影響で反三位一体論に傾いたとの情報もある。『キリスト教人名事典』日本基督教団出版局、1986年、1166頁を参照。

³⁷ 現在のリトアニアの首都ヴィリニウス Vilnius。

³⁸ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 55.

などの反三位一体主義者たちを招き、自身はトランシルヴァニア公ヤーノシュ・ジグモンド János Zsigmond (1540-1571) に仕えるべくポーランドを離れた。ますます混乱するカルヴァン派教会に、グジェゴシュ・パヴェウの改宗が追い討ちをかけた。彼は1557年8月に、当時の首都クラクフで最初のカルヴァン派伝道師となったことで知られていた³⁹。ビヤンドラータの支持者であった彼は、1562年に反三位一体派へと転じ、カルヴァン派の中心人物であるスタニスワフ・サルニツキ Stanisław Sarnicki (1532頃-1597) が唱える三位一体論を激しく攻撃した。

セルヴェトゥスに代表される敵対者の粛清によってカルヴァンが不寛容な宗教指導者として知られるようになると、ポーランドのカルヴァン主義者の中にはそれに嫌悪を示す者が多く現れた。さらに、ビヤンドラータやグジェゴシュ・パヴェウのような強力なカリスマ性を持った反三位一体派の先駆者たちの地道な布教活動の成果が実り始めたことによって、カルヴァン派教会内は混乱した。そして、1562年4月にビヤンドラータが反三位一体の信仰告白を行なったことに加え、同年8月にグジェゴシュ・パヴェウが反三位一体説を唱えたことで、これに賛同したニェモイェフスキ、フィリポフスキ、クロヴィツキ、ショーマンなどといったシュラフタがサルニツキに対抗の意を示した⁴⁰。こうして、反三位一体派のカルヴァン派からの分裂は決定的となった。正統カルヴァン派に対して「小教会」と呼ばれた反三位一体派は、後に自らを「ポーランド兄弟団」と名乗るようになった⁴¹。

分裂による混乱をおさめようと、カルヴァン派は何度も宗教会議を召集し、反三位一体主義者たちを論破しようと試みた。しかし、反三位一体論者たちは概して、国内外の大学で一流の教育を受けた当代随一の知識人であり、聖書を唯一の信仰の源とした自らの信念に確信を抱いていた。こうした人物が多く参加したことにより、小教会は大きく成長していくことになる。

³⁹ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 57.

⁴⁰ Ludwik Chmaj, *Bracia polscy: ludzie, idee, wpływy*, Warszawa 1957 (以下 *Bracia polscy* と略記), s. 17-18.

⁴¹ カルヴァン派教会の分裂に関しては諸説ある。ゴワシェフスキは、1562年8月18日に召集されたピンチュフの宗教会議を分裂きっかけとし、11月4日にはポーランド兄弟団の第一回宗教会議が召集されたとしている [Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 57-58]。それに対し、オゴノフスキは、8月に行なった反三位一体派宣言を取り下げるように求められたグジェゴシュ・パヴェウがそれを拒んだ、1562年10月のクラクフにおけるカルヴァン派宗教会議を分裂の時期としている [Ogonowski, *Arianie polscy*, s. 57-58]。また、中山昭吉は、1565年3月のピョートルクフ開催のカルヴァン派教会会議でチェホーヴィツ、ブドニ、グジェゴシュ・パヴェウ、クロヴィツキなどがカルヴァン派教会を離れ、6月に反三位一体派教会会議を開催したとしている [中山『近代ヨーロッパと東欧』、82頁]。カルヴァン派分裂の時期に関しては、その他に1562-1563年にかけて [Zbigniew Ogonowski, *Socynianizm polski*, Warszawa 1960, s. 7]、1562-1565年にかけて [Wacław Urban, „Znaczenie społeczno-kulturalne braci polskich i ich stolicy – rakowa”, w: Zbigniew Ogonowski, *Arianizm w polsce*, Warszawa 1972, s. 48] など、特定されないことも多いことから、ビヤンドラータやグジェゴシュ・パヴェウがおおやけに反三位一体論を展開し始めた1562年以降、カルヴァン派教会からの信者の流出が断続的に起こったのだと考えるのが妥当であろう。ただし、ゴワシェフスキ、フマイ、中山などには情報の交錯と思われる記述が見られるため、その解決は今後なされねばならない。

第2章 形成期ポーランド兄弟団

前章ではポーランド兄弟団誕生までの経緯を確認した。カルヴァン派教会から分裂したポーランド兄弟団は、再洗礼派の特徴を持つ反三位一体派であった。しかし、三位一体説への反対のみが教義上の一致点であった彼らにとって、教義の統一は急務であった。初期のポーランド兄弟団を指導したのは、平民層出身の急進派であったが、シモン・ブドニヤパレオログスとの論争を経て、徐々にシュラフタ層の穏健派が主導的立場を獲得し始める。そして、イタリアからファウスト・ソツィーニが登場するに至ってようやく、「成熟した異端⁴²」としてのポーランド兄弟団が誕生する。本章で扱うのは、ポーランド兄弟団が誕生してからソツィーニが登場し、彼らの活動が全盛期に向かうまで、つまり 1563 年から 16 世紀末までである。

1. 歴史背景

ポーランド兄弟団の形成期にあたる 16 世紀後半は、「寛容の国」ポーランドの最盛期と一致する。この時代ポーランドを治めたのは、ズィグムント 2 世（在位 1548-1572）、ヘンリク・ヴァレーズィ Henryk Walezy（在位 1573-1574）、ステファン・バトーリ Stefan Batory（在位 1576-1586）、ズィグムント 3 世 Zygmunt III（在位 1587-1632）であった。ズィグムント 2 世の治世末期、ポーランドはモスクワ大公国と対立関係にあった。1563 年、ズィグムント 2 世はモスクワ大公国との戦争における協力援助要請の代わりに、ホーエンツォレルン家にプロイセン公位継承権を認め、プロイセン併合の可能性を失った。一方、モスクワ大公国の脅威は高まり、リトアニアは一国では大公国の圧力に抵抗できなくなったため、ポーランドとのより密接な連合が進められ、1569 年、「ル布林合同」（Unia lubelska）によって、ポーランド=リトアニア連合国家が誕生した。

この頃、隣国のトランシルヴァニア公国では、宗教寛容令が發布され、ビヤンドラータの影響を受けた歴史上唯一のユニテリアン主義者の支配者、ヤーノシュ・ジグモンドが誕生していた。

ズィグムント 2 世が嫡子を残さずに死亡したことで始まった空位期には、ワルシャワ連盟協約が成立し、その後のポーランドの運命を大きく変える選挙王制が開始された。初めての選挙によって選出されたヘンリク・ヴァレーズィは、著しく制御された王権に我慢できず、わずか 4 ヶ月でフランスへ逃げ帰ってしまった。この空位期については第 4 章で詳しく述べる。

⁴² パーク『ユニテリアン思想の歴史』、48 頁。

2 回目の選挙は、大きく荒れた。元老院は次期国王に神聖ローマ皇帝マクシミリアン 2 世 Maximilian II (在位 1564-1576) を挙げ、首座大司教ヤクブ・ウハンスキ Jakub Uchański (1502-1581) がこれを承認した。しかし、これに対してシュラフタが反対、法令執行運動の活動家であり、代議員の議長を務めていたミコワイ・シェニツキ Mikołaj Sienicki (1521 頃-1581) やヤン・ザモイスキ Jan Zamoyski (1542-1605) が中心となり、トランシルヴァニア公のバートリ・イシュトヴァーン Báthory István (在位 1571-1575) を推薦した。ポーランド兄弟団の信徒であったシェニツキにとって、ユニテリアン派が承認されているトランシルヴァニアの君主であったバートリは好ましい存在であり、ハプスブルク嫌いという点でザモイスキと利害が一致していた。結果、ズィグムント 2 世の妹、アンナ Anna Jagiellonka (1523-1596) が国王に選出され、バートリがアンナと結婚することで、ポーランド王ステファン・バトリーとして即位することとなった。バトリーの国王選出に際してシェニツキが重要な役割を果たしたことで、バトリー王の治世の間、ポーランド兄弟団は過度な迫害を免れることができた。

バトリー王の後継者は、彼の甥であり、スウェーデン王家出身のズィグムント 3 世であった。1596 年にワルシャワ遷都を行なったことでも知られる彼は、父であるスウェーデン王、ヨハン 3 世 Johan III (在位 1568-1592) の死後、その後を継いでスウェーデン王位についた。しかし、プロテスタント国であるスウェーデン国内では、カトリック教徒である新国王の気持は低く、1598 年には摂政となっていた叔父のカール Karl (1550-1611) が国民を率いて反乱を起こした。ズィグムント 3 世はこの反乱を鎮圧するためにスウェーデンに遠征したが、反乱軍に破れ、王位を剥奪されてしまう。この敗北後、ズィグムント 3 世はスウェーデン王位を求め続けることになる。

2. ポーランド兄弟団

初期のポーランド兄弟団を指導したのは、グジェゴシュ・パヴェウ、マルチン・チェホーヴィツなどを中心とした、マウオポルスカの平民層を出身とする急進派であった。当初、その組織や教義はまだ定まっておらず、従ってそうした問題の整備が早急の課題となった。まず、彼らの組織形態を確認した後、初期のポーランド兄弟団の活動をみていく。

2-1. ポーランド兄弟団の組織

ポーランド兄弟団はカルヴァン派から分裂したため、カトリック教会がとっていた監督制を採用せず、恐らくはカルヴァン派教会のシステムを引き継いだ。つまり、教職と信徒の代表者によって組織される宗教会議が教会の指導、運営にあたる長老制である。また、特定の区域の聖職者を監督する役職として、監督者といわれる聖職位が存在した。ポーラ

ンド兄弟団の宗教会議は3つに分けられる。スィノド(総会議)、スィノデク⁴³(地方会議)、コンヴェントである⁴⁴。

スィノドが召集されるのは原則一年に一回であったが、重要な問題が発生した場合、例外的に数回開かれることもあった。聖職者および長老は参加が義務付けられており、その時々の特に重要な問題について議論する場合には、一般の信徒が参加することもあった。スィノドの議題にのぼったのは、彼らの教義に関する問題、教会の維持や国内外の新しい教会の建設についてなどであった。また、出版活動にも積極的であった。特定の人物に執筆を依頼し、それに見合った謝礼を支払い、内容について審議し、校正し、印刷した。教会に付属する学校の教師の選定もスィノドが行なった。ポーランド兄弟団は教育に非常に力を注いでおり、貧しい若者を学校に無償で受け入れたり、奨学金によって国外への留学を援助したりした。その他、新しい聖職者の任命や赴任地の指示、貧しい人や、聖職者の未亡人とその子供、不慮の事故による怪我人への生活必需品の最低限の保障、投獄されたり捕虜になったりした同胞を買い戻す試みなどを行なった。その例として、グダンスクの反三位一体派の代表者であるクシシュトフ・オストロトの母と姉妹の救出が挙げられる。1586年10月、彼女たちは、故郷であるニーダーザクセン地方のゴスラーGoslarにおいて、三位一体派の布教活動を行なったことで投獄されてしまった。その際、スィノドは使節としてアンジェイ・ルビェニェツキを派遣している。彼はステファン・バトーリ王の側近という大人物であったため、調停は成功し、彼女たちはすぐに解放された。

スィノデクには、スィノドに任命された代表者がその運営のために派遣された。話し合われる問題は、地方の社会問題に限定された。

コンヴェントには聖職者のみが参加し、スィノドに提出する運営上の問題について議論が行なわれた。しばしば、このコンヴェントはポーランド兄弟団の神学者によるセミナーとして利用されることがあり、その際には多くの講義や議論が行なわれ、次世代の神学者が育成された。

2-2. 三位一体に関する議論

カルヴァン派教会は、信徒の数では小教会を圧倒していたが、シュラフタが大半を占め、聖職者は少なかった。一方小教会は、その規模は小さかったが、個々の知識人の質は、ポーランド・リトアニアのあらゆるプロテスタントの指導者たちをも凌いでいた。

カルヴァン派教会の分裂直後、シュラフタ達は様々な場所で三位一体の問題などを中心とした議論を交えた。国会では、数日間続く審議の合間を利用して、こうした論議が展開

⁴³ ポーランドでは国会をセイムと言い、地方議会のことを「小さな国会」という意味のセイミク (Sejmik) と呼ぶ。同じように、ポーランド兄弟団の地方会議は総会議スィノド (Synod) に対してスィノデク (Synodek) と呼ばれたようだ。スィノドとは、キリスト教の司教会議、宗教会議という意味で、特別な単語ではないのだが、他の宗派の宗教会議と区別するため、こう表記する。

⁴⁴ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 58.

された⁴⁵。1562年、ピョートルクフ *Piotrków* での国会の合間に行なわれていた討論に、執行運動の指導的立場にいたヤン・ニェモイエフスキが参加。彼はサルニツキとグジェゴシュ・パヴェウのやり取りを見て、パヴェウの考えに感銘を受けた。クヤーヴィ *Kujawy* 地方のイノヴロツワフ *Inowrocław* の地方法廷判事であったニェモイエフスキは、クヤーヴィに戻るとすぐに反三位一体説を広め、所領にポーランド兄弟団の教会を建設した。この頃、彼らの教会は至る所に建てられた。また、かつてスタニスワフ・オジェホフスキと共にカトリック教会の腐敗を批判したカトリック司祭マルチン・クロヴィツキ *Marcin Krowicki* (1501頃-1573) などのような知識人たちが多くポーランド兄弟団に迎え入れられた。

ポーランド兄弟団は三位一体の教理を否定するという点では考えが一致していたが、それぞれの位格の捉え方については2つのグループに分かれていた。グジェゴシュ・パヴェウは三神論——すなわち、三位を別個の存在として捉え、父なる神をその最も上位に据える——を唱えた。それに対し、聖霊を除外した2つの位格に神性を認め、父なる神を子なる神の上位に置く二神論を唱える人々もいた。1564年初め、もう一つの反三位一体教理が出現した。それは、神の単一性を主張し、聖霊の位格自体を否定、キリストは当初は単なる人であり、死後復活してようやく神格を得るに至ったのだと見なす考え方だった。トランシルヴァニアにその源流を求めることができる反三位一体派は、1560年代後半からユニテリアンと呼ばれるようになった。ポーランド兄弟団の間では、この3つの考え方がしばらくの間並立したが、トランシルヴァニアですでにこの教理を受け入れていたビヤンドラータの薦めもあり、1566年にはグジェゴシュ・パヴェウを中心とする多数派がユニテリアン主義を受け入れた⁴⁶。

1567年6月、マゾフシェ *Mazowsze* 地方のスクシンノ *Skrzynno* にシノドが召集され、共通の反三位一体教理を打ち立てるための話し合いが行なわれた。すでに多くの者はユニテリアン主義を受け入れていたが、スタニスワフ・ファルノフスキを中心とする少数派は、キリストの神性を否定することができないでいた。ポーランド・リトアニアから100人を超える人々が集まったこの会議の議長は、ヒエロニム・フィリポフスキが務めた。彼は王室の財務大臣 *Skarbnik* を務めていた、国会では有名な代議士であり、シュラフタから篤い支持を得ていた。討論は5日間続いたものの、終に合意には至らなかった。1569年3月、マウオポルスカの全プロテスタントの参加を要請する宗教会議がポーランド東部の町ベウジツェ *Bełżyce* に召集された。これは、カルヴァン派とポーランド兄弟団が歩み寄りを試みた最後の機会となった。さらに、この会議を最後に、二神論を唱える少数派はポーランド兄弟団から離れていった。ただし、少数派に属していたチェホーヴィツとニェモイエフスキは、その際にユニテリアン主義を受け入れている。

1578年、スタニスワフ・タシツキ *Stanisław Taszycki* (生没年不明) が、二神論者の拠点のひとつであったルスワヴィツェ *Lusławice* のファルノフスキ派の一部をユニテリアン派

⁴⁵ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 59.

⁴⁶ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 61, 66.

に転向させた。この後、二神論者たちは勢力を盛り返すことができず、自然と消滅していった⁴⁷。

2-3. ラクフ誕生とモラヴィア兄弟団との接触

1565年、ポーランドにおける宗教改革を支えてきたミコワイ・ラヂヴィウ・チャルニが死去した。彼の庇護のもと、リトアニアにおける布教活動に励んでいたチェホーヴィツは、彼の死後クヤーヴィへ赴き、ニエモイエフスキのもとに身を寄せた。チェホーヴィツの急進的な教えに影響を受けたニエモイエフスキは、1566年のルブリン国会に、従者を連れず、一人質素な衣服で登場し物議を醸した。

チェホーヴィツやピョートル・ズ・ゴニョンヅアを中心とした平民層出身の理論家たちは、平和主義を掲げて軍職に就くことを禁じ、さらには公職につくことを拒否、平等の精神から農奴の解放を謳うなど、急進的なスローガンを次々と掲げていった。トランシルヴァニアのビヤンドラータのように、こうした急進主義が引き起こすであろう、周囲からの攻撃を想定し、慎重な姿勢をとる者もいたが⁴⁸、この頃ポーランド兄弟団を指導していたのは、急進派の面々であった。1568年、グジェゴシュ・パヴェウはシュラフタたちに、土地や財産を放棄し、貧しい人々に施すように主張した。農奴を所有せず、共に働いて共同生活を送るべきだ、という彼らの考えを実現する試みは、この頃新しく建設された町において実践されることになる。

1567年、ジャルヌフ Żarnów 城代であったヤン・シェニェンスキ Jan Sienieński (?-1599) は、ポーランド兄弟団による「新しいエルサレム」建設に協力を申し出、サンドミェシュ Sandomierz 地方の所領に新都市を建設する旨を宣言した。この町は、シェニェンスキの妻、ヤドヴィガ Jadwiga にちなんでラクフ Raków と名づけられた⁴⁹。ニエモイエフスキ家をはじめとしたクヤーヴィのシュラフタの一部は、領地を手放し、農奴を解放してラクフに移住した。また、聖職者や都市民、中でも多くの職人がヴィエルコポルスカ、マウオポルスカ、ヴォウイン Wołyń、ルーシ Ruś などからやってきた。彼らはみずから手で家を建て、農業、手工業、知的職業に従事し、町を開発していった。

ラクフは、ポーランド兄弟団の中心的活動拠点となった。1569年、ラクフ移住者の第一波としてやってきたグジェゴシュ・パヴェウやチェホーヴィツを中心とした急進派たちはこの町を中心に、財産の共有、軍職・公職につくことの禁止といった主張を展開していっ

⁴⁷ 1580年にレヴァルトウフ Lewartów（現在のルバルトウフ Lubartów）で開かれたカルヴァン派宗教学議に参加したファルノフスキはカルヴァン派を論破するという活躍を果たしている。カルヴァン派はその後勢いを失い、対抗宗教改革運動の興隆をみることになる。Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 90 を参照。

⁴⁸ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 65.

⁴⁹ ヤドヴィガの生家であるグノインスキ家 Gnoińscy の家紋 herb が、白地に赤いカニ Rak というものだった。Stanisław Tworek, „Raków ośrodkiem radykalizmu ariańskiego 1569-1572”, w: *Raków ognisko arianizmu*, red. Stanisław Cynarski, Kraków 1968（以下 *Raków ośrodkiem radykalizmu ariańskiego* と略記）, s. 54.

た。しかし、ラクフの黄金期はこの数十年後まで待たねばならない。二神論、三神論をめぐる教義体系や、私有財産や農奴制への反対、公職につくことへの批判、平和主義などをめぐり、絶え間ない論争が続き、ラクフは大混乱に陥った。1570年にニェモイエフスキやチェホーヴィツを中心としたクヤーヴィのシュラフタたちがラクフを離れたのも、こうしたラクフの現状への抵抗だった⁵⁰。ルブリンへ移った彼らのほか、リトアニアやクラクフへ向かった信徒もいたが、グジェゴシュ・パヴェウはその支持者とともにラクフに残った⁵¹。その後、クラクフからやってきた薬剤師、シモン・ローネンベルク **Szymon Ronenberg** (?-1600年頃) が中心となり、ラクフの混乱は鎮められた。こうして、グジェゴシュ・パヴェウ、ローネンベルクを中心とするラクフと、チェホーヴィツやニェモイエフスキが指導するルブリン、信徒の多くが住むクラクフ、リトアニアが、ポーランド兄弟団の活動の中心地となった。

この頃、彼らが理想郷を実現しようと決心するきっかけとなった出来事があった。それは、モラヴィア兄弟団との接触である。1569年9月、ポーランド兄弟団に興味を持ったモラヴィア兄弟団の一団がクラクフを訪ねた。彼らはその後ラクフに招かれ、ポーランド兄弟団も4人の若者をモラヴィアに派遣することが決まった。さらに、フィリポフスキ、ゲオルク・ショーマン、ローネンベルクがその後を追った⁵²。この訪問について、モラヴィア兄弟団は次のように記している。

1569年頃、ポーランドにおいて真理を求めるある熱狂が生まれたが、それは非常に浅はかで、全く実りのないものだった。彼らのともし火には、主が福音書で述べられたような油が足されることがなかった。それ故、その灯りは明るく輝くことなく消えてしまった⁵³。彼らは聖書と相容れぬ異教的な幼児洗礼を、キリスト教の教えではないと非難・排除し始め、筆を取って厳しく反対し、神の言葉を信ずる者のみに洗礼を施すことが可能であると教えた。また、教皇が説く聖三位一体説に激しく反対し、裕福なキリスト者と貧しいキリスト者の違いについても書いた。彼らの依頼や要求に応じ、わが共同体は4人の兄弟たち、すなわち選ばれし福音の使徒であるルートヴィヒ・デルカー **Ludwig Dörker** と3人の同行者をポーランドへ遣わした。彼らはポーランドでとても好意的に迎えられ、今度は彼らが、4人

⁵⁰ Tworek, *Raków ośrodkiem radykalizmu ariańskiego*, s. 64.

⁵¹ Ludwik Chmaj, *Faust Socyn: 1539-1604*, Warszawa 1963 (以下 *Faust Socyn* と略記), s. 118.

⁵² Chmaj, *Bracia polscy*, s. 24.

⁵³ いわゆる「十人の乙女の譬」を引用していると思われる。「彼女たちは自分自身のともし火を取って、花婿を迎えるために出て行った。さて、彼女たちのうち五人は愚かで、五人は賢かった。実際、愚かな(乙女たち)は、自分たちのともし火は持って来たものの、油を携えて来なかった。他方、賢い(乙女たち)は、自分自身のともし火と共に、油を器に入れて持って来た。」(マタイ 25:2-4)。ポーランド兄弟団の反三位一体教義を批判しているものだと考えられる。

の若者を我が共同体の視察のために派遣した⁵⁴。

しかし、両者の接近の試みは失敗に終わった。原因の一つは、ポーランド兄弟団が三位一体論を奉じていたことだった。また、彼らは、モラヴィア兄弟団の聖職者が大きな権力と富をもちながら、共同体に属さない貧民に施しを与えないことを非難している⁵⁵。カメンは、この両者の接触について、次のように書いている。

これら二つの分派は、……^{セクト}微賤の諸階級からその支持者を集め、国家の干渉を退け、共産主義的な生活を送ったかぎり、多くの共通点をもつように思われた。しかし、メーレン派（＝モラヴィア兄弟団）は三位一体論者であり、彼らの生活ぶりを調べるために訪れたアリウス派の人々は、彼らの規律があまりに厳格であり、彼らの教義があまりに独善的、排他的であり、彼らの大いに吹聴された共産制なるものがその実は自由のいろはも守られぬような家父長的独裁性であることを見いだした。それゆえこのポーランド人たちは、彼ら自身のより穏やかな体制のほうがキリスト教的であると確信して国へ帰ったのである⁵⁶。

とはいえ、モラヴィア兄弟団への接近の試みは無駄ではなかった。彼らはこの接触によって、再洗礼を教義として正式に取り入れ、社会的平等への意識を新たにしたのである。

2-4. 急進主義をめぐる論争

ポーランド兄弟団の一部がラクフを離れた頃、社会からの迫害を招きかねない急進主義に反対する動きが現れはじめた。急進的な平民層に対してシュラフタ層が中心となったこの動きの代表者はシモン・ブドニであった。彼は、マゾフシェ地方のシュラフタの家に生まれ、クラクフ大学で学び、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語、古代教会スラヴ語などに通じている知識人であった⁵⁷。カルヴァン派司教だった彼は、1563年に反三位一体論を奉ずるようになる。1572年にはキリストの崇拜すら拒絶する考えを表明し、後に理神論の先駆者と呼ばれるほどの急進主義者であったが、農奴制や奴隷の存在は認めていた。リトアニアを中心に活動した彼は平和主義の問題に関しても、武力行使を容認する立場を表明し、チェホーヴィツなどと争った。

もう一人、ポーランド兄弟団の急進主義を批判した人物としてヤコブス・パレオログス

⁵⁴ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 72.

⁵⁵ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 73.

⁵⁶ カメン『寛容思想の系譜』、170-171頁。

⁵⁷ 実のところ、彼の出生について、確実なことはわかっていない。これについては、岡本崇男「シモン・ブドニと『教理問答』」『神戸市外国語大学外国学研究』第56号2003年、2-5頁に若干の考察がある。

Iacobus Palaeologus (1520 頃-1585) がいる。彼はギリシアの生まれで、かつてドミニコ修道会士であったが、三位一体の教理を批判したために異端宣告を受けて投獄されたものの、奇跡的に抜け出し、ポーランドやトランシルヴァニアの反三位一体派に接近したのだった。しかし、彼はキリスト教、ユダヤ教、イスラム教の統一を唱えており、ポーランド兄弟団、特にラクフの急進派を批判し、彼らと対立することになった。彼は主に平和主義に関する主張を展開し、ポーランド兄弟団の急進的平民層とシュラフタ層の対立を引き起こした。

1572 年、ズィグムント・アウグスト王が死去すると、混乱に乗じた他国の侵攻を防ぐため、国境の防衛を固めるようにという布告が元老院から出された。ポーランド兄弟団の中には、祖国のために立ち上がるシュラフタもいたが、ラクフの急進派たちは武器を取ることを拒んだ。平和主義についての激しい議論が行なわれ、これに参加したパレオログスは、祖国防衛のための戦争への参加はキリスト教徒の義務であると主張し、徹底的な平和主義を唱えるグジェゴシュ・パヴェウと争った。

シモン・ブドニは多くの点でパレオログスの考えに賛同し、1578 年には彼の著述を出版しようとしてポーランド兄弟団と争っている⁵⁸。1582 年 3 月 1 日に召集されたスィノドは、当時のポーランド兄弟団を代表するチェホーヴィツ、ニェモイエフスキをはじめとした顔ぶれが揃い、公職の問題が議論された。合意には至らなかったものの、このスィノドにおいて、ブドニの破門が決定された。1583 年にブドニが発表した著述は、ポーランド兄弟団およびカトリックに大きな影響を及ぼした。『武器を用いる官職に関して』(*O urządzeniu miecza używajacem*) という題がつけられたこの作品において、彼は戦争を正しいものとそうでないものに大別した。侵略を批判する一方、正しい戦争、つまり祖国を守るための戦争への参加は、同胞を案ずる気持ちから生ずるもので、キリスト教徒として当然の義務であるとした。また、ブドニはチェホーヴィツを「ルブリンの教皇⁵⁹」と呼び、彼らの急進主義は祖国を退廃させると主張した。ブドニにその意図があったとは思えないが、この著作はカトリック教会によるポーランド兄弟団攻撃に大いに利用されてしまった。そのため、ポーランド兄弟団の急進派はこの後、ブドニを嫌悪するようになるが、シュラフタがポーランド兄弟団の主導権を握るようになると、彼らは徐々にブドニの思想を取り入れるようになる。1593 年にブドニは死去するが、彼の思想は、死後になってようやく、ポーランド兄弟団に受け入れられるのである。それを示すのが、1598 年にルブリンに召集されたスィノドである。ここではすでに、戦争への参加や武器の放棄についてではなく、どういった状況でなら武器の使用が許されるか、といった内容が議論され、「敵の攻撃に対する正当防衛として、もしくは祖国が侵略を許している場合には、武器を取るものが許されるが、相手に攻撃を加えることで、傷つけたり殺したりしてはならない⁶⁰」という声明が発表されている。17 世紀になると、愛国心が欠けているという非難を退けるため、多くのシュラフタが積極的

⁵⁸ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 86-87.

⁵⁹ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 95.

⁶⁰ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 118.

に戦争に参加するようになった。

1573年、ワルシャワ連盟協約が成立する。ポーランドにおけるあらゆる宗派に信教の自由を認めた、この画期的な取り決めは、ポーランド兄弟団の運動のひとつの成功であった。国王の承認によって法的効力を得たこの協約は、ポーランド兄弟団のさらなる活動を保証した。そんな中、1574年、グジェゴシュ・パヴェウは、ショーマンと共に、当時のポーランド兄弟団の教義をまとめた『教理問答と信仰告白』(*Catechesis et confessio fidei, coetus per Poloniam congregati, in nomine Jesu Christi, Domini nostri crucifixi et resuscitati*)を刊行した。これは、クラクフとルブリンのポーランド兄弟団の尽力によってクラクフに建てられた、アレクスイ・ロデツキ Aleksy Rodecki (1540頃-1606)の印刷所からの最初の刊行物であった⁶¹。

3. 全盛期に向かうポーランド兄弟団

1579年、ポーランド兄弟団の最盛期を現出することになるファウスト・ソツィーニがポーランドに到着する。彼は、様々な社会的見解を内包し、ともすれば分裂しかねない状況にあったポーランド兄弟団の教義の統一に尽力した。またこの頃、レヴァルトゥフに、非常に進歩的な学校が建設された。しかし、イエズス会による対抗宗教改革がポーランドで勢いを増し始めたのも、ちょうどこの時期だった。

3-1. ソツィーニの登場

ポーランドに反三位一体論を根付かせた功労者であり、1562年からはトランシルヴァニア公ヤーノシュ・ジグモンドに侍医として仕えていたビヤンドラータは、トランシルヴァニアに反三位一体思想を広め、ヴィッテンベルクなどで学んだトランシルヴァニアのカルヴァン派聖職者、ダーヴィド・フェレンツ Dávid Ferenc (1510-1579)をコロシュヴァル⁶²の監督者に据えた。ビヤンドラータの布教活動は順調に進み、ジグモンド公はユニテリアン派に改宗、1566年にはユニテリアン主義の教理をまとめた教本が刊行された。1568年には彼の影響で、コロシュヴァルのルター派教区がそっくりユニテリアン派に転じるといったことも起こった⁶³。そして、1568年1月、彼の活動が身を結び、トランシルヴァニアにおけるカトリック、ルター派、カルヴァン派、ユニテリアン派の四宗派の宗教的自由が確認された。また、正教会は自由を認められなかったものの、寛容に扱われることとなった。

しかし、トランシルヴァニアでユニテリアン派が勢いをもち始めると、ダーヴィドは反

⁶¹ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 81.

⁶² Kolozsvár : 現在のルーマニア北西部の町クルージュ=ナポカ Cluj-Napoca.

⁶³ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 67.

三位一体思想に加え、キリスト崇拜の拒否を表明するようになる。ユニテリアン派の分裂を恐れたビヤンドラータは彼を告発。トランシルヴァニアの国会は彼の投獄を決めた。結局、この騒動は、1579年のスィノドにおいてポーランド兄弟団がダーヴィドを非難する決定を下した直後の11月、彼が獄中で死亡したことによって終わりを告げた。彼に近い考えを示していたブドニは、スィノドの決定の中心となったルブリンの急進派を非難した。この出来事に、カルヴァンによるセルヴェトゥス処刑を連想した人々も多く、ルブリンの急進派はその影響力を弱めていくことになる。

この頃、ビヤンドラータは同郷人であり、バーゼルで活動していたファウスト・ソツィーニを呼び寄せた。ソツィーニはトランシルヴァニアに赴き、ダーヴィトと議論するなどしてユニテリアン主義と接触を持つが、王権と結びついた彼らの教理と相容れることはなかった。彼自身は明言しなかったが、彼の思想はラクフの急進派に近かったという⁶⁴。彼は1579年の終わりにトランシルヴァニアを去り、クラクフに到着する

ソツィーニがポーランドにやってきた頃、ポーランド兄弟団内部では、すでに急進派が勢いを失い、シュラフタを中心とした穏健派が勝利しつつあった。彼とポーランド兄弟団の出会いは友好的なものではなかった。その原因は、再洗礼をめぐる論争であった。ソツィーニは、ポーランド兄弟団の教理や内部事情について、恐らくビヤンドラータから聞かされており、彼らが信徒受け入れの条件として設定していた沐浴⁶⁵による再洗礼に疑問を抱いた。彼は、この条件をポーランド兄弟団の発展の障害になると考えた。さらに、1580年には、この問題に関して『水による洗礼についての議論』(*De baptismo aquae disputatio*)という論文まで執筆した。一方ポーランド兄弟団は、彼が再洗礼を受け入れない限り、兄弟団には迎え入れない、という姿勢をとり、チェホーヴィツはソツィーニの論文の批判を執筆した⁶⁶。

しかし、彼は徐々にポーランド兄弟団に受け入れられていく。その主なきっかけとしては、パレオログスとの論争と、兄弟団信徒の娘との結婚が挙げられるだろう。ブドニやパレオログスの見解を受け入れることができないでいたポーランド兄弟団は、彼らに対抗できる人物を待ち望んでおり、ソツィーニがその役割を引き受けた。1581年1月に発行された論文において、彼は公職につくこと、戦争に参加することへの非難を表明した。こうした点において彼はラクフの急進派と同様の見解を示し、その評価を高めることになったのだが、彼の功績は、こうした急進主義に共感を示しながらも、その急進性を緩和したことにあつた。

ポーランド同胞団の初期の社会的急進主義はソキヌス(=ソツィーニ)によって緩和された。ソキヌスは農奴所有には反対しなかったが、キリスト教徒

⁶⁴ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 88.

⁶⁵ zanurzenie, 体を水に沈める、の意。

⁶⁶ この論争については、Chmaj, *Faust Socyn*, s. 123-134 に詳しい。

には農奴を厚遇するように忠告している。ソキヌスはまた信奉者たちに戦争に参加しないことを説いたが、もしそれが不可能ならば殺人行為をしないように忠告した⁶⁷。

こうした思想を地道に展開していくことで、ソツツィーニは急進派と穏健派の妥協点を見出し、ポーランド兄弟団の思想的統一に大きく貢献することになった。

しかし、彼の論文は、国家転覆を図るものだというイエズス会からの激しい攻撃を受けることになる。身の危険を感じたソツツィーニはクラクフを離れ、ポーランド兄弟団の信徒であったシュラフタ、クシシュトフ・モルシュティン Krzysztof Morsztyn (1522-1600)のもとに身を隠した。1586年の中ごろ、その娘のエルジュビエタ Elżbieta と結婚したことで、彼はポーランド兄弟団を支持するシュラフタの仲間入りを果たすことになった。

また、彼はグダンスクで地下活動を行っていた反三位一体派がポーランド兄弟団に加わる際にも、大きな役割を果たした。この教団拡大の大事件は1582年にルスワヴィツェで開かれたスィノドに、グダンスクからメンノ派⁶⁸の一団が訪れたことに端を発する。公職につかず、質素な生活を営んでいた彼らは、ポーランド兄弟団が彼らと似た教義を展開しているという噂を聞きつけてやってきたのであった。ポーランド兄弟団はチェホーヴィツを中心とした代表団をグダンスクに派遣したが、彼らは三位一体論を奉ずる再洗礼派であり、モラヴィア兄弟団と同じように、ポーランド兄弟団とは相容れなかった。しかし、チェホーヴィツはこの旅によって、反三位一体派の地下活動組織や、ポーランド兄弟団の支持者が王領プロイセンに少なくないことを知った。早速代表団はグダンスクの反三位一体派と接触を試みたが、上手くいかなかった。というのも、代表団を構成するのはチェホーヴィツを中心としたルブリンの急進派の思想は、彼らには過激に映ったのである。決裂の危機を救ったのがソツツィーニであった。彼はグダンスクの反三位一体派の指導者であったマテウシュ・ラデツケと粘り強く文通を続け、急進主義がポーランド兄弟団のすべてでないことを納得させることに成功した。1585年10月、フミェルニク Chmielnik のスィノドに、クシシュトフ・オストロトをはじめとするグダンスクからの反三位一体派の代表団が到着し、洗礼を受け、ポーランド兄弟団に正式に迎えられた。1587年、バトーリが死去すると、ソツツィーニは妻とともにクラクフへと戻り、ラクフとは一定の距離を置きながらも、ポーランド兄弟団の教義統一に向けて尽力した。

1597年、彼は暴徒と化した学生達に捉えられ、クラクフ中を引き回された挙句、異端者として殺害されそうになる。クラクフ大学の教授がこれに気づいて彼を救い出し、ソツツィーニはクラクフを離れた⁶⁹。ポーランド兄弟団の中に衝撃が走り、ソツツィーニはピョー

⁶⁷ ミウオシュ『ポーランド文学史』、71頁。

⁶⁸ 平和主義的な再洗礼派の指導者メンノ・シモンズ Menno Simons (1496-1561) の流れを汲む一派。グダンスクやエルブロンクなどの王領プロイセンに住むことを許され、農業・手工業に従事する質素な生活を営んでいた。

⁶⁹ この出来事については、Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 115-117 を参照。

トル・スタトリウスの息子、ピョートル・ストインスキ Piotr Stoiński (1565頃-1605) を頼ってルスワヴィツェに赴き、残りの人生をそこで過ごすことになる。彼は、最後までポーランド兄弟団に入会することはなかったが、指導者たちとの個人的なつながりにより、彼らに大きな影響を及ぼした。それは、彼らが後に「ソツィーニ派」として知られるようになることから伺える。

3-2. レヴァルトウフの学校

1588年、レヴァルトウフにポーランド兄弟団の学校が開かれた。当時、レヴァルトウフは、迫害され祖国を追われた外国人が多く住む、プロテスタント活動の中心地であった。もともと、この町にはカルヴァン派の学校があったが、この町の所有者であり、ポーランド兄弟団の信徒の一人であったシュラフタのミコワイ・カジミェルスキ Mikołaj Kazimierski (?-1598) は、その学校をポーランド兄弟団の学校に作り変えることを決定し、この学校の校長に、ヴォイチェフ・ズ・カリシャを指名した。彼はカリシュ Kalisz の平民層の出で、おそらくクラクフ大学で学んだ⁷⁰後、ドイツに留学し、ポーランドに戻ると、国内の様々なカルヴァン派学校の教師を歴任。1586年にポーランド兄弟団に参加していた。

ヴォイチェフ・ズ・カリシャは、この学校の改革を断行した。当時、全ての学問の頂点に位置するのは神学であったが、この学校では政治学がその地位を獲得した。また、彼は宗教に関係なくとも「人間の生活に役立つ、尊ぶべき学問がある⁷¹」という見解を示し、「あらゆる法の源泉である⁷²」倫理学を大きく取り上げた。学問を宗教から遠ざけ、世俗的に扱ったことは、この学校の功績の一つと見なすことができる。また彼は、この頃はまだ大きな需要があったラテン語に加え、ポーランド語やドイツ語も同等に扱った。

また、この学校の存在意義は、その進歩的な教育システムだけでなく、数十年のちにポーランド兄弟団の名声を国内外に轟かせるラクフ学院のモデルとなった点にも見出すことができる。

また、学生のポーランド兄弟団への改宗は強制されなかったため、イエズス会やルター派からの攻撃はあったものの、シュラフタの多くがこの学校に子供を通わせた。クラクフ大学を辞めてまで、この学校に入学する者もいたほど、この学校の名は広く知れ渡った⁷³が、その反面、この成功は、イエズス会などの敵対者の憎悪を募らせる原因となった。

⁷⁰ 彼の生まれた年は不明。さらに、出生地及びクラクフ大学で学んだという経歴も推測の域を出ない。NK, 2, Warszawa 1964, s. 302.

⁷¹ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 101-102.

⁷² Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 102.

⁷³ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 102.

3-3. 迫害

ポーランド兄弟団は、カトリック、プロテスタント両派から、憎しみをこめてアリウス派と呼ばれた。しかし、ユニテリアン主義と4世紀のアリウス派には、反三位一体派という以外の接点は全くなかった。ポーランド・アリウス派という名称はしたがって、敵対者が彼らのイメージを低下させるために採用した戦略であった。この名称は広く濫用され、エラスムスの影響を受けた傑出した人文主義者であったアンジェイ・フリチ=モドジェフスキ Andrzej Frycz Modrzewski (1503-1572) までもがアリウス主義者と呼ばれるほどであった。モドジェフスキはカトリック教会とカルヴァン派の調停者であり、晩年にはアリウス派に好意的に接したものの、決してそこに加わることはなかったにも拘わらず、である。

ポーランド兄弟団への攻撃は、彼らの成立初期から始まっていた。1563年にはカルヴァン派が、ポーランド兄弟団による著述は全て焚書にするよう王に要請し、そのためにグジェゴシュ・パヴェウはクラクフからの逃亡を余儀なくされた。1564年、カルヴァン派は、ポーランド兄弟団を追放する法案を準備した。枢機卿のホズィウシュヤ、教皇特使のコモンドーネ⁷⁴はこれを利用しようと考へ、カトリック信仰の義務と、10月1日までの外国人異端者の国外追放とを定めた勅令が、8月2日にパルチュフ Parczów⁷⁵国会において発布された。こうした展開を予想していなかったカルヴァン派は、すぐに国王に働きかけ、11月2日にはピョートルクフ Piotrków で新勅令が発布され、パルチュフ勅令がポーランド兄弟団にのみ適用されるということが確認された。この勅令のために、ポーランド兄弟団に好意的であったイタリア人、アルチャーティ、ジェンティーレ、オキーノ Bernardino Ochino (1487-1564) がポーランドから追放されてしまった。

また、謂れの無い誹謗中傷により、彼らの人気を失墜させる試みもあった。例えば、1566年のルブリン国会において、当時クラクフなどで多発していた農民や貧民の反乱の背後にはポーランド兄弟団がいる、という中傷がなされた。この問題は、国会に大きな力を持っていたシェニツキなどの力でなんとか収めることができたが、フィリポフスキが政界から退く原因となった。この頃のポーランド兄弟団追放の試みは、主にカルヴァン派によるものであり、カトリックは「異端同士の争いはカトリック教会の平和を意味する⁷⁶」という考えから、傍観していた。

1570年代後半から、対抗宗教改革の勢いが増し始める。イエズス会はプロテスタントに対し、異端の追放令を出すよう世俗権力に迫る方法や、民衆を扇動して異端の組織を破壊する方法をとった。1578年、クラクフにおいて、イエズス会に扇動されたクラクフ大学の学生達が、ロデツキの印刷所を破壊し、多くの本を燃やしてしまった。この出来事により、印刷所は1580年の終わりまで、その活動を停止せざるを得なくなってしまった。

1580年、カルヴァン派のパトロンであったクラクフ代官のミコワイ・フィルレイ Mikołaj

⁷⁴ Giovanni Francesco Commendone (1523-1584) : 1563-1565 および 1571-1573 に教皇特使としてポーランドに関わり、対抗宗教改革に尽力した。

⁷⁵ おそらく現在のパルチェフ Parczew のこと。

⁷⁶ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 67.

Firlej (1531頃-1588) が、カルヴァン派とポーランド兄弟団を和解させるために企画したレヴァルトゥフでの対談において、カルヴァン派は議論に敗北し、その人気を失墜させることになった。カルヴァン派の勢力が弱まったのを確信したカトリック教会は、より積極的に活動を始め、この年、ワルシャワからポーランド兄弟団だけでなく、全プロテスタント勢力をも追放することに成功した。

クラクフの司教座聖堂参事会会員であったヒエロニム・ポヴォドフスキ Hieronim Powodowski (1547頃-1613) は、ポーランド兄弟団にとっての強大な敵となった。彼は 1582 年頃からチェホーヴィツやニエモイエフスキと激しい論争を行い、1583 年には国王ステファン・バトーリに働きかけ、ルブリンにおけるポーランド兄弟団の活動を制限する勅令を發布させることに成功した。彼は、この年に刊行されたシモン・ブドニの『武器を用いる官職について』を、彼らを攻撃する道具として利用した。こうした結果、ポーランド兄弟団を離れる者も多く現れた。

また、イエズス会士であるヤクブ・ヴィェク Jakub Wujek (1541-1597) は、1585 年に国王ステファン・バトーリを列聖すると約束し、その対価としてロデツキの印刷所から聖三位一体論を冒瀆する著述を没収するように迫った。ロデツキは投獄され、アリウス派の著述を印刷したとして裁判にかけられた⁷⁷。

1587 年にズィグムント 3 世が即位すると、イエズス会の攻撃はさらに激しいものとなった。1588 年には、レヴァルトゥフ学校の人気を面白く思わない人々によって、クラクフのポーランド兄弟団の教会が襲撃された。これには、およそ 700 人が参加し、教会は跡形も無く取り潰され、ポーランド兄弟団は大打撃を被った⁷⁸。1589 年 5 月 23 日の夜には、学生達による大規模な暴動が起こり、ポーランド兄弟団とカルヴァン派という 2 宗派の教会が一夜にして破壊された。プロテスタント陣営は代表者を王城に派遣して抗議を行なったが、イエズス会の傀儡と化していた国王は、これを聞き入れなかった⁷⁹。

この頃、チェホーヴィツやニエモイエフスキが何度かイエズス会との討論を経験しているが、そのすべてにおいて、イエズス会士の激しく乱暴な態度⁸⁰に、年老いた彼らは対抗することができなかった。こうして、ポーランド兄弟団の第一世代たちは、徐々に第一線から退き、ポーランド兄弟団の中心は次の世代に移っていく。

⁷⁷ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 97.

⁷⁸ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 102.

⁷⁹ この出来事に関しては、Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 105-106 を参照。

⁸⁰ 彼らは、攻撃的な態度に加え、聴衆を限定するためにラテン語を用いたり、討論の際、ポーランド兄弟団の代表者たちを、教会の隅の声があまり響かない場所に配置したりと、優位に立つためあらゆる手を使った。Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 107.

第3章 最盛期ポーランド兄弟団と亡命

本章では、前章に引き続き、ポーランド兄弟団の最盛期から、ポーランドから追放され世界各地へと亡命するまで、つまり、1600年以降の彼らの活動をまとめる。

1. 歴史背景

17世紀、ポーランドは、多くの戦乱により徐々に衰退していく。この新しい世紀は、モスクワ大公イヴァン4世 Иван IV（在位1533-1584）の息子ドミトリーを名乗る男の登場で幕を開けた。その頃ロシアは、1598年にリューリク朝が断絶し、ボリス・ゴドゥノフ Борис Фёдорович Годунов（在位1598-1605）がツァーリの位についていたが、ポーランドに登場したこの偽ドミトリーは帝位奪取を主張し、マグナートのヴィシニョヴィエツキ家 Wiśniowieccy やサンドミェシュ知事イェジー・ムニシェフ Jerzy Mniszech（1548頃-1613）が彼を支持した。偽ドミトリーをロシアの帝位につけ、対スウェーデン戦争の同盟を結ぼうと考えたズィグムント3世も、これを支持した。1604年の秋、ポーランドを味方につけた偽ドミトリーはカトリックへ改宗、ロシアへ侵攻した。ゴドゥノフの急死も手伝って、彼はツァーリの位に就いたが、その親カトリック的な傾向やポーランドびいきが反発を招いた。1606年に民衆の反乱によって偽ドミトリーは殺害され、ポーランド軍も撤退、ヴァシーリ・シュイスキー Василий Иванович Шуйский（在位1606-1610）が即位した。

一方、ポーランドでは、ズィグムント3世に対する不信感から、ミコワイ・ゼブジドフスキ Mikołaj Zebrzydowski（1553-1620）が中心となり、ロコシュ⁸¹が結成された。王権の制限やイエズス会の追放などが要求され、ラクフの所持者であるヤクブ・シェニェンスキ Jakub Sieniński (?-1639) や数名のポーランド兄弟団もこれに参加した。最終的に、1607年に反乱軍は国王軍に破れ、鎮圧された。

1607年、第二の偽ドミトリーが現れた。多くのシュラフタがこれを支持し、モスクワへ向かった。シュイスキーがこれに対してスウェーデンと同盟を結ぶと、ズィグムント3世はモスクワ遠征を決意、1610年にロシア・スウェーデン軍を破った。シュイスキーは退位し、ズィグムント3世の息子、ヴワディスワフが新ツァーリに選出された。しかし、ズィグムント3世が自らツァーリになることを望んだこと、正教への改宗などが問題となり、両国の交渉が難航している間に、モスクワで反乱が起こり、ポーランド軍は降伏、1613年にミハイル・ロマノフ Михаил Фёдорович Романов（在位1613-1645）がツァーリに選出

⁸¹ rokosz：シュラフタ自身が国王に対して行なう反乱、強訴のこと。シュラフタはロコシュを起こす権利が法的に認められていた。

された。ポーランドは1617年から何度か、ツァーリの位を求めてモスクワ遠征を行なったが、1618年に14年間の休戦協定が締結された。

この頃、国境を越えて略奪を繰り返すコサックが原因となり、ポーランドとオスマン帝国の関係が悪化し始めた。さらに、30年戦争が始まると、ズィグムント3世は反ハプスブルク勢力を鎮圧するために、軍をハプスブルク領へ派遣し、トルコの封臣であったトランシルヴァニア公の軍を撃破。これがきっかけとなり、トルコ軍はポーランドへ侵攻した。ポーランド軍は1621年、ホチム Chocim でトルコ軍に勝利し、和平を結んだ。

この頃、こうしたポーランドの東方・南方での混乱に乗じて、スウェーデン王グスタフ・アドルフ Gustav Adolf (在位 1611-1632) 率いるスウェーデン軍がリヴォニア Liwonia へ侵攻、リガ Liga を獲得した。さらに、1626年から1629年まで続いたポモージェでの戦いの結果、ポーランドには不利な休戦条約が結ばれることになった⁸²。

1632年、ズィグムント3世が死ぬと、その息子ヴワディスワフが新国王に選出され、ヴワディスワフ4世 Władysław IV (在位 1632-1648) として即位した。この年、ロシアがモレンスクを包囲したが、新国王はこれを撃退し、平和条約を結んだ。また、彼はスウェーデン王グスタフ・アドルフの死をスウェーデン王位へのチャンスだと捉え、プロイセンの港に駐屯していたスウェーデン軍を引き上げさせ、1629年に結ばれた休戦協定から、関税徴収権の項目を削除することに成功した。しかし、新しい対スウェーデン戦争の計画は、シュラフタ、マグナートの反対に遭い頓挫した。

ヴワディスワフ4世はコサックを動員し、バルカン半島をオスマン帝国から解放するという壮大な野望を抱いていた。しかし、シュラフタやマグナートの反対によってこの計画が潰れたとき、戦争の準備を進めていたコサックは怒りを露にした。1648年、ボフダン・フミェルニツキ Bohdan Chmielnicki (1595-1657) 率いるコサック軍が反乱を起こした。その数ヵ月後、ヴワディスワフ4世が死去。彼の弟がヤン2世カジミェシュ Jan II Kazimierz (在位 1648-1668) として即位した。新国王は1649年にフミェルニツキと一時的な和平を結んだが、この戦争はその後も長引き、1654年にはフミェルニツキと結んだロシアがポーランドに侵攻した。1655年、大混乱に陥ったポーランドを、北からさらなる攻撃が襲った。のちに「大洪水」(Potop) とも呼ばれるこのスウェーデンの侵攻により、ポーランドは致命的な被害を蒙り、ヨーロッパの大国の地位を降りることになった。

2. ポーランド兄弟団の黄金期

ポーランド兄弟団が最盛期を迎え、ソツィエニの思想を基にその教義をまとめ、徐々にその国境を越えて活動を始めた頃、カトリックによる対抗宗教改革は激しさを増し、一方でポーランド国内は様々な戦争によって混乱していた。ここでは、そうした状況のなか

⁸² スウェーデンはリヴォニアの大部分を獲得し、グダンスクからの関税徴収権を得た。

で現出した彼らの活動拠点ラクフの黄金期と、国内外の活動について確認する。

2-1. ラクフ学院と印刷所

1601年、大規模なスィノドが召集され、新たな学校の建設が議題にのぼった。レヴァルトゥフ学校は1598年に閉鎖されており、彼らの新しい教育機関設立は差し迫った課題であった。このスィノドにおいて、新たな学校をラクフに建設するという案がのぼり、ラクフ建設者ヤン・シェニェンスキの息子であり、当時のラクフの所持者であったヤクブ・シェニェンスキ Jakub Sienieński (?-1639) は快くそれに同意した。

1602年には学校が建設され、1603年5月に開かれたスィノドにおいて、教師陣の選抜が行なわれた。ほどなくしてラクフ学院と名づけられたこの学校は、レヴァルトゥフ学校がモデルとなっており、神学、倫理学、ラテン語、ギリシア語、ポーランド語の他、修辞学、政治学、経済学、歴史学、論理学や自然科学などが取り扱われた⁸³。

彼らの教育水準は、当時のポーランドにおけるあらゆる高等教育機関をも凌ぐもので、国内外から多くの学生を集め、ラクフ学院は「サルマチアのアテネ」(Ateny Sarmackie) と呼ばれた⁸⁴。ルビェニェツキ家 Lubienieccy、モスコジョフスキ家 Moskorzowscy、モルシュティン家 Morsztynowie、ヴィシヨヴァティ家 Wyszowaci、プシプコフスキ家 Przypkowscy、シュリフティング家 Szlichtyngowie、ニェミリチ家 Niemiryczowie、アルチシェフスキ家 Arciszewscy などから、多くがこのラクフ学院に入学した。サムエル・プシプコフスキやアンジェイ・ヴィシヨヴァティもこの学院で学んでいる。その他、レヴァルトゥフ学校と同様に信仰の自由が認められていたことから、他宗派の学生も多く訪れた。

1612年11月、ドイツからヨハン・クレルが到着し、ラクフのヤクブ・シェニェンスキのもとに滞在。シュマルツなどの薦めによってポーランド兄弟団への参加を決意した。彼は1605年にアルトドルフ大学⁸⁵に入学。ソツィーニ主義者であった教授、エルンスト・ゾナー Ernst Soner (1572-1612) の影響を受け、アルトドルフにおけるソツィーニ派運動に加わり、ゾナーの死後、ソツィーニ派の発祥の地を目指したのであった。すぐに彼の親友マルティン・ルアールがその後を追った。このクレルとルアール、そして同じくドイツからやってきたヨアヒム・ステグマンは、ポーランド兄弟団の中心人物となり、ラクフ学院の学長としても活躍した。彼らが学長を務めた1620年代はラクフ学院の最盛期ともいわれ、

⁸³ NK, 1, Warszawa 1963, s. 155.

⁸⁴ Zenon Gołaszewski, *Bracia polscy*, Toruń 2004, s. 123. 尚、ラクフ学院で実践された高水準な教育モデルは彼らの亡命後、18世紀末、ポーランド王国最後の王、スタニスワフ・アウグスト・ポニャトフスキ Stanisław August Poniatowski (在位 1764-1795) の時代の教育学者スタニスワフ・コナルスキ Stanisław Konarski (1700-1773) によってようやく導入された。彼の祖父アレクサンデル・コナルスキ Aleksander Konarski (生没年不明) がポーランド兄弟団の信徒だったことはわかっているが、彼がその影響をうけていたかどうかは不明。

⁸⁵ Universität Altdorf: 現在のドイツ、バイエルン州に位置するアルトドルフ・バイ・ニュルンベルク Altdorf bei Nürnberg に、16世紀に建立された大学。

1000 人もが学んでいたという⁸⁶。

学生達は卒業後、ドイツ南部のアルトドルフ大学やライデン大学を始めとしたオランダの大学へと留学した。

学院の建設と同じ頃、クラクフのアレクスイ・ロデツキの印刷所がラクフに移された。彼の義理の息子、セバステリアン・ステルナツキ Sebastian Sternacki (?-1635 頃) が引き継いだこの印刷所は、ソツツィーニ、シュリフティンク、クレルなど、ポーランド兄弟団を代表する人々の著述をはじめ、宗教、哲学、科学など、様々な分野に関する研究書の印刷を通して、ラクフ学院と並んでポーランド兄弟団の国際的名声の獲得に貢献した。ラクフに建設された 1600 年からラクフ解体の 1638 年までにおよそ 240 タイトルを出版したという⁸⁷。中には、ポーランド兄弟団に属していない作家の著述もあった。

こうして、ラクフは黄金期を迎えた。ラクフ学院や印刷所による文化的な貢献に留まらず、ポーランド兄弟団のあらゆる活動の拠点として、スィノドのほとんどが召集されるまでになった。

2-2. 国内活動

17 世紀になっても、彼らの教義についての話し合いは続いた。戦乱に荒れるポーランド国内の状況や新しい世代の台頭により、初期の急進主義の影響は見られなくなり、1613 年 11 月のチェホーヴィツの死とともに、ポーランド兄弟団を築き上げた第一世代は姿を消した。

1601 年、ポーランド兄弟団の新時代を告げる会議がラクフに召集された。ルビェニェツキ家からアンジェイ (シニア)、クシシュトフ (シニア)、スタニスワフ (シニア) 兄弟、ヒエロニム・モスコジョフスキ、ファウスト・ソツツィーニ、クシシュトフ・オストロト、ピョートル・ストインスキ、ヴァレンティン・シュマルツ、ヨハン・フェルケルなど、ポーランド兄弟団の中心的人物が挙って参加した、稀に見る規模のコンヴェントであった。会議は、ソツツィーニの講演に対して参加者が質問、批判するという形で進行し、教義についての議論が交わされた。ここでは、急進派とシモン・ブドニの支持者との間の溝という、ポーランド兄弟団内部の問題の解決に力が注がれ、キリスト教徒が世俗の裁判所で訴訟を起こすことなどが一定の条件下で容認された。また、戦争への参加も、平和主義の立場に立ち、殺意を抱かない限り、認められた。この会議の概要はシュマルツが一冊の本『1601 年ラクフ討論集会摘要』(*Streszczenie kolokwium odbytego w Rakowie w r. 1601*)にまとめ、1608 年にアルトドルフで出版された。

次の年の 10 月、ラクフにスィノドが召集され、50 人ほどが参加した。ここでも、ソツツィーニが講演した。ここでは、キリスト教徒は世俗権力に従わねばならないとされ、公職

⁸⁶ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 124.

⁸⁷ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 125.

につくこと、武器を持つことなどが容認された。一方、キリスト教徒である限り、死刑を執行する権利は持たないことが宣言された。しかし、ルブリンの急進派はこうした決定に不満を示し、クシシュトフ・ルビェニェツキ（シニア）やシュマルツなどの若い聖職者たちも、分裂を心配して消極的な姿勢をとるなど、こうした考えが浸透するにはしばらく時間が必要であった。

戦争への参加の問題を解決するきっかけとなったのはタタール人であった。頻りにポーランド東部に侵入しては略奪を繰り返すタタール人に対しては、ポーランド兄弟団も頭を悩ませていた。1604年頃から、スィノドでタタール人からいかにして身を守るかが話し合われるようになる。1605年9月に開かれたスィノドで、タタール人に関して、危険な地域を逃れて安全な場所へ移住ことが推奨されたが、相手に襲われるなどした場合は、敵と戦うこと、また、その襲われる徴候を感じ取った場合に先制攻撃することまでが認められた。以降、ポーランド兄弟団のシュラフタたちは祖国を守るために進んで武器を取るようになり、多くのものが軍職に就くようになった。

一方で、1610年頃からオストロトはポーランド兄弟団の初期の思想に立ち返り、急進主義を唱え始め、多くの支持者を獲得する。彼は親友のシュマルツをも批判し、行き過ぎた妥協を非難した。ポーランド兄弟団は分裂を防ぐために全力を尽くし、シェニェンスキ、モスコジョフスキ、シュマルツ、フェルケル、アンジェイ・ヴォイドフスキなど、中心的人物から構成される代表団を彼のもとに送り説得した。

ソツィーニの死後、彼の教えを中心に、ポーランド兄弟団の教義をまとめた『ラクフ教理問答集』（*Katechizm rakowski*）が刊行される。1605年にポーランド語で初版が発行されたこの教理問答集は、モスコジョフスキ、シュマルツ、ストインスキ、フェルケルなどが共同で編集したもので、その正式表題は『我々の主であるイエス・キリストの父のみが唯一イスラエルの神であるということ、処女懐胎により誕生した人間ナザレのイエス以外に、また彼以前にも誰一人として神の子は存在しないことを確認し表明する、ポーランド王国、リトアニア大公国およびポーランド王国統治諸地域在住者のための教理問答集⁸⁸』（*Katechizm zboru tych ludzi, którzy w Królestwie Polskim i Wiel. Księstwie Litewskim i w innych państwach do Korony należących twierdzą i wyznawają, że nikt inszy, jedno Ociec Pana naszego Jezusa Chrystusa jest onym jedynym Bogiem Izraelskim: a on człowiek Jezus Nazareński, który się z Panny narodził, a nie żaden inszy oprócz niego abo przed nim, jest jednorodzonym Synem Bożym.*）といった。1609年にモスコジョフスキがラテン語に翻訳、1608年と1612年にはフランス語版がラクフで発行された。イングランドやドイツ、オランダでも大きな反響を得た。

⁸⁸ 尚、中山『近代ヨーロッパと東欧』、92頁では、この教理問答書の原題は『ポーランド王国、リトアニア大公国、これら以外のポーランド王国領在住者で、我々のイエス・キリストの父なる神はイスラエルの唯一神以外には存在せず、処女懐胎により生誕のナザレのイエスは一人の人間にすぎず、彼以外、それに彼以前にも誰一人として神の子が存在しない旨をここに確認し、それを表明する信徒団の教理問答書』となっているが、*nikt inszy, jedno Ociec Pana naszego Jezusa Chrystusa jest onym jedynym Bogiem Izraelskim* は、「キリストの父のみがイスラエルの神である」という意味であり、「我々のイエス・キリストの父なる神はイスラエルの唯一神以外には存在せず」は誤訳であろう。

2-3. 国外活動

ポーランド兄弟団の活動は、決してポーランド国内に限定されたものではなかった。信徒たちは国内で学んだ後にドイツやオランダへ留学することが慣習となっていたため、そうした機会を存分に利用し、国外での宣教活動が積極的に行なわれた。

17世紀初頭、ドイツのアルトドルフはポーランド兄弟団の隠れた国外拠点となっていた。最大の功労者は、すでに登場したアルトドルフ大学の教授、エルンスト・ゾナーであった。彼は16世紀末にオランダのライデンを訪れた際にクシシュトフ・オストロト、アンジェイ・ヴォイドフスキと出会い、ソツィーニ主義を支持するようになった。1605年にアルトドルフ大学の教授になると、ポーランドやトランシルヴァニアから若者を招き、ドイツ・ソツィーニ派のサークルを形成した。クレルヤルアールもここでソツィーニ主義と出会っている。

イングランドへの布教の足掛かりを築いたのはシモン・ブドニであった。1574年、ラルフ・ラターRalph Rutter（生没年不明）なる人物がブドニを訪ねているが、彼はその後、イングランドで最初の反三位一体主義者とされた人物であった⁸⁹。1609年、ヒエロニム・モスコジョフスキが『ラクフ教理問答集』をラテン語に翻訳し、ジェームズ1世に献呈した。その結果、この著作はイギリス議会の議題にのぼるほどの注目を集め、焚書処分された。1612年にはエディンバラ出身のスコットランド人、トマス・セゲトThomas Segeth（1575頃-1612）がラクフを訪れ1週間滞在した。一方、イングランドでは同じ年に反三位一体主義者2名が火刑に処せられている。この頃、ポーランド兄弟団は宣教のために、シュリフティング、アンジェイ・ヴィショヴァティ、サムエル・プシプコフスキとその弟のクシシュトフ Krzysztof Przypkowski（1598頃-1661頃）などから成る使節団をイングランドに派遣している。また、1647年にイングランドで初めて反三位一体論を掲げた論文を著したポール・ベスト Paul Best（1590-1657）は、スウェーデン王グスタフ・アドルフ軍の一員として、ポーランドに滞在経験があった。

1620年頃からラクフの若者たちによるパリ留学が盛んになった。彼らは留学の他に、宣教という目標ももっていた。彼らは、当時スウェーデン大使としてフランスに滞在していたグロティウス Hugo Grotius（1583-1645）と交友関係を持った。また、数学者であるメルセンヌ Marin Mersenne（1588-1648）はルアールと親交があり、物理学者であったガッサンディ Pierre Gassendi（1592-1655）はスタニスワフ・ルビェニェツキ（シニア）と交流があった。また、ヴィショヴァティも、彼らと個人的に交友関係を築いていた。ルビェニェツキはデカルト René Descartes（1596-1650）とも交流を持っていた。また、ヴォルツオーゲンは、デカルト没後の1657年、『デカルトの形而上学的省察』（*Breves in Meditationes Metaphysicas Renati Cartesii annotationes*）を著している。

ポーランド国外で、彼らが最も自由な活動を許された場所はオランダであった。17世紀、スペインとの独立戦争を遂行しつつ、驚異的な経済発展をとげて世界経済の覇権を握った

⁸⁹ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 304.

オランダでは、その圧倒的な経済競争力を背景に自由主義的な政策が採用されており、祖国を追われた芸術家や知識人が到来し、自由な出版活動が行なわれていた。アムステルダムだけでも 400 の印刷業者と書店を持っていたという⁹⁰。一世紀前のポーランドの役割を引き継いだとも言えよう。この時期のポーランド兄弟団関連の著述をみると、その多くがオランダ語に翻訳されていたり、オランダで印刷されている。ポーランドとオランダは、かつて多くのエラスムス信奉者が宗教改革を主導したこと、オランダからのメンノ派をポーランドが受け入れたことなどを通して交流を持っていた。

ポーランド兄弟団からは 1598 年にクシシュトフ・オストロトとアンジェイ・ヴォイドフスキがライデンを訪れている。彼らは、ポーランド兄弟団の著作物を用いて布教を企てたが、オランダのカルヴァン派から「トルコ人の教義」と非難されて焚書処分となり、オストロトとヴォイドフスキに対しては 10 日以内の国外退去令が出された。一方で、アルミニウス派の創始者として知られるアルミニウス *Iacobus Arminius* (1560-1609) はアムステルダムで聖職者を務めていた際に、ポーランド兄弟団と個人的に接触していたようで、ソツィーニと類似した思想を持っていたことが知られ、反対勢力からは反三位一体的だと非難された⁹¹。ここに、ソツィーニ派のアルミニウス派形成への影響を見ることができる。

ルアールやシュリフティングなど、ポーランド兄弟団には多くのライデン留学経験者があり、彼らはその際にグロティウスと接触を図っている。1532 年は、ルアールがスィノドの要請で、アンジェイ・ヴィショヴァティほか 4 名とともにオランダへ赴き、アルミニウス派と交流を果たした⁹²。ルアールとグロティウスはこの年、ハンブルクで議論を交わしている。アルミニウス派の影響を受けたグロティウスにとって、ポーランド兄弟団は近親感を抱かせる存在であったようで、彼の書簡などから、新ポーランド兄弟団的な姿勢をうかがい知ることができる⁹³。また彼は『ラクフ教理問答集』を自分の手で写したという⁹⁴。ラクフが解体された 1638 年、ポーランド兄弟団はスウェーデンの援助を期待して、その時在仏スウェーデン大使であったグロティウスに手紙を送っている。また、ライデン大学で学んだプシプコフスキやシュリフティングは、その著作のいくつかをアムステルダムで刊行している。

以上のように、ポーランド兄弟団は機会があれば、自らの思想を広めようと画策していたことがわかる。こうした早い段階からの国外活動は、ポーランドを追われた彼らが避難所を発見するのを比較的容易にし、ポーランド兄弟団が近代啓蒙思想の形成に多大な影響を与えたことを推測させる根拠となっている。

今一人、オランダで名を知られた人物としてクシシュトフ・アルチシェフスキの名を挙

⁹⁰ カメン『寛容思想の系譜』、303 頁。

⁹¹ Carl O. Bangs, "Arminius and socinianism", in Lech Szczucki ed., *Socinianism and its role in the culture of the XVI-th to XVIII-th centuries*, Warszawa-Lódź 1983, pp. 81-84.

⁹² Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 169.

⁹³ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 297-298.

⁹⁴ Tazbir, *Reformacja*, s. 124.

げておく。彼はポーランド兄弟団を支持するシュラフタの家に生まれたが、両親がカスペル・ブジェジニツキ Kasper Jaruzel Brzeźnicki (1564 頃-1623) なる同胞に騙されて財産のほとんどを奪われてしまったことに憤慨し、彼を殺害してしまいポーランドを追われた⁹⁵。ハーグに逃れた彼は砲術などを学び、ウィレムの子、オラニエ公マウリッツ Maurits van Oranje (在位 1618-1625) の軍に従軍。ブラジルへの遠征で将軍に任ぜられるまでになった。1637 年、彼はアムステルダムを訪れたヴィショヴァティに、ブラジルでの布教活動を提案している。

2-4. 対抗宗教改革の攻撃とラクフの解体

ポーランドにおける対抗宗教改革について、次のような記述がある。

反宗教改革の宣伝は、非カトリック派を無神論者で教会や国家の敵であり、本質的に敵と共謀しうる用意が常にある反社会分子であると述べている。不道徳で見苦しい行為で新教徒を告発することもしばしば行なわれた⁹⁶。

カトリック教徒であるズィグムント 3 世の即位以降、イエズス会を中心とした対抗宗教改革は、ペンを剣に持ち替え、非常に暴力的なやり方でますますその勢力を伸ばし、プロテスタントは様々な町から追放されていった。

ルアールやクレルなど、他国から来訪した人々がそろって感じたように、ポーランドはすでに「火刑なき国家」ではなくなっていた。1611 年のアリウス主義者の処刑⁹⁷は他の反三位一体派を震え上がらせたし、イエズス会の説教師ピョートル・スカルガ Piotr Skarga (1536-1612) によってポーランド兄弟団の会員ピエトロ・フランコ Pietro Franco (生没年不明) が処刑された際には、それに刺激された群衆によってプロテスタント系の教会や図書館が破壊された⁹⁸。

1619 年にはカトリック教徒以外がポズナンに住むことを禁じられ、1627 年には、クラクフではカトリックに改宗した者にのみ市民権を与えるという法が公布された。この際には、学生達が暴動を起こし、スタニスワフ・ルビェニェツキ (シニア) が誘拐され暴行を受けた⁹⁹。またこの年、ルブリンでは、ポーランド兄弟団がスウェーデンと共謀しているとい

⁹⁵ 当初彼は、ポーランド兄弟団の教えに従い、決して力に訴えることはせず、裁判所を通じて事の收拾を図ったが、その後も度重なる搾取を続けたブジェジニツキに憤慨したアルチシェフスキは弟と共に凶行に及んでしまった。ラヂヴィウの援助も及ばず、彼らは国外追放となった。詳細は Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 156-158.

⁹⁶ ステファン・キューヴェーヴィチ編 (加藤一夫、水島孝生共訳) 『ポーランド史』、1、恒文社、1986 年、232 頁。

⁹⁷ この年、ポーランド兄弟団を自称して反三位一体説を唱えたヤン・ティシュコヴィツ Jan Tyszkowicz (生没年不明) なる人物が処刑された。詳しい経過については Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 140-143.

⁹⁸ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 143.

⁹⁹ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 162.

うイエズス会の流した中傷と、裁判所によるスィノド開催禁止の条例がきっかけとなり、群衆がルブリンに住むベウス **Bełz** 城代、アンジェイ・フィルレイ **Andrzej Firlej** (1583 頃-1649) の住居を襲撃した。ポーランド兄弟団のパトロンであった彼の邸宅に居合わせたアンジェイ・ルビェニェツキ (ジュニア) をはじめとしたポーランド兄弟団は対抗したものの、打ち破られ、彼らの教会を含めた複数のプロテスタント系の教会が破壊された。法廷は、教会の建て直しやスィノドの開催を試みた場合、シュラフタにはその位の剥奪、非シュラフタには死刑を科すことを決定した。また、1635 年には、ルブリンにおいてクシシュトフ・ルビェニェツキ (ジュニア) ほか 4 名のポーランド兄弟団信徒がその思想ゆえに有罪判決を受け、罰金を科せられている¹⁰⁰。こうした迫害はルブリンで特に激しかったが、彼らは反異端法令が発布されるたびに、その地域の権力者の手を借りて町を逃亡し、また戻って活動を再開するといった方法で生き延びた。

兄弟団の中心地であるラクフも何度か襲撃を受けた。その最大のものが 1623 年の襲撃で、この際はクレル宅の図書館が破壊され、多くの著述や手記などが燃やされた。こうした被害が何件にも及び、ルアールはこの出来事がきっかけでラクフ学院の学長を辞任し、ラクフを離れた。

イエズス会は、ポーランド兄弟団を攻撃するきっかけを常に見つけていた。1638 年のラクフの解体はラクフで学ぶ数人の子供が、十字架に石を投げて遊んだことをきっかけとしておこった。イエズス会はこの問題を誇張して報じ、ラクフの所有者であるシェニェンスキに召喚状が送られ、1 ヶ月もたらずに判決が出された。その内容は非常に厳しいもので、ラクフ学院の閉鎖、教師陣の国外追放、ラクフ内の教会や印刷所の取り潰しや異端の実践の禁止などが命じられた。判決までの過程は非常に簡略化されたもので、判決は元老院から発表され、審理の過程から代議院ははずされた。これは、逃亡農民にのみ適用されていた略式裁判がシュラフタ身分に適用された最初の例だという¹⁰¹。イエジー・ニェミリチやヤヌシュ・ラヂヴィウ **Janusz Radziwiłł** (1612-1655) などのポーランド兄弟団信徒、カルヴァン派、ボヘミア兄弟団、一部のカトリック教徒からなる議員の代表団が異議を申し立てたが、この試みもよい成果をもたらす事はなかった。

こうして、ポーランドにおけるプロテスタント運動の中心地は破壊された。この後、ポーランド兄弟団の運動は急速に制限されていく。

3. 「大洪水」と「大亡命」

ラクフ解体の後、ポーランド国内におけるポーランド兄弟団迫害は加速する。彼らにとっては最も辛い時期の到来であり、彼らはスウェーデンやトランシルヴァニアなどのプロ

¹⁰⁰ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 174.

¹⁰¹ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 179.

テスタント国に援助を期待するようになっていった。そして、1655年のスウェーデン軍による本格的な侵攻が、ポーランドにおけるポーランド兄弟団の運動に終止符を打つことになる。ここでは、ラクフ解体後から亡命までの流れ、その後の彼らの活動について明らかにする。

3-1. ラクフ解体後のポーランド兄弟団

ラクフを追われた人々はトランシルヴァニアや、カルヴァン派学校が栄えていたエルブロンクなどへ散った。新しい中心地となったのはキシェリン *Kisielin* で、ポーランド兄弟団の中心的指導者やラクフ学院で講師を務めていた人々の多くが移り住んだ。教育体制が整えられ、第二のラクフに成長するかと思われたが、イエズス会の働きかけによって学校や教会の閉鎖が命じられてしまう。ラクフ解体はポーランド兄弟団にとって致命的な前例となっていた。

一方、ポーランド兄弟団を敵視する人々にとって、ラクフの解体は迫害を強めるよい口実になった。特にグダンスクではそれが顕著だった。この町では、ルアールが町の有力者の娘と結婚し、布教活動を先導していた。1639年、グダンスクの市参事会はポーランド兄弟団を根絶することを決意し、ルアールを町から追放した。ポーランド兄弟団の代表者たちや、クラクフ城代であり、ポーランド王国の大ヘトマンであったスタニスワフ・コニェツポルスキ *Stanisław Koniecpolski* (1591-1646) などがルアールを町へ戻すように働きかけた。コニェツポルスキは、ルアールを国王に仕えさせることでグダンスクに圧力をかけようと考えたが、グダンスクはポーランド兄弟団を追放するためには国王との武力衝突をも辞さない強固な姿勢を示し、結局ルアールは市民権を失い、グダンスク近郊の町ストラシン *Straszyn* へと移り住んだ。

ヨナシュ・シュリフティングは、1642年に著した『キリスト教信仰告白』(*Confessio fidei Christianae*) が神を冒瀆しているとして法廷に訴えられた。シュリフティングは出廷を拒否。被告不在のまま宣言された判決は非常に厳しいものだった。1647年、彼の作品がワルシャワの中央広場で燃やされたのち、ポーランド王国全土の、ポーランド兄弟団の全ての学校および印刷所を閉鎖する勅令が発布されたのだ。この瞬間から、国内におけるポーランド兄弟団のあらゆる活動は、国外追放や財産没収の危険を伴うこととなった¹⁰²。ポーランド兄弟団は表立った活動を制限され、指導者たちは——ヴィショヴァティがルアールの住むストラシンに向かったように——大都市から離れていった。こうした迫害は、ポーランド兄弟団の信徒減少をもたらした。例えば、シュリフティングのパトロンであったブウォンスキ家 *Błoński* は、シュリフティングが告発された後にカルヴァン派へと転向。最終的にはカトリックに改宗している¹⁰³。

¹⁰² Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 197.

¹⁰³ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 198.

1545年、国王ヴワディスワフ4世の提唱により、カトリックとプロテスタントの話し合いの場が持たれた。この会合は、「慈愛会議」(Colloquium charitativum)と呼ばれている。ポーランド兄弟団は、この会談が迫害緩和のきっかけとなることを期待し、ルアール、クシシュトフ・ルビェニェツキ(ジュニア)、シュリフティングという中心人物を送り込んだ。この会談はしかし、カトリックとプロテスタント諸派の違いを浮き彫りにした以外に特に成果はなく、さらにポーランド兄弟団の参加は拒否されてしまった。

カトリックからの攻撃の内容は、時と共に変化した。初期のポーランド兄弟団は、教義や政策について論争することによってカトリックと戦っていたが、この頃になるとイエズス会の論文は侮蔑や嘲笑を含んだ中傷で溢れるようになった。イエズス会の司教が「アリウス派は神ではなく悪魔を信じている」と述べたとき、それを信じる人まで現れたという¹⁰⁴。

この時代、ポーランド兄弟団の最も強力な敵対者は大法官イェジー・オソリンスキ Jerzy Ossoliński (1595-1650)であった。彼はラクフ解体の張本人であり、ワルシャワ連盟協約を引き合いに出して権利を主張する非カトリック派のシュラフタを国政に参加させないよう奔走した。彼の努力は1648年について実を結んだ。ヴワディスワフ4世死後のこの年、召集国会¹⁰⁵において、彼はワルシャワ連盟協約に権利を保障する対象として記されている「信仰において相異なる我々¹⁰⁶」(dissidentes de religione)にはポーランド兄弟団は含まれないと主張した。先王ズィグムント3世の死後にこの問題が議題に上った際には、全プロテスタントがこれに抵抗した。しかし、今回反対にまわったのはポーランド兄弟団のみであった。これ以降、ワルシャワ連盟協約からポーランド兄弟団は排除され、彼らはポーランド国内における法の保護を失ってしまった。

3-2. 大洪水

1555年の夏、ポーランド王国の弱体化をみたスウェーデン王カール10世グスタフ Karl X Gustav (1654-1660)はポーランドに侵攻した。ヴィエルコポルスカを防衛していたポズナン知事のクシシュトフ・オパリンスキ Krzysztof Opaliński (1609-1655)や、ヤヌシュ・ラヂヴィウをはじめとしたリトアニアのマグナートなど、ヤン・カジミェシュ王に不満をもつ有力者の裏切りにより、クラクフやワルシャワは瞬間に占領された。イエズス会の修道士だったこともあるこの国王はポーランドを嫌い、長期間国外にいたこともあり、国内に大きな支持基盤を持たなかった。国王がシロンスクへ亡命すると、ポーランドのプロテスタントの多くが国王への忠誠から解放されたと考え、プロテスタント国家であるスウェーデン軍に降伏した。また、カトリック教徒の中にもスウェーデン側につく者がいた。カトリックからの激しい迫害に遭っていたポーランド兄弟団も例外ではなかった。クシシュ

¹⁰⁴ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 210.

¹⁰⁵ Sejm konwokacyjny: 選挙前に召集される国会のこと。

¹⁰⁶ 小山「ワルシャワ連盟協約の成立」、84頁。

トフ・ルビェニェツキ（ジュニア）の子スタニスワフ（ジュニア）やイエジー・ニェミリチが中心となり、カール・グスタフに迫害の様子を訴え、宗教的自由の保障を求めた。このスウェーデン王はポーランド国内にカトリック勢力が強いことを考慮して明言を避けたが、ポーランド兄弟団は、自分達の運命を変える存在として、彼に大きな期待を寄せていた。

9月にはパルチザンという形をとってポーランドの反撃が始まった。ヤン・カジミェシュは亡命先からポーランドのシュラフタたちに決起を呼びかけた。丁度この頃、ヤン・カジミェシュに敵対していたオパリンスキとヤヌシュ・ラヂヴィウが死去した。さらに、チェンストホーヴァのヤスナ・グラ僧院の防衛をきっかけに、両軍の状況は正反対に転じた。

この頃、ポーランドのカトリック教徒たちの怒りは、スウェーデン軍だけでなく、ポーランドにおけるあらゆるプロテスタント勢力にも向けられた。ポーランド兄弟団はその絶好的となった。1655年、カトリック聖職者に扇動された山岳人たちがノヴィ・ソンチ Nowy Sącz のポーランド兄弟団を襲い、多くの信徒が殺害された。その後、ノヴィ・ソンチの少し西に位置する村ポグージェ Pogórze にも暴徒が現れ、ポーランド兄弟団のシュラフタの家を襲い、多くが殺害された。ピンチュフ近郊にあるヒエロニム・モスコジョフスキ（ジュニア）¹⁰⁷ Hieronim Moskorzowski (1627頃-1661頃)の所領チャルコーヴィ Czarkowy では教会や図書館が襲われた。その頃この町の牧師であったスタニスワフ・ルビェニェツキ（ジュニア）が数冊の著作を持ち出すことに成功したものの、多くの書物は攻撃の対象となり、暴徒の帰り道にはポーランド兄弟団の著作物が散在したという¹⁰⁸。町を追われた人々はクラクフへと逃れた。

1556年1月になると、ヤン・カジミェシュがポーランドへ帰国し、反撃が始まる。4月にはパルチザンがレシュノを襲い、非カトリック派の人々を虐殺し、教会を焼き尽くした。単独ではポーランド征服を維持できないと考えたカール・グスタフは、ブランデンブルク選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルム Friedrich Wilhelm（在位 1640-1688）、トランシルヴァニア公ラーコーツィ・ジェルジュ 2世 II. Rákóczi György（在位 1648-1657）、フミェルニツキなどにポーランド分割を提案した。トランシルヴァニア公にはマウオポルスカ地方が与えられることになり、クラクフに潜んでいたポーランド兄弟団の人々は、トランシルヴァニアからやってきたユニテリアン派と、クラクフのコニェツポルスキ邸で毎日集会を開いた。

結局、ブランデンブルク選帝侯は中立を保ち、フミェルニツキは死去、ラーコーツィもポーランド軍に敗れたため、スウェーデンは孤立することになった。1557年6月、スウェーデン軍はいくつかの守備軍を残して撤退した。この時、スタニスワフ・ルビェニェツキ（ジュニア）がポーランド兄弟団の代表としてスウェーデン軍と共に移動し、カール・グスタフに謁見している。

スウェーデン軍に参加していたカトリックのシュラフタたちは徐々にヤン・カジミェシュの陣営に戻り始めた。同じ頃、ポーランド兄弟団の内部でも、同じポーランド人が戦っ

¹⁰⁷ 『ラクフ教理問答集』編集者の一人であるヒエロニム・モスコジョフスキの孫にあたる。

¹⁰⁸ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 228.

ている相手の保護をこれ以上受け続けていいものかどうかという葛藤が生じていた。しかし、ポーランド兄弟団がヤン・カジミェシュ陣営に戻るのは容易ではなかった。カトリック教会はポーランド兄弟団がスウェーデン陣営に留まるようにあらゆる手を使っていたのだ。カトリック聖職者たちは、近年ポーランドが蒙っている不幸はすべてポーランド兄弟団の所業にくだされた天からの罰なのだと説いた。カトリック、プロテスタント問わず、スウェーデン軍に味方した人々は多かったものの、ポーランド兄弟団以外のそうした人々については、すべて不問となった。カトリック教会は、この問題がポーランド兄弟団を追放する好機だとみるや、国家に対する不実の罪のスケープゴートに仕立て上げたのだった。ポーランド兄弟団の中には、イエジー・ニェミリチの弟ステファン Stefan Niemirycz (1630 頃-1684) や、詩人ヴァーツワフ・ポトツキ Wacław Potocki (1621 頃-1696) のように、ポーランド側について戦った人々もいたが、それについては何も触れられなかった。これに関して、ゴワシェフスキは次のように述べている。

スウェーデン軍の第一波に際してカール・グスタフの側についたカトリック・シュラフタたちは、その数において、ポーランド中のポーランド兄弟団をも上回っていたことを忘れてはならない。しかし、カトリック聖職者たちは「大洪水」のはじまりからすでに、全プロテスタントの裏切りという神話、カトリック教会の敬虔な信者たちによる祖国の防衛という神話を作りあげていたのだ¹⁰⁹。

1658 年、スウェーデン侵攻後初の国会が開かれ、ポーランド兄弟団は、その信仰を放棄しない限り、3 年後の 1661 年までに全財産を処分し、ポーランドを去るよにという決定がなされた。これが守られない場合には、死刑が科せられることとなった。

さらに、1659 年 3 月 22 日に召集された国会にて、ポーランド兄弟団の追放期限を 1 年間短縮の 1660 年 7 月 10 日までとし、さらに国内に留まるための条件はカトリック改宗のみとする法令が制定された。追放までの残された時間で、彼らは出来る限りの努力をした。1660 年 3 月 10 日から 16 日にかけて、カトリックとの討論の機会がもたれ、ズビグニェフ・モルシュティン Zbigniew Morsztyn (1628 頃-1689) やアンジェイ・ヴィショヴァティが参加したが、成果は無かった。サムエル・プシプコフスキは、「大洪水」などの不幸な出来事はポーランド兄弟団が引き起こしたものだという中傷に対し、匿名で、寛容なカトリック教徒がポーランド兄弟団追放を批判する、という形のパンフレットを著した。しかし、こうした努力にも拘わらず、事態は好転せぬまま約束の日がやってきた。ゴワシェフスキはこの亡命を、18 世紀末のポーランド分割後の知識人たちの大流出になぞらえ、次のように記している。

¹⁰⁹ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 239.

ポーランド兄弟団は、精力的な活動と多くの擁護者にも拘わらず、この追放令を取り消すことも、執行期間を遅らせることもできなかった。彼らは信教の自由を守るため、祖国を捨て、亡命を余儀なくされ、トランシルヴァニア、プロイセン公国、シロンスク、オランダ、イングランドなどに赴いた。多くの歴史家が指摘するように、この集団的大移動は 200 年後、19 世紀の大亡命に先立つ、「第一次大亡命」(pierwsza wielka emigracja)であった¹¹⁰。

3-3. 「大亡命」とその後

ポーランド兄弟団の主な亡命先としては、近隣のトランシルヴァニア、プロイセン公国、シロンスクの他、オランダやイングランドなどの遠方の国も挙げられる。1660 年当初は、ポーランドに隠れ住んで復活の機会を狙う者も多くいた。その中には、ラヂヴィウ家の保護を求め、ポドラシェに向かう者もいた。1662 年 6 月、ヤヌシュ・ラヂヴィウの弟、ボグスワフ・ラヂヴィウ Bogusław Radziwiłł (1620-1669) の所領であるザブウドゥフ Zabłudów において、ポーランド兄弟団の最後のスィノドが開かれた¹¹¹。ここでは、国内に隠れ住む信徒の保護や、国外離散の先導者などが取り決められた。この最後のスィノド開催は、皮肉にも、彼らの第一回目のスィノドが開かれてから丁度 100 年後の出来事だった。

1565 年にルボミルスキ Jerzy Sebastian Lubomirski (1616-1667) がロコシュを結成¹¹²すると、ポーランド兄弟団は改革を期待した。スタニスワフ・ルビェニェツキ (ジュニア)、ステファン・ニェミリチなどがこれに参加し、ポーランド兄弟団追放令の停止やワルシャワ連盟協約の維持を求めた。しかし、ルボミルスキの死により、祖国で活動するという彼らの夢は費えてしまった。

迫害を恐れてカトリックを受け入れた人々もいた。詩人であるヴァーツワフ・ポトツキはその一人であったが、彼の妻は 1675 年まで改宗を拒否し続けたため、彼の改宗には疑いがかけられた。彼の代表作である『ホチムの戦役』(*Transakcja wojny chocimskiej*) の刊行が、彼の死後およそ 2 世紀待たねばならなかった原因もここにあった。

ポーランドからの亡命を図る人々は、1650 年代からすでに現れ始めたが、1660 年の秋から、その流れは加速した。アレクサンドル・チャプリツ=シュパノフスキ¹¹³を中心とした一

¹¹⁰ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 249.

¹¹¹ これは一説に過ぎず、最後のスィノドが開かれた場所について確かなことはわかっていないという。

Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 249.

¹¹² 国王ヤン・カジミェシュが、次期国王にフランスのコンデ公ルイ 2 世 Louis II de Bourbon-Condé (1621-1686) の息子を据えようとしたことで、王権の強化を恐れたルボミルスキを中心とするマグナートが組織したロコシュ。1666 年に結成され、一時は国王軍を破ったが、ルボミルスキの死により瓦解した。

¹¹³ Aleksandr Czaplic-Szpanowski (?-1664) : キシェリンを所有するシュラフタで、ポーランド兄弟団のパトロン。ラクフ解体後、自身の所領を彼らに提供した。オランダやドイツ、イングランドに留学経験がある。ズビグニェフ・モルシュティンの義理の父にあたる。

団はシロンスクへ、ミコワイ・スホドルスキ¹¹⁴が率いる人々はトランシルヴァニアへ向かった。パヴェウ・ブジェスキ¹¹⁵を中心とした人々のように、移動中にポーランド軍から襲撃を受けて離散してしまうようなケースも存在した。トランシルヴァニアに向かった一団が規模において最も大きく、その数 500 といわれる¹¹⁶。彼らはコロシュヴァルを中心として宣教活動を行い、ルーマニア人、ハンガリー人と徐々に同化していった。

メンノ派の生活が保護されていたグダンスク¹¹⁷は、少し前にはポーランド兄弟団を迫害した町であったが、今や彼らの避難所となった。多くのポーランド兄弟団がこの町に逃げ込むことを許された。しかし、ポーランドに隠れ住んだ人々がいたとはいえ、彼ら指導的人物の多くが国外に亡命したことは確かである。彼らはポーランドに残った親族たちから経済援助を受けながらその思想の普及に努めた。当初、ドイツ南西部の都市マンハイム Mannheim が国外亡命の候補地として挙げられた。30年戦争によって荒廃してしまったこの町の人口確保のため、プファルツ選帝侯カール 1 世ルートヴィヒ Karl I Ludwig (在位 1648-1680) は当時、信仰の自由を保障する政策を打ち出しており、チェコの反三位一体派などが特に多く移住していた。ステファン・ニェミリチが「マンハイムのいかなる場所も、ポーランドを追われた兄弟団にとって危険ではなかった¹¹⁸」と語り、1663 年中葉にはアンジェイ・ヴィショヴァティやヨアヒム・ステグマンをはじめとするポーランド兄弟団の一団が到着、布教活動に努めた。しかし、この町で一大勢力を誇っていたルター派が彼らを迫害するようになり、1666 年には彼らのほぼ全てがこの町を離れねばならなかった。マンハイムを離れた他の信徒の例に漏れず、アンジェイ・ヴィショヴァティもその後アムステルダムに赴き、1678 年に永眠するまで滞在した。スタニスワフ・ルビェニェツキ (ジュニア) は 1660 年 10 月に家族と共にコペンハーゲンへ向かい、デンマーク王フレデリク 3 世 Frederik III (1609-1670) の庇護をうけた。

ズビグニェフ・モルシュティン一家やプシプコフスキ家の面々はプロイセンへと亡命した。プロイセンにおけるポーランド兄弟団の活動拠点となったのは、ルドゥフカ Rudówka およびコシノヴォ Kosinowo であった。1663 年、モルシュティンがルドゥフキに居を構え、ソツィーニ派の活動を継続するための環境を整えた。この町ではシノドが 2 度ほど召集され、トビアシュ・アルチシェフスキ Tobiasz Arciszewski (?-1676) などが牧師を務めた。しかし、ルドゥフキの信徒数は 1721 年の 44 人から 53 年には 20 人へと減少し、やが

¹¹⁴ Mikołaj Suchodolski (?-1670 頃) : ルブリン近郊に所領を持つシュラフタ。サムエル・プシプコフスキの娘と結婚している。

¹¹⁵ Paweł Brzeski (生没年不明) : プシエミシル地方のシュラフタ。スタニスワフ・ルビェニェツキ (ジュニア) の義理の父にあたる。

¹¹⁶ この数値はソツィーニ派の年代記作家によって様々であり、クシシュトフ・ルビェニェツキ (ジュニア) などは 500 人としているが、380 人とする説もある。Janusz Tazbir, *Bracia polscy na wygnaniu*, Warszawa 1977, s. 70.

¹¹⁷ メンノ派もポーランド兄弟団と同様、スウェーデンと共謀してポーランドを荒廃させたとして非難されたが、布教活動を行なわなかったことにより必要以上に嫌われなかったことに加え、経済発展への貢献が認められ、信仰の自由を許された。スタニスワフ・アウグスト・ポニャトフスキ王を含めた全てのポーランド国王が彼らの自由を確認している。

¹¹⁸ Tazbir, *Bracia polscy na wygnaniu*, s. 89.

て教会は閉鎖された¹¹⁹。コシノヴォの教会は19世紀初頭まで存続した。この地の指導者はサムエル・プシプコフスキであった。ヨハン・クレルの子、クシシュトフ・クレル=スピノフスキや、ヨナシュ・シュリフティングの子、クシシュトフ Krzysztof Szlichtyng (1620頃-1685頃)が牧師を務めた。1584年にルドゥフキに召集されたスィノドでは、アンジェイ・ヴィショヴァティの子ベネディクト Benedykt Wyszowaty (1650頃-1705頃)が牧師に任命されたが、ベネディクトがこれを拒否したため、トビアシュ・アルチシェフスキの兄弟であるサムエル・アルチシェフスキ Samuel Arciszewski (生没年不明)が牧師に選ばれた。その後もこの教会は存続し、1775年には70人ほどの信徒がコシノヴォに住んでいた¹²⁰という。1811年、この教会は閉鎖された。

遠方を目指した人々が最も多く亡命先に選択したのが、オランダであった。17世紀中頃から、クレルやプシプコフスキの著述、『ラクフ教理問答集』の英語版などがアムステルダムで刊行されていたこともあり、亡命者たちは出版の自由を期待していた。1656年から1692年にかけて、『ポーランド兄弟団文庫』(*Bibliotheca Fratrum Polonorum*)が刊行された。全10巻からなり、ソツツィーニ、クレル、シュリフティング、ヨハン・ヴォルツオーゲン、プシプコフスキなどの著作から構成されていた。この作品はオランダ議会によって危険な出版物だと判断され、1674年、ホッブズ Thomas Hobbes (1588-1679)の『リヴァイアサン』(*Leviathan*)、スピノザ Baruch Spinoza (1632-1677)の『神学政治論』(*Tractus Theologico-Politicus*)と共に焚書処分とすることが決定された¹²¹。オランダのアルミニウス派やコレギアント派はポーランド兄弟団に好意的であり、互いに何度も接触を重ねていた。スピノザは1650年代後半にコレギアント派の集会に参加しており、ポーランド兄弟団との接触もあったと考えられている。また、思想の類似点も指摘されている¹²²。また、オランダの画家、レンブラント Rembrandt Harmenszoon van Rijn (1606-1669)もポーランド兄弟団に興味を持っていたといわれている。レンブラントは1655年に『ポーランドの騎手』(*Eques Polonus*)という作品を完成させているが、このモデルとなったのがヨナシュ・シュリフティングではないかという推論が存在するのである¹²³。1653年、オランダ政府がソツツィーニ派の布教やソツツィーニ派の本の印刷・販売に重い刑罰を適用するという法令を発したことを受け、翌1654年、シュリフティングはオランダ政府に対して寛容を説く『ホラント、西フリースラント州政府に告発された真理のための弁明。ポーランドの一騎士著¹²⁴』(*Apologia pro veritate accusata ad illustrissimos et potentissimos Holandiae et West-Frisiae Ordines, Conscripta ab Equite Polono*) (以下『真理のための弁明』と略記)という論文を刊行した。彼は、ペンネームを「ポーランドの一騎士」としたのである。それに対して翌年1655

¹¹⁹ Tazbir, *Bracia polscy na wygnaniu*, s. 132.

¹²⁰ Tazbir, *Bracia polscy na wygnaniu*, s. 135.

¹²¹ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 295.

¹²² Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 299-300.

¹²³ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 302-303.

¹²⁴ 邦題はベール『歴史批評辞典』III、611頁に拠った。

年にライデン大学の神学教授であったコッツェーユス Johannes Cocceius (1603-1669) が『ポーランドの騎士の弁明書の検討¹²⁵』(*Equitis Poloni Apologia examinata*) を著した。こうした論争の中、レンブラントの作品は描かれたのである。

ドイツでは、ヴィシヨヴァティなどがマンハイムを離れた後も、残った人々が積極的に活動を続けた。ポーランド兄弟団に興味を持つドイツ人も多く、1739年になっても『ラクフ教理問答集』のドイツ語版が刊行されていた。プーフェンドルフ Samuel von Pufendorf (1632-1694) はポーランド兄弟団の合理主義を評価しているし、ライプニッツ Gottfried Wilhelm Leibniz (1646-1716) はアンジェイ・ヴィシヨヴァティの著述を所有しており、スタニスワフ・ルビェニェツキ (ジュニア) の子、テオドル Teodor Lubieniecki (1654-1718 頃) と文通をしていたことがわかっている。

フランスでは、カルヴァン派の指導者や、王権神授説を唱えたボシュエ Jacques-Bénigne Bossuet (1627-1704) などが、彼らの寛容思想を批判した。一方、ポーランド兄弟団に興味を示したフランス知識人も少なくなかったことが知られている。ホップズの翻訳などで知られるフランスの哲学者ソルビエール Samuel de Sorbière (1615-1670) は、ヴィシヨヴァティと親交があり、クレルの『信教の自由のための弁明』(*Vindiciae pro religionis libertate*) をフランス語に翻訳した。ピエール・ベール Pierre Bayle (1647-1706) は、ポーランド兄弟団の教義について熟知しており、『歴史批評辞典』(*Dictionnaire historique et critique*) には非常に詳細な説明が見られる。また、シュリフティングの著述『真理のための弁明』に対しても、好意的な見解を示した。また、フランスの啓蒙思想家ディドロ Denis Diderot (1713-1784) の友人であり、哲学者であるジャック=アンドレ・ネジヨン Jacques-André Naigeon (1738-1810) は、クレルの『信教の自由のための弁明』を、その初版から 100 年以上も経った 1769 年にフランス語に翻訳している¹²⁶。

イングランドでは、『ラクフ教理問答集』がイングランド反三位一体主義者のジョン・ビッドル John Bidle (1615-1662) によって英語に翻訳されている。また、『ポーランド兄弟団文庫』の存在もよく知られていた。護国卿クロムウェル Oliver Cromwell (1599-1658) はソツツイーニ派に関する書物を特に弾圧しなかったため、彼らの出版物はイングランドに広く出回った。イングランドの反三位一体派はポーランド兄弟団を快く迎え入れた。ポーランド兄弟団は、弾圧の対象になりかねない「ソツツイーニ派」という名の使用を避け、トランシルヴァニアで用いられていたユニテリアン派を名乗るようになったという¹²⁷。ニュートン Isaac Newton (1642-1727) やロック John Locke (1632-1704) は、ポーランド兄弟団に対する興味を否定していたものの、彼らの著述を所持していたことが知られている。特に、ロックの蔵書には、『ラクフ教理問答集』2冊 (1665年版及び1681年版)、ソツツイーニ、クレル、シュマルツ、シュリフティング、プシプコフスキ、ヴィシヨヴァティなど

¹²⁵ 邦題はベール『歴史批評辞典』III、626頁に拠った。

¹²⁶ Tazbir, *Reformacja*, s. 125.

¹²⁷ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 309.

の著作が含まれていたという¹²⁸。クシシュトフ・クレル=スピノフスキはイングランドで精力的に活動し、彼の息子、サムエル Samuel Crell-Spinowski (1660-1747) は、ロック、ニュートン、ベールなどと広い交友関係を築いた。さらに、彼の息子であるステファン Stefan (生没年不明) 及びユゼフ Józef (生没年不明) は北アメリカに渡り、ユニテリアン思想を広めた。ハーバード大学やイエール大学の図書館には、18世紀にはすでに、クレル、シュリフティング、ソツツィーニの著述の他、スタニスワフ・ルビェニェツキ (ジュニア) の『ポーランド宗教改革史』(*Historia Reformationes Polonicae*)、『ポーランド兄弟団文庫』などが納められていたという。

さらに、1717年の「ロンドン大会所」(Grand Lodge of London)の結成と共に歴史の表舞台に姿を現したフリーメイソンへの影響についても推測が成されている。この大会所の成立が、亡命ポーランド兄弟団のイングランドにおける活動の時期と一致すること、両者の掲げたスローガンが非常に似通っていること、そして、『フリーメイソン憲章』(*The Constitutions of the Free-Masons*)の作成に関わったジャン=テオフィル・デザギュリエ Jean-Théophile Desaguliers (1683-1744) がロンドン王立協会¹²⁹の会員であり、ポーランド兄弟団に興味を示していたニュートンと親交を結んでいたことなどが、その根拠となっている¹³⁰。

¹²⁸ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 313-314.

¹²⁹ The Royal Society : 1662年に設立された、現存する最古の科学学会。

¹³⁰ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 325-326.

第4章 ポーランドにおける寛容と

ポーランド兄弟団による寛容の実践

これまで、ポーランド兄弟団が誕生し、歴史舞台から姿を消すまでの流れを追ってきたが、ここからは彼らの寛容姿勢に目を向ける。まず、彼らを生み出し、自由な活動を許した「ポーランド的寛容」がいかなるものであったのかを確認したい。そして、そうした環境の中、ポーランド兄弟団の運動に「寛容」と評価しうる「実践」があったのかを明らかにしたい。寛容の「実践」をキーワードとした場合、一見「寛容」に思われる事柄も、寛容精神に由来するものではない可能性もある。したがって、この章では寛容を「他者あるいは少数派を差別・迫害せずに認容する態度」と定義し、寛容の外面的な現れのみについて考える。

1. 宗教改革期のヨーロッパ

まず、16世紀ポーランドにおける宗教的寛容の特徴を浮かび上がらせるために、同時代ヨーロッパにおける宗教改革と、それに伴う宗派对立の状況について触れておかなければならない。それまで、ヴァルド派、フス派などによって、カトリック教会への抵抗は試みられたが、広範に及ぶ影響を与えることはなかった。しかし、1517年にルターによって始められたプロテスタント運動は急激に成長し、ヨーロッパ社会の変動を促すまでになる。ここでは、西欧各国の宗教改革の影響と、こうした中で生まれた再洗礼派と反三位一体派という、この時代の異端二大潮流の動きについて概観する。

1-1. 再洗礼と反三位一体派

ルターをはじめとした宗教改革の指導者たちは、ウィクリフやフス、ヴァルド派やフス派を、ローマ・カトリック教会を批判した先達として評価した。しかし、その一方で彼らは同時代の急進的分派に対しては、その宗教的・社会的な急進性を理由に、批判的・禁圧的な態度を示した。一方、ドイツやスイス、オランダの再洗礼派たちは、ルターやカルヴァンといった初期の宗教改革者達が、アタナシウス信条などのカトリック教義を維持することを選んだことに対し、不満を抱いた。彼らによれば、信仰の尺度は唯一、聖書に限られるべきであった。ここに、保守的傾向を有する主流プロテスタント諸派と、急進的分派の対立が生まれた。再洗礼派とは、幼児洗礼を否定し、洗礼はみずから信仰を告白したの

ちに受けるべきで、これに先立つべきではないと考える立場を指す。トマス・ミュンツァー Thomas Münzer (1490 頃-1525) が説教師として赴いたザクセン選帝侯国の都市、ツヴィッカウ Zwickau で出会った人々の中に、幼児洗礼反対を信条として掲げた集団があり、彼らは、宗教改革において再洗礼を採用した最初の組織立った集団だったとされている¹³¹。彼らは 1521 年にヴィッテンベルクへ移り、ルターによって敵視され、追放された。1525 年、チューリヒにて「スイス兄弟団」という分派が再洗礼の実践を始めたが、ツヴィングリ Huldrych Zwingli (1484-1531) によって迫害された。ツヴィングリによれば、彼らは「公安をみだし、兄弟愛と市民の協和をみだし、各種の害悪をよびおこす¹³²」ものとされていたが、実際には再洗礼派は完全な平和主義者であり、彼が主張したような性格は見られなかった。ツヴィングリが真に恐れていたのは、彼らが下層階級に属する民衆や職人・商人階級から支持を得ていたことだった。再洗礼を主張した者の多くは、社会革命とは距離を置くような消極的な立場を取っており、その意味では国家の脅威になるような存在ではなかったのだが、一部の急進的な再洗礼派によるミュンスター支配¹³³ののち、再洗礼派に対する迫害はさらに激しいものになった。しかし、そうした迫害の一方で、経済的理由などから再洗礼派を積極的に受け入れる動きもあった。例えば 1520 年頃、ルター派を信奉していたプロイセン公国が、ポーランドとの戦争で破壊された国土の復興のためにオランダの再洗礼派を招き入れたことや、ポーランドのグダンスクやエルブロンクなどの都市にメンノ派が流入したこと、モラヴィアで貴族の所領開発のための労働者として再洗礼派をはじめとした諸分派が招かれたことなど¹³⁴がその例として挙げられよう。

三位一体論に異議を唱えた存在としては、古代キリスト教の中に現れたアリウス派がある。アレクサンドリア司祭のアリウスが唱えた反三位一体の教義はシリアやパレスチナで支持を得た。これを調停するため、キリスト教史上初の公会議が 4 世紀に小アジアの都市ニカイア Nicaea で開かれ、アリウスおよびその支持者たちは異端として破門される。しかし、ゲルマン民族が挙って採用するなど、アリウス派が持つ影響力は依然大きかった。だが、ゲルマン諸国家がつぎつぎと滅び、フランク王国が正統カトリックを受容したことで、この教義は歴史の表舞台からは姿を消した。

ユニテリアン主義の歴史は、宗教改革期に現れたミカエル・セルヴェトゥス¹³⁵と共に始まる。フランス留学中に反三位一体思想に傾倒したセルヴェトゥスは、1531 年に『三位一体

¹³¹ カメン『寛容思想の系譜』、79 頁。

¹³² カメン『寛容思想の系譜』、80 頁。

¹³³ 狂信的な再洗礼派によってドイツの都市西北ミュンスター Münstcr が支配され、それを包囲したカトリックの軍によって住民の大多数が惨殺された事件。詳しくはカメン『寛容思想の系譜』、94-97 頁を参照。

¹³⁴ カメン『寛容思想の系譜』、84-85 頁および Tazbir, *Reformacja*, s. 71-72.

¹³⁵ Michael Servetus (1511-1553) : スペインで生まれ、フランチェスコ会の修道士に仕えて見聞を広める。次第に反三位一体論を奉ずるようになり、この思想に関連した著述を公にしたが、迫害を避けるために名を偽って生活した。1553 年にヴィエヌヌの異端裁判所に逮捕、投獄されるが、脱獄。数ヶ月後にジュネーヴに姿を現したところを捕えられ、処刑された。彼の生涯については、『宗教改革著作集 第十巻』出村彰・丸山忠考・飯島啓二訳、教文館、1993 年、292-295 頁。

論の誤謬について¹³⁶』(De Trinitatis Erroribus)を公にした。三位一体説に真っ向から反対するこの論文は、旧教、新教の双方に警戒を抱かせた。1553年、ジュネーヴで捕えられたセルヴェトゥスは、その地でカルヴァンの告発により火刑に処せられた。この出来事は、カルヴァンの不寛容な指導者というイメージを不動のものにするとともに、他の反三位一体派が寛容論を展開していくきっかけとなった。とはいえ、当時の一般の反響は、カルヴァンの立場から、セルヴェトゥスの処刑を是認するものであり、抗議の声はわずかしかなかった。その、わずかな反対者の中に、セバスチャン・カステッリョ¹³⁷がいた。彼はカトリックからカルヴァン派へと改宗し、カルヴァンの弟子となったものの、その思想の異端性からその地位を追われた人物であった。彼は、セルヴェトゥスの火刑に際して、『異端は迫害さるべきか¹³⁸』(De haereticis, an sint persequendi)を匿名で公にした。この著作の中で示された彼の寛容思想は、彼の死後、後世の思想家たちに存分に利用されることとなった。彼らの影響を受けた反三位一体派はポーランドやトランシルヴァニアで大きく成長し、イングランドや北アメリカに広まり、現在まで存続している。

1-2. 16-17世紀の西欧諸国における宗教改革の経過

西欧諸国での宗教改革の展開は決して一様ではなかった。宗教改革の母国ともいえるドイツではルター派の勢いが強く、カトリック教会を支持する神聖ローマ皇帝とルター派諸侯が、シュマルカルデン戦争などで対立した。こうした対立を収めるため、1555年9月25日にアウグスブルクで協定が結ばれた。このアウグスブルクの宗教和議は、ルター派の諸侯に対して旧教諸侯と同等の権利を認めるものだったが、一つの領邦には一つの宗教しか存在してはならないという原則があり、その宗教を決定するのは領邦の統治者であった。君侯以外の人々には信教の自由は一切認められなかった。また、諸侯たちに認められたのは旧教とルター主義のみで、その他の信仰は排除されていた。三十年戦争の結果結ばれたウェストファリア条約(1648年)では、カルヴァン派の信仰が認められると同時に、アウグスブルクの宗教和議の原則が再び確認された。しかし、この条約はある程度の礼拝の自由を認めていたため、以後、領邦の統治者の改宗を理由に、領民が改宗を要求されることは実質なくなった。

フランスの宗教改革は、初期はルターの影響を受けていたが、のちにカルヴァン派が勢いを持ち始める。彼らはカトリック側からはユグノーと呼ばれた。カルヴァン派は下層

¹³⁶ 邦語訳は、出村・丸山・飯島『宗教改革著作集 第十巻』収録の出村彰訳「三位一体論の誤謬について(1531年)」に拠った。

¹³⁷ Sebastian Castellio (1515-1563) : ジュネーヴ近郊で生まれる。カルヴァンに憧れ、彼の亡命先のシュトラスブルクへ、カルヴァンと行動を共にするようになったが、思想の違いから離反。カルヴァンによるセルヴェトゥスの処刑を批判したことから、寛容の擁護者として後世に強い影響を及ぼす。カステッリョの生涯については、出村・丸山・飯島『宗教改革著作集 第十巻』、309-314頁。

¹³⁸ 邦語訳は、出村・丸山・飯島『宗教改革著作集 第十巻』収録の、出村彰訳「異端は迫害さるべきか(1554年)」(以下「異端は迫害さるべきか」と略記)に拠った。

諸階級だけでなく、貴族階級の間にも広がった。1559年にアンリ2世 Henri II（在位1547-1559）が死去すると、フランス国内でカトリックとプロテスタントの間で内戦が勃発した。以後40年続いたこの内戦は、ユグノー戦争と呼ばれる。この内戦の間にいくつかの寛容政策¹³⁹が発布されたにもかかわらず、この内戦は長期化し、1572年のサン・バルテルミーの虐殺という悲劇を生むことになる。この虐殺の犠牲になったプロテスタントはパリだけで3000人、フランス全土では数万人にのぼったといわれている¹⁴⁰。1598年にアンリ4世¹⁴¹によってナントの勅令が発布され、この宗教戦争はついに終結することになる。このナントの勅令によって、信教の自由が認められ、条件つきではあったが礼拝の自由までもが新教徒に与えられた。しかし、アンリ4世の死後、この勅令によって規定されていた特権は徐々に撤廃されていき、1685年に完全に撤廃される頃には、新教徒迫害が当然のように行われるようになっていた。

イングランドの宗教改革は大陸におけるそれとは違って政治的な動機が強く、ヘンリー8世 Henry VIII（在位1509-1547）は改革には消極的だった¹⁴²。彼の死後、プロテスタント的な改革がはじめられるが、1553年に王位に就いたメアリー1世 Mary I（在位1553-1558）は旧教復活の反動政策をとって新教徒を迫害した。このあまりに過激な弾圧は、新教徒の大きな不満を生み、エリザベス1世 Elizabeth I（在位1558-1603）による国教会体制の確立を促すことになった。それにともない、カトリック教徒は被迫害者の立場に転じる。1571年には、カトリックの宣教を行ったり、それに応じたりした場合に死刑を科すことが決められ、イエズス会士たちはイングランドの地を踏んだだけで死刑を宣告されたという¹⁴³。その後のジェームズ1世 James I（在位1603-1625）やチャールズ1世 Charles I（在位1625-1649）の時代にも、ピューリタンたちをはじめとした、様々な非国教徒が迫害の矢面に立たされることになったが、この両王は非国教徒に対し、エリザベス女王ほど厳しい態度で臨むことはなかった。また、オランダに生まれたアルミニウス派の国外活動の中心となったのは、ここイングランドであった。

スペインの支配下にあった宗教改革期のオランダには、まずルター派が広まり、1530年代には再洗礼派が流入してアムステルダムを中心に勢力を伸ばした。そして、1540年代になるとカルヴァン派が勢力を広げはじめた。貴族たちは迫害政策に反対したが、それは教会問題におけるスペインの統治者たちの主導権拡大を恐れたという政治的理由と、迫害は

¹³⁹ 改革派に都市の郊外での集会を許し、両派ともに武器の携行を禁じたオルレアン勅令（1562年1月）や、アンボワーズ勅令（1563年3月19日）、改革派の礼拝の自由を制限つきで保障したサン・ジェルマン勅令（1570年8月8日）など。

¹⁴⁰ 小泉徹『宗教改革とその時代』、山川出版社、1996年、13頁。

¹⁴¹ Henri IV（在位1572-1610）：ナヴァール王としてのアンリはプロテスタントだったが、彼の婚礼の際に発生したサン・バルテルミーの虐殺の際にカトリックに改宗して難を逃れた。幽閉されていたルーヴル宮から脱走して再び改革派に復帰したが、フランス王位に就くために再度カトリックに改宗した。

¹⁴² ヘンリー8世はルター思想に対しては関心を持っておらず、ローマ・カトリック教会から離れた原因としては、王妃キャサリン Catherine of Aragon（1485-1536）との離婚問題や、自分の意思に従わない王国内のカトリック勢力への不満などがあげられる。小泉徹『宗教改革とその時代』、40頁。

¹⁴³ Tazbir, *Reformacja*, s. 101.

ネーデルラントの通商貿易に有害になるという経済的理由からの行動だった¹⁴⁴。スペイン王フェリペ2世 Felipe II（在位 1558-1598）はネーデルラントの新教徒を根絶しようとアルバ公¹⁴⁵を派遣。迫害が始まり、オランダの貴族たちはそれに対抗して立ち上がった。オラニエ公ウィレム Willem I（在位 1572-1584）はネーデルラント人の大多数が信仰するカトリックとカルヴァン派とが対立しないように気を配り、全ての宗派を反スペイン運動へと結集させようとした。しかし、北部諸州でカルヴァン派が政治の実権をにぎると、旧教徒の立場は弱まり、さらに 1584 年にウィレムが暗殺された後は、全人口の十分の一にすぎない新教徒によって、多数派であった旧教徒が迫害されるようになった。しかし、17 世紀になると、オランダは次第に経済発展を遂げ、一挙に世界経済の中心的役割を担うようになった。こうした急成長を背景に、アムステルダムを中心としたオランダ都市は自由で寛容な雰囲気にも包まれ、他国から様々な知識人がやってくる文化の中心地となった。また、17 世紀初頭には、オランダ・カルヴァン派内部で新たな動きが起こる。オランダのカルヴァン主義者であったヤコブス・アルミニウスは、カルヴァンの予定説に疑問を抱いた。1603 年にライデン大学の教授となった彼が、カルヴァン主義よりもゆるやかな予定説を説くと、大きな神学論争が起こるほどの反響が起こった。彼の死後、彼の思想を支持する人々はアルミニウス派と呼ばれた。

2. ポーランドにおける宗教的寛容

以上のような、宗教改革によって引き起こされた宗教対立の時代にあって、「寛容の国」と呼ばれ、ポーランド兄弟団のような異端的分派が存続しえたポーランドという国は、実際どのように寛容であったか。第 1 章において既にポーランドにおける宗教改革の受容については確認しているため、ここでは宗教改革の影響下のポーランドについて、具体的に確認していく。その際、宗教改革のずっと前からポーランドが有していた、民族性、地理的状況、特殊な政治体制などの諸要素が、16 世紀ポーランドの寛容に強く影響しているという見解¹⁴⁶を踏まえ、まずはポーランドにおける寛容の伝統について概観することとする。

2-1. 宗教改革以前のポーランドにおける寛容の伝統

まず、宗教改革以前のポーランドと異教徒・異民族との関係について確認しておく。ポーランドがキリスト教を受容し、ヨーロッパの一員としてその歴史を歩み始めた 966 年当時、北方のバルト海沿岸中心にはプロイセン人が暮らしていた。10 世紀頃から、プラハ司

¹⁴⁴ カメン『寛容思想の系譜』、194 頁。

¹⁴⁵ 第 3 代アルバ公（1508-1583）はドイツ新教諸侯の反乱鎮圧で名をあげたスペインの将軍。フェリペ二世によってネーデルラント総督に任ぜられ、新教迫害の中心となった。

¹⁴⁶ Janusz Tazbir, *Tradycje tolerancji religijnej w Polsce*, Warszawa 1980（以下 *Tradycje* と略記）, s. 6-7.

教のヴォイチェフ¹⁴⁷やケルフルトのブルーノ Bruno von Querfurt (974 頃-1009) などが伝道を試み、殉教している¹⁴⁸。また、ポーランドは 12 世紀ごろからプロイセン地方に軍事遠征を行っており、1226 年にはマゾフシェ公コンラット Konrad I mazowiecki (在位 1200-1247) がプロイセン人征服のためにドイツ騎士修道会をポーランドへ招来している。

1241 年には、東方からモンゴル人が侵攻¹⁴⁹。ドイツと連合したポーランドはなんとかこれを退けたものの、総司令官を務めたヘンリク 2 世敬虔王 Henryk II Pobożny (在位 1238-1241) が戦死、王都クラクフの大部分が焼失するなど、甚大な被害を蒙った。

ユダヤ人がポーランドに流入したのは 12 世紀頃だといわれており、13 世紀にはクラクフ、ヴロツワフ、ポズナンを中心に定住していたことがわかっている¹⁵⁰。ポーランド各都市にユダヤ人共同体が多く形成された背景には、この当時西ヨーロッパで起こった大迫害を逃れて多くのユダヤ人がポーランドに流入したという事情がある。迫害されたユダヤ人を惹きつけたものとは、モンゴル軍によって荒廃した国土を商業の発展によって復興しようとポーランドの君主がユダヤ人に与えた様々な権利だった¹⁵¹。ユダヤ人は伝統的に金貸し業を営んでおり、教会がキリスト教徒にたいして商売としての高利貸しを禁止したために、なおさら重要な役割を果たすようになった。異教徒であるユダヤ人に対する、こうした寛容な姿勢があった一方、キリスト教住民による反ユダヤ感情について、多くの年代記に記述が見られる¹⁵²。ユダヤ人は、国家権力には保護されたものの、民衆との日常的なかかわりにおいては、必ずしも寛容な扱いを受けたわけではなかった。

1340 年代にカジミェシュ 3 世がルーシを併合した際、アルメニア人がポーランド領土に取り込まれた。彼らは独自のキリスト教を信奉していたが、それを理由に迫害を受けることはなかった。ルーシ併合地域ではアルメニア人は独自の慣習やアルメニア法を維持することができた¹⁵³。アルメニア人は都市住民との混在を許され、市政に参加することもでき

¹⁴⁷ Święty Wojciech (955 頃-997) : プラハの司教。ポーランドとチェコの守護聖人。西欧ではアダルベルトゥス Adalbertus として知られる。

¹⁴⁸ 当時プロイセン人は犬の頭を持っているなどと言われており、そうした未知の世界への伝道は恐怖に値するものだったようだ。プロイセン人にとっても、伝道師たちは未知のものであり、天災の原因とみなすなど、決して歓迎すべき存在ではなかった。Ian Wood, *The Missionary Life – Saints and the evangelisation of Europe, 400 – 1050*, 2001, Longman, pp. 252-261 を参照。

¹⁴⁹ レグニツァの戦い Bitwa pod Legnicą、もしくはワールシュタットの戦い Schlacht bei Wahlstatt として知られる。ポーランドが異教徒の脅威にさらされていたことを物語っている。

¹⁵⁰ Jerzy Wyrozumski, *Tolerancja jako przejaw pluralizmu kultury polskiej*, w: *Zeszyty Naukowe Uniwersytetu Jagiellońskiego, Prace Pedagogiczne 9*, Kraków 1988 (以下 *Tolerancja* と略記), s. 54.

¹⁵¹ 伊勢田「ポーランドにおける宗教改革運動」、105 頁。例えば、1264 年にカリシュ侯ボレスワフ Bolesław Pobożny (在位 1247-1249) がユダヤ人に承認した特権では、ユダヤ人は直接国王や県知事の保護下に置かれ、キリスト教徒による迫害からの保護、シナゴークや墓地の管理、ユダヤ法による独自の裁判権、商業や金融業の自由などが認められた。ヴィエルコポルスカ地方のユダヤ人に対するこの特権は、カジミェシュ 3 世 Kazimierz III Wielki (在位 1333-1370) によってポーランド全土へと拡大された。

¹⁵² ユダヤ人の排斥運動は 1367 年のポズナン、1407 年のクラクフなどをはじめとしてしばしば起こり、水に毒を流し込んだ、伝染病を運び込んだ、ミサのパンを盗んだ、などの問責を受けることもあったという。Wyrozumski, *Tolerancja*, s. 55.

¹⁵³ これは、ヤドヴィガ Jadwiga (在位 1384-1399) やヴワディスワフ 2 世 Władysław II Jagiełło (在位 1386-1434)、などの歴代国王によって繰り返し確認され、最終的には 1519 年にズィグムント 1 世によつ

たという¹⁵⁴。

中世ポーランドで活動した異端としては、ヴァルド派やベギン派¹⁵⁵がある。彼らは13世紀頃から、シロンスク地方を中心に宣教活動をはじめている。彼らに対する迫害の記録としては、『在ルビヨンシュ・シトー会編年誌¹⁵⁶』(*Rocznik cystersów lubiąskich*)に、1315年にシフィドニツァ Świdnica で女・子供を含む50名以上の異端者の処刑が行なわれたことが記されており、それを裏付けるように、この年のシフィドニツァにおけるヴァルド派の尋問記録も発見されたという¹⁵⁷。また、『在ミェフフ聖墳墓騎士団編年誌¹⁵⁸』(*Rocznik bożogrobców miechowskich*)には、1318年にベギン会修道士が処刑されたことが記されている¹⁵⁹。ポーランドでは、ヴァルド派の一部は生き延びることに成功したが、ベギン派は1319年には姿を消している¹⁶⁰。その一方で、例えばクラクフなど一部の都市では、彼らが都市当局から庇護を受けていたという記録もある。

ポーランドの異教徒との関係で最も興味深い出来事が、リトアニアとの連合である。1308年以降ポモージェ地方を占領したドイツ騎士修道会は、プロイセン地方を平定し、次なる標的として、当時大公国として徐々に力をつけていたリトアニアに目をつけた。彼らにとって、異教徒であるリトアニア人との戦いは聖戦であり、カトリックの守り手としての騎士修道会の存在意義そのものだった。バルト海貿易の覇権を騎士修道会と争うポーランドは、リトアニアとの距離を縮めていった。1384年にわずか11歳のヤドヴィガが即位すると、その結婚相手候補として、リトアニア大公ヤギェウォの名があがった。当時ヨーロッパで唯一原始宗教を維持していたリトアニアの君主がポーランドに迎えられるためには、キリスト教への改宗が不可欠だった。1385年、リトアニアの受洗やポーランドとの合同が取り決められ、翌年洗礼を受けたヤギェウォはポーランド王ヴワディスワフ2世として即位、ヤドヴィガとの共同統治がはじまり、ポーランドとリトアニアの同君連合が成立した。このリトアニアとの合同は、カトリック国家であったポーランドが、異教徒と結んでまで、同じカトリックを奉ずる、いわば同胞ともいえるドイツ騎士修道会と争ったという点で、象徴的な出来事だと云えよう。

こうしてリトアニアがキリスト教に改宗した後も、ドイツ騎士修道会はそれを承認せず、リトアニア遠征を続けたため、1410年7月15日にグルンヴァルトの戦い¹⁶¹ (*Bitwa pod*

て公認された。

¹⁵⁴ キェニエーヴィチ『ポーランド史』I、153頁およびWyrozumski, *Tolerancja*, s. 55-56などを参照。

¹⁵⁵ ベギン会は12世紀にネーデルラントにおこった半俗半僧の女子修道会。13世紀にはフランドルに男子修道会が生まれた。14世紀初頭に異端宣告された。

¹⁵⁶ シロンスク地方の都市ルビヨンシュ Lubiąż は、12世紀にポーランドで勢力を拡大したシトー会の活動の中心地であり、この当時建てられたシトー会修道院が今でも残っている。

¹⁵⁷ Wyrozumski, *Tolerancja*, s. 50.

¹⁵⁸ 聖墳墓騎士団は第一次十字軍の後、イェルサレムの聖墳墓守護のために1099年に結成された騎士修道会。創始者の親類にあたるヤクサ Jaksa (?-1176) が、自分の住むマウォボルスカ地方の都市ミェフフ Miechów に修道院を建て、彼らを招いた。

¹⁵⁹ Wyrozumski, *Tolerancja*, s. 51.

¹⁶⁰ キェニエーヴィチ『ポーランド史』I、116頁。

¹⁶¹ ドイツ語ではタンネンベルクの戦い (*Schlacht bei Tannenberg*) と呼ばれる。ポーランドはタタール人、

Grunwaldem) が勃発する。ポーランド北部の村グリンヴァルト周辺でポーランド＝リトアニアの連合軍とドイツ騎士修道会による合戦が行なわれた。1411年2月にトルンで和約が結ばれたが、その後も両国の間で戦が繰り返されたために、1414年に開かれたコンスタンツの公会議でその調停が行われることになった。この会議では、両国の代表による熾烈な論争が繰り広げられたものの、最終的な解決はなされず、その後も戦いが続いた。しかし、1525年4月10日になってようやく、ドイツ騎士団総長アルブレヒト・フォン・ブランデンブルク＝アンスバッハ Albrecht von Brandenburg-Ansbach (1490-1568) とポーランド王ズィグムント 1 世の間¹⁶² に条約が結ばれ、ドイツ騎士修道会はポーランドの宗主権を認めるプロイセン公国という名の世俗国となった¹⁶³。クラクフの中央広場で結ばれたこの条約は、ヨーロッパで初めてカトリックの国王とプロテスタントの公の間で結ばれた条約だという点に着目すれば、政教分離のさきがけという評価もできる¹⁶⁴。

ここで、コンスタンツの公会議に着目したい。ポーランドの代表はクラクフ大学の学長であったパヴェウ・ヴウォトコーヴィツ Paweł Włodkowic (1370頃-1435) だった。彼はブラハで法学を修めた後に聖職者となり、クラクフ大学で法学の講義を持っていた。ポーランドが異教徒の援軍を使って騎士修道会を攻撃したという批判に対して、彼は『異教徒に対する教皇と皇帝の権能について』(*Tractatus de potestate papae et imperatoris respectu infidelium*) という論文を提出するなどして反論した。この論文は1416年7月の初めに、会議で読み上げられた。彼は、ドイツ騎士団の後ろ盾となっている皇帝の権力が教皇権に従属するものだとし、異教徒も神の創造物である以上教皇の保護下におかれるべきであり、平穏な生活を望む無害な異教徒の安寧を侵害したり、暴力を用いて改宗を強いたりしてはならないとしている¹⁶⁵。こうした主張には、ドイツ騎士修道会を批判するための打算的意図があろうが、それを差し引いても、異質な存在への寛容を説いた、十分に先進的な思想だとみなすことができるだろう。

また、正教徒が多かったリトアニアの貴族に対して権利が保障される動きもあった。1413年、ポーランド東部の村ホロトウォ Horodło で条約が調印され、リトアニア人貴族がカトリックへの改宗を条件にポーランドのシュラフタと同等の財政的・法的特権を保障された。ヴワディスワフ 2 世は当初、ギリシア正教徒に対してはこうした権利を認めてはいなかったが、リトアニア貴族たちからの反発に遭い、この特権をリトアニアやルーシの正教徒にも広げた。その後も正教徒に対しては寛容政策がとられ、ズィグムント 1 世を始めとした

ルーシ人などの異教徒からなる傭兵隊を連合軍に引き入れていた。中世ヨーロッパ最大規模ともいわれるこの戦いは、5000の死者をだし、連合軍の勝利で幕を閉じた。

¹⁶² アルブレヒト公の母とズィグムント一世はともにカジミェシュ 4 世の子。つまり、この二人は叔父と甥の関係だった。

¹⁶³ この出来事は「プロイセンの臣従」(Hołd pruski) として知られる。

¹⁶⁴ Tazbir, *Reformacja*, s. 98.

¹⁶⁵ *Polska myśl demokratyczna w ciągu wieków*, oprac. M. Kridl, W. Malinowski, J. Wittlin, Warszawa 1986, s. 30-31.

歴代の国王が正教徒の権利を保障した¹⁶⁶。

2-2. 16世紀ポーランドにおける寛容

ルターによる宗教改革の波がポーランドに及んだ頃、ポーランドを治めていたのはズィグムント1世だった。彼は寛大な王であり、「ポーランド的寛容」を代表する人物だとする見解もあるようだが、彼が発した勅令のみをみる場合、彼は決して寛容の支持者ではなかったように思われる。1525年、王領プロイセンで農民反乱が起きたとき、ズィグムント1世は自ら出向いて武力鎮圧にあたっている¹⁶⁷。また、いくつかの勅令からは、異端に対して弾圧を以って対処する姿勢が感じられる。例えば、1520年にはルター派著作の出版を禁止する勅令が出され、これを犯した者はその財産を没収され、追放されることになった。その後も、ルター派やその他の異端によって書かれた書物の輸入、販売などが禁止され、宗教改革が盛んな地域の異端的傾向のある大学への留学が禁止されるなど¹⁶⁸、様々な反異端勅令が発布され、違反者には追放や死刑を科すことが決められていた。しかし、こうした勅令からイメージする異端者弾圧の風景と、実際に彼らが置かれていた状況は、全く異なるものであった。こうした反異端勅令が何度も繰り返し発布された背景には、これらの勅令がなかなか守られなかったという事実があった。実際、ルター派学問の中心地であったヴィッテンベルク大学やライプツィヒ大学の卒業生名簿には多くのポーランド人の名前が記されていたという¹⁶⁹。さらに重要なことは、こうした違反者に対して、処刑が適用されることはほとんどなかったということだ。その原因は、こうした勅令が議会では承認されず、法的な効力を持たなかったことにある。同身分のつながりを信仰以上に尊重するシュラフタの権限が強まり、ニヒル・ノヴィの原則がしっかりと作用していたのだと考えられる。この時代、異端に対する厳しい勅令が何度も出されたにも関わらずそれが守られず、そのことによってある種の寛な社会が実現していたことがわかる。また、1535年9月27日にズィグムント1世は再洗礼派をポーランドに入れてはならないという勅令を発布しているが、これはミュンスターでの事件の直後だということを考えれば、彼らの急進主義を嫌った、保守的な勅令だと断定することは決してできないだろう¹⁷⁰。実際、同じ頃のおランダの状況と比べても、ズィグムント一世の対応が決して厳しいものではなかったことがわ

¹⁶⁶ Bérenger Jean, *Tolerancja religijna w europie w czasach nowoożytych (XV-XVIII wiek)*, Poznań 2002, s. 60-61.

¹⁶⁷ これは、プロテスタントの公と条約を結んだことによってローマ教皇がズィグムント1世に抱いたであろうマイナスイメージを回復するためだったとされている。Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 43 を参照。

¹⁶⁸ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 44.

¹⁶⁹ Tazbir, *Reformacja*, s. 60.

¹⁷⁰ ミュンスターを支配していた狂信的な再洗礼派はこの街を絶対的な神権政治体制にし、激しい反対を抑えて一夫多妻制を採用、王権を握った人物は15人の妻を持ち、そのうち14人はみな20歳に満たなかったという。こうした出来事の直後では、単なる宗教的異端に感じる以上の嫌悪感などがあっただろうと想像できる。注133も参照。

かる¹⁷¹。また、ズィグムント 1 世はドイツでおこった宗教戦争には中立の立場を貫いた。1546 年、シュマルカルデン戦争が勃発して教皇から参加を要請された際には、これを拒否したという¹⁷²。彼は 1539 年に出版の自由を認める勅令を出しており¹⁷³、宗教戦争へ参加しなかったことなどと合わせて考えると、彼自身は寛容精神を持ち合わせた人物で、反異端勅令にはカトリック教会の圧力が働いていたとも考えられる。1526 年からメンノ派がポーランドへやってきたが、彼らは追放されることなく、シュラフタによって保護されているし、1525 年にミハウ・エゾフォーヴィチ *Michał Ezofowicz* (生没年不明) というユダヤ人がシュラフタの位を与えられた際、ズィグムント 1 世は彼にカトリックへの改宗を迫ったりはしなかった。彼の結婚もポーランドの宗教改革に大きな影響を及ぼした。1518 年、イタリアのミラノ公女ボナ・スフォルツァが彼に嫁いだことで、イタリアの文化が勢いよくポーランドへ流入。芸術家や知識人も多くやってきた。こうしてイタリアとの交流が盛んになったことが、反三位一体派がポーランドへ流入した原因の一つだっただろう。実際に彼らの多くがポーランドへやってきて、マグナートの保護を受けながら宗教改革で大きな役割を担っている。こうした中で、プロテスタント勢力は着実に勢力を広げていくことができた。

ズィグムント 1 世に対しては様々な評価がある一方で、その息子ズィグムント・アウグストは総じて寛容な君主という評価を受けている。こうした評価の根拠の一つには、1547 年に彼が、カトリック教徒である母ボナや周囲の反対を押し切り、カルヴァン派のマグナートであり、ミコワイ・ラヂヴィウ・チャルニの叔父にあたるイェジー・ラヂヴィウ *Jerzy Radziwiłł* (1480-1541) の娘、バルバラ・ラヂヴィウヴナ *Barbara Radziwiłłówna* (1520-1551) と極秘結婚したことがあるだろう。もちろん、彼はカトリック王国の君主として反異端勅令を出している。ボヘミア兄弟団の追放勅令¹⁷⁴や 1564 年の反三位一体派の外国人宣教師の追放令¹⁷⁵がその例として挙げられよう。しかし、こうした背景には常にカトリック・シュラフタからの圧力があり¹⁷⁶、彼個人的意思によるものだったとはいえない。というのも彼は、いくつか寛容政策も行っており、例えば、ルター派が勢力をもっていた王領プロイセン全域に信教の自由を認めている (1557-1558) し、1544 年にはプロイセン公アルブレヒトにケーニヒスベルクにルター派の大学を建てることを認め、この大学は当時のプロテスタント学問の中心となった。ポーランドで最初のポーランド語による聖書もここで発行されている。こうした国王の寛容政策を目の当たりにした教皇特使ベラルド・ボンジョヴァンニ *Berardo Bongiovanni* (1512 頃-1574) は、1560 年にローマに向けて、ズィグムント・アウグストが異端者との会話を楽しみ、手紙を受け取り、彼らの書籍を購入して読んでいる

¹⁷¹ 1535 年 6 月 10 日、オランダでは再洗礼派およびその支持者、再洗礼派を保護した者など全てを処刑に処すという勅令が発布されている。Tazbir, *Reformacja*, s. 71 を参照。

¹⁷² Tazbir, *Reformacja*, s.100.

¹⁷³ ミウオシュ『ポーランド文学史』、62 頁。

¹⁷⁴ 第 1 章 11 頁参照。

¹⁷⁵ 第 2 章 30 頁参照。

¹⁷⁶ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s.44.

という報告をしている¹⁷⁷。こうした彼の寛容な性質は幼少の頃から育まれたのかもしれない。彼はズィグムント 1 世と王妃ボナの息子として、イタリア的なルネサンス文化の中で育った。彼の周りには、イタリアからやってきた、宗教的に自由な思想を持った人々も多くいたのだろう。また、彼は当時様々な民族が暮らしていたヴィリニウスへ旅したことで、こうした様々な信仰をもつ人々を一つの国の中で統治するには、寛容政策が不可欠であると理解したという¹⁷⁸。ルター派を奉ずるプロイセン公国に対しては、そこに住むカトリック教徒の保護に尽力した。後の王たちもこれに続き、ズィグムント 3 世がついに、カトリック信仰の自由や教会の保持などをプロイセン公に約束させることに成功している¹⁷⁹。また、ズィグムント・アウグストには3人の娘がいたが、3人ともプロテスタント君主のもとに嫁いだということも付け加えておく。

2-3. ワルシャワ連盟協約

1573 年に結ばれたワルシャワ連盟協約は、当時のヨーロッパにおいて他に類を見ないほど画期的なもので、「ポーランド的寛容」を象徴するものだといえる。同じようにヨーロッパで最も優れた寛容令の一つといわれたナントの勅令が発布されるのは 25 年後のことである。その内容については次章に譲るとして、ここでは、歴史的にも非常に評価の高い¹⁸⁰この協約がどのような経緯で誕生したのかを確認したい。

まず、ワルシャワ連盟協約に先立って、ポーランドのプロテスタント勢力の間の相互協定が実現する。1565 年、イエズス会がポーランドへ到来し、ポーランドにおける対抗宗教改革が本格的にはじまる。こうした中で、国内の主要なプロテスタント諸宗派は生き延びるために互いに同盟を結ぶことを決意する。1570 年 4 月にサンドミェシュにルター派、カルヴァン派、ボヘミア兄弟団が集まって宗教会議を開き、相互協力が取り決められた。ここでは、各宗派の信仰告白と礼拝の独自性は認められ、維持されることになった。この取り決めは、プロテスタント同士が互いに迫害し合っていた他の国々と比べて、非常に優れたものだといえる。

1572 年のズィグムント・アウグストの死によって、ポーランドの政治体制に新しい特徴が生まれることになった。1569 年にルブリン合同によってポーランドとリトアニアはすでに一つの国家となっていたが、ズィグムント・アウグストが嫡子を残さず死去したために、その王座が空席となってしまう、次の王を選出する必要が生じたのだ。様々な宗派が鎬を削っている最中に生じた国王の不在という状況に、ポーランド国内を不安が覆った。とは

¹⁷⁷ Tazbir, *Reformacja*, s. 96.

¹⁷⁸ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 46.

¹⁷⁹ しかし、ズィグムント 3 世は、イエズス会士を支持してポーランド国内のプロテスタントを迫害しているため、これも単なるカトリック保護のための動きだとみなすことができ、寛容な考えが働いていたとは考えにくい。

¹⁸⁰ ワルシャワ連盟協約は、歴史的記録物の保存・公開を目的としたユネスコの遺産事業、「世界記録遺産」に 2003 年に登録されている。

いえ、マグナートや保守派シュラフタが危機感を覚える一方で、プロテスタントの中小シュラフタなどはこの状況を好機とみており、様々な思惑が交差していたといえるだろう。そうした中、空位期における国土の防衛と秩序の維持を目的に、各地で「連盟」(Konfederacja)が結成され始めた¹⁸¹。

最初の召集国会が開かれたのは1573年1月のことだった。この国会は国王選挙の方法、日時、場所などを決定するためのもので、候補者としてフランス王シャルル9世 Charles IX (在位1560-1574)の弟、アンリ・ド・ヴァロワ¹⁸²の名が挙がっていた。しかし、これはサン・バルテルミーの虐殺の翌年だったことで、ポーランド人はこの候補者を警戒していた。また、そうした西ヨーロッパで行われている虐殺を知っていたからこそ、国内の宗教対立に不安を感じていた。各州で結成されていた連盟は、召集国会をきっかけに集まり、全国規模の「ワルシャワ総連盟」(Konfederacja Generalna Warszawska)に発展した。そして、各宗派の代表者によって、宗派共存の保障を盛り込んだ連盟協約の草案が議会に提出するに至った。この協約は司教団の反対に遭いながらも成立したが、この段階ではまだ、マゾフシェ地方の保守派シュラフタを中心に激しい反対意見が依然として残っていた。

そんな状況を変え、ワルシャワ連盟協約に法的効力を与えるきっかけとなったのは、国王候補者のアンリであった。ポーランド王位を狙うフランスは、まずサン・バルテルミーの虐殺によるマイナスイメージを払拭しなくてはならなかった。そこで、ポーランドのカルヴァン派シュラフタたちの要求に応じ、国王シャルル9世はユグノーに対する迫害を中止した。ユグノーは、指定された都市における公的な礼拝やフランス全土における私的な信仰などを認められた¹⁸³。彼が国王になるためにはさらに2つの条件を認めなくてはならなかった。パクタ・コンヴェンタ¹⁸⁴とヘンリク諸条項¹⁸⁵である。ここで重要なのはヘンリク諸条項である。これは以後の国王たちがみな守らねばならない統治契約であり、その中にワルシャワ連盟協約が組み込まれていたのである。これは、宗教的平和の保障がない限りカトリックの王を承認しないというプロテスタント側の要求によるものだった。アンリ

¹⁸¹ 連盟とは、一定の政治目的をもって結成されるもので、目的が達成されると解散された。古くからシュラフタや都市が主体となって結成されることが多く、特にシュラフタが主体となる場合には国王やマグナートに対する反乱の性格を持っていることもしばしばだったが、1384年、ヤドヴィガが即位する際の空位期において、国内の秩序維持のための連盟が結成されている。こうした先例があったため、ズィグムント・アウグストの死による空位期においても、すぐさま各地にいくつもの連盟が結成され始めた。ズィグムント・アウグストの死後結成されたこの連盟以降、連盟は選挙王制というシステム上しばしば生じる空位期の期間中、国内の秩序維持を目的として結成されるものになった。州ごとに執行機関が設けられ、みずからの裁判官や軍隊指揮者を任命するまでになったという。詳しくは、鳥山成人『ロシア・東欧の国家と社会』恒文社、1985年、347-368頁。

¹⁸² のちのアンリ3世 Henri III (在位1574-1589)、ポーランド王としてはヘンリク・ヴァレーズィ。

¹⁸³ 小山「ワルシャワ連盟協約の成立」、102-103頁。

¹⁸⁴ Pacta conventa：ヘンリク王の個人的な義務を定めたもの。その内容は、王の費用による軍事援助、国家財政の補充など。

¹⁸⁵ Artykuły henrykowskie：宗教的平和の保護の他、国王自由選挙、2年ごと会期6週間の国会召集、国会の同意なしの総動員令や課税の禁止、評議会(元老院議員16名で構成)による国王の監督、シュラフタが持っていたすべての特権の容認、国王のシュラフタ特権侵犯に対するシュラフタの抵抗権などが定められていた。

は特にこの協約連盟の部分に難色を示したが、結局こうした条件を受け入れ、ポーランド王ヘンリクとして即位した。こうして、連盟協約は法的根拠を持つに至った。ヘンリク王は、3ヶ月後に兄シャルル9世が死去すると、夜のうちにポーランドを脱出、フランス王位についてしまったが、その後国王に選出されたステファン・バトーリも諸条項を受け入れ、これ以後ポーランド王位に就いた者は、ワルシャワ連盟協約の規定を守る義務を負うことになった。

この協定は、空位期における国内の平和と秩序、国土の防衛を目的とし、ポーランドにおけるあらゆる宗派の平和的共存を規定し、武力行使を禁じた。この協約制定にはポーランド兄弟団の信徒であるミコワイ・シェニツキも参加しており、宗教的な平和共存という枠組みの中に、彼らの存在も含まれていた。その意味でも、サンドミェシュ協定以上に画期的なものだったし、正教徒が含まれている点では、1568年にトランシルヴァニアで結ばれたものよりも優れていたといえる。一方、この協約は領主の領民に対する権利を確認しているが、この権利についての表記が曖昧なために、その捉え方によって寛容が保障される身分の解釈に差が出てしまうことになった。そして、17世紀半ばになると、この連盟協約の表記の曖昧さが原因で、反三位一体派は次第に排除されるものと理解されるようになり、最終的にはポーランドから追放されてしまうのだが、この協約がポーランドにおける寛容の一つの到達点であったことは間違いないだろう。

ステファン・バトーリの治世においては、ワルシャワ連盟協約はその効力を存分に発揮し、多宗派共存が維持されていた。バトーリ王はカトリック信者であったけれども、異端に対してさほど厳しい態度を取らなかった。しかし、彼の後即位したズィグムント3世によってイエズス会の勢力が急速に伸びはじめる。ただし、寛容の伝統は未だ健在であり、1630年頃のトルンやマルボルク、グダンスクでは、カトリック、ルター派、カルヴァン派が時間をずらして共同使用した教会も存在したという¹⁸⁶。また、どの街にもシナゴグが存在していた。次のヴワディスワフ4世は、「慈愛会議」によってカトリックとプロテスタントを和解させようと試みたことで教皇から批判される程度に寛容の精神を持ち合わせており、この時代、対抗宗教改革の勢いは少し衰えたかに見えた。しかし、彼の弟であり、イエズス会士の経験をもつヤン・カジミェシュの即位は、ポーランドの対抗宗教改革の成功を意味するものだった。1668年にはカトリックによる対抗宗教改革の勝利が決定的になり、ワルシャワ連盟協約の効力も失われることとなった¹⁸⁷。

3. ポーランド兄弟団による寛容の実践

ポーランド兄弟団は以上のような、迫害がさほど厳しくない環境の中で誕生した。先の

¹⁸⁶ Tazbir, *Reformacja*, s. 86.

¹⁸⁷ この年、カトリックからの転向を禁じる法律が成立した。Tazbir, *Reformacja*, s. 104.

章ですで見えてきたように、初期のポーランド兄弟団は、ボヘミアの再洗礼派に影響を受け、平和主義、平等主義などを掲げていた。彼らが目指したものは、世俗権力から切り離された環境で、真のキリスト者として生きるべく、原始キリスト教的共産主義に基づく共同体——それも、モラヴィア兄弟団が実践していたような家父長的独裁性とは異なる——を実現することであった。1567年3月27日に、ジャルヌフ城代ヤン・シェニェンスキによって小教会のための新都の創建が宣言され、移住者の募集が行なわれると、彼らはその新都に「新しいエルサレム」を築き上げようと行動を開始した。

3-1. 初期ポーランド兄弟団とラクフ

シュラフタたちに、土地や財産を売り払い、その利益を貧しい人々に分け与えるよう説いたグジェゴシュ・パヴェウのように、初期の急進派ポーランド兄弟団の指導者たちは、平等主義の立場から、農奴制の廃止を訴えていた。1572年8月2日に所領の農奴を解放し、アリウス派に加わったのは、サムエル・プシプコフスキの祖父、ヤン・プシプコフスキ Jan Przypkowski (1520頃-1606) であった¹⁸⁸。

こうした平等を唱える初期の指導者たちがその目標として掲げていたのは、シュラフタも他の身分も、キリスト教を奉ずる者が皆同等の立場で産業に従事し生活する共同体の実現であった。この企てを実行に移すため、1569年になると、ポーランド兄弟団のラクフへの本格的な移住が行なわれた。ヴィエルコポルスカ、マウオポルスカなど、様々な地域から、シュラフタ、都市民、聖職者が多くやってきた。この中には、グジェゴシュ・パヴェウ、ゲオルク・ショーマン、マルチン・チェホーヴィツがおり、ピョートル・ズ・ゴニョンザ、スタニスワフ・ファルノフスキなどの二神論者の姿があったとも言われている¹⁸⁹。また、ヤン・ニエモイエフスキをはじめとするクヤーヴィのシュラフタたちは、グジェゴシュ・パヴェウの求めに応じ、所有地を売り払ってラクフへと移住した。彼らによってラクフにポーランド兄弟団の共同体組織が確立したのは、この年の8月から9月にかけてだという¹⁹⁰。

ラクフを建設した際、所有者のシェニェンスキは人口を確保して町の発展を促すため、移住する人々にいくつかの特権を約束した。まず、移住者はあらゆる税や住居の賃貸料などを20年間免除された¹⁹¹。また、領地内の森や川などは市民が自由に利用することが許され、産業の発展は全て市民の手に委ねられた。また、広範に及ぶ信教の自由までもが認められた。これは、カルヴァン派であった彼の妻がアリウス派の信徒であったことも関連しているだろう。徐々に彼はポーランド兄弟団の教えに傾倒していく。ラクフにはカルヴァン派教会が1599年まで存在した。自治もある程度認められていたようで、議会は6人の議

¹⁸⁸ もっとも、彼の忍耐は長く続かず、ポーランド兄弟団であり続けながら、1578年には再び農奴制を採用してしまった。PSB, 29, Wrocław-Warszawa-Kraków-Gdańsk-Łódź 1986, s. 222.

¹⁸⁹ Tworek, *Raków ośrodkiem radykalizmu ariańskiego*, s. 59-60.

¹⁹⁰ Tworek, *Raków ośrodkiem radykalizmu ariańskiego*, s. 59.

¹⁹¹ Tworek, *Raków ośrodkiem radykalizmu ariańskiego*, s. 54.

員で構成されており、そのうち2名は町の所有者が決定し、4名は市民の手で選出されることになっていたという¹⁹²。職人たちは組合を結成し、製粉所、醸造所、製材所、鍛冶屋などのあらゆる利益は、市民に分配された¹⁹³。鉄鋼業、織物業、製紙業などが栄え、聖職者も手に職をつけるべきだという考えから、彼らも他の市民と同じように働き、産業の発展に貢献した¹⁹⁴。

彼らは、モラヴィア兄弟団と接触し、彼らに失望し、彼らが成しえなかった「新しいエルサレム」を建設しようと試みたのだった。特に急進的な人々は、モラヴィア兄弟団の例に倣い、私有財産の禁止を求めたが、それが実現したかどうかはわかっていない。

彼らの寛容の実践は、ブドニとの論争にも見出すことができる。ブドニによるポーランド兄弟団批判は、カトリックによるさらなる迫害をもたらした。しかし、それでも、ポーランド兄弟団はブドニに対して、「破門」以外のいかなる方法も用いることはなかったのである。

3-2. サルマチアのアテネ

ラクフは、ポーランド、リトアニアのみならず、オランダ、ドイツ、フランス、イギリスなどから、多くの反三位一体派を呼び寄せた。彼ら自身は、他宗派に対しても積極的に働きかけた。1569年にはモラヴィア兄弟団と合同を試み、1582年にはグダンスクのメンノ派と接触しているが、反三位一体の教義が障害となり、互いが歩み寄ることはなかった。そんな中で、1632年に試みられたオランダのアルミニウス派との接触は、成功例の一つであった。この出来事は、後に祖国を追われたポーランド兄弟団の多くがオランダに逃れることになる要因の一つとなった。

1588年にレヴァルトウフに開かれたポーランド兄弟団の学校は、学生にポーランド兄弟団への改宗を強制しなかったため、多くのシュラフタが子供をこの学校へ送った。1602年に建設されたラクフ学院は、こうしたレヴァルトウフのポーランド兄弟団学校の性質を受け継ぐものであり、その高い教育水準によって、国内外から注目を浴びた。

この学校では、学生の頭を叩く、耳を引っ張るなどを含めた、教師によるあらゆる体罰が禁じられていた。そして、信仰問題に関しては、学生たちは、それぞれの良心に従って祈ることを認められ、学長や教師にその旨を伝えれば、祝祭日にそれぞれの望む神殿に赴くことが許されていた¹⁹⁵。このことは、ラクフ学院にポーランド兄弟団の信徒のみならず、様々な宗教を奉ずる学生が存在したことを示しているといえよう。ラクフ学院はその創建当初から、ポーランド兄弟団の信徒のみを対象とした学校となるのではなく、あらゆる宗

¹⁹² Tworek, *Raków ośrodkiem radykalizmu ariańskiego*, s. 53.

¹⁹³ Tworek, *Raków ośrodkiem radykalizmu ariańskiego*, s. 52.

¹⁹⁴ Tworek, *Raków ośrodkiem radykalizmu ariańskiego*, s. 60-61.

¹⁹⁵ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 123; Stanisław Tync, „Zarys dziejów wyższej szkoły braci polskich”, w: *Raków ognisko arianizmu*, red. Stanisław Cynarski, Kraków 1968, s. 108.

派に開かれた教育機関として、完全なる寛容を実現することを目指していたのだ。

ポーランド兄弟団がその所期から保持していた寛容精神は、ラクフ学院が名声を獲得することで、はっきりとした具現化された。また、第 3 章で確認したように、ポーランド兄弟団が接触をもった西欧の様々な知識人たちは、ユニテリアン主義者、カルヴァン主義者、イギリス国教徒、カトリック教徒など、宗教的には様々な立場にいる人物たちであった。ここにも、彼らの超宗派的な宗教観をみることができる。

第5章 ポーランド兄弟団の寛容思想

前章で確認した、ポーランド兄弟団による寛容の「実践」に続いて、本章では「論理」という側面から彼らの寛容的姿勢に焦点を当てるべく、まず、同時代の寛容思想の展開について触れ、その後ポーランド兄弟団の寛容思想について整理する。宗教改革以後に寛容論を唱えた存在、カメンの『寛容思想の系譜』を参考に、再洗礼派、反三位一体派、ポーランド兄弟団と関わった近世の知識人など、様々な立場の人々を選出した。

1. 宗教的寛容思想について

寛容とは、自分自身とは異なる思想・信条の表現を甘受する態度を指す。まず、深沢克己・高山博共編の『信仰と他者 寛容と不寛容のヨーロッパ宗教社会史¹⁹⁶』を参考に、その歴史的展開を概観してみたい。

キリスト教は、隣人愛やパウロの教え¹⁹⁷などに代表されるように、その初期から寛容の教えを備えていた。一方で、キリスト者は福音を伝道するという使命を帯びており、その成立当初から、寛容と不寛容の問題に悩まされる運命にあったといえる。コンスタンティヌス帝 Constantinus (272-337) によって 313 年に布告された「ミラノ勅令」(Edictum Mediolanensium) を経て、テオドシウス帝 Theodosius (347-395) によってキリスト教がローマの国教となるに至ると、他者の寛容という問題は、強い政治性に付き纏われることになる。西ローマ帝国が滅び、カトリック教会が西欧キリスト教文化の唯一の担い手としての地位を獲得すると、教会の頂点に立つ教皇は、既存秩序を脅かすうる、信仰における異分子を異端と呼び、世俗権力の力を用いて彼らを徹底的に排除した。また、その行為は、教皇の持つ権力を誇示する役割をも果たした。一方で、異教徒に対しては、その風習や信仰対象、神殿などをキリスト教のそれに置き換えることで、キリスト教の浸透を図るといって、一種の寛容政策をとった¹⁹⁸。

16 世紀、宗教改革によって宗派对立が生まれると、宗教的寛容は同時代の最重要課題として認識されるようになった。当初は、寛容は信仰心の弱さに起因する悪徳とみなされ、

¹⁹⁶ 『信仰と他者 寛容と不寛容のヨーロッパ宗教社会史』深沢克己・高山博編、東京大学出版会、2006 年（以下『信仰と他者』と略記）。

¹⁹⁷ パウロによる改宗の強制を禁ずる文句としては、「このようにしてあなたがたは、兄弟に対して罪を犯し、彼らの弱い両親をうちのめしながら、キリストに対して罪を犯す〔ことになる〕のである。」(I コリント 8 : 12)、「[もはや] ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男性も女性もない。まさにあなたがたすべては、キリスト・イエスにおいて一人なのだからである。」(ガラテヤ 3 : 28) などがある。

¹⁹⁸ 深沢・高山『信仰と他者』、330-331 頁の千葉敏之によるあとがきを参照。

対立による相互不寛容が支配的だったものの、宗教戦争への反省から、寛容を必要悪と捉え妥協的に容認する、不寛容の一側面としての消極的寛容という姿勢が生まれ、その後、啓蒙思想の普及に伴い、消極的寛容は不寛容という枠組みから逃れ、差異を受容し、他者を尊重するという積極的寛容へと転化する。こうした展開を経て、寛容概念は、宗教だけでなく、自由や人権の問題とも密接に関わった、人間が備えるべき美德という近代的な道徳的価値を獲得するに至った¹⁹⁹。

ヨーロッパ社会における寛容概念の展開を以上のようにまとめることができる一方、国ごと、地域ごとの展開のしかたは、政治的・経済的状况などの宗教外の要因によってかなり異なる。そもそも、寛容概念の発展は決して直線的なものではなく、むしろ循環的なものだった²⁰⁰のだから、その展開を一概にまとめてしまうことはできないだろう。

こうしたことを念頭に置いた上で、具体的な寛容の表明についてみていく。

2. 宗教改革期の寛容思想

カトリック教会はその保守主義から、自身とは異なる信条を表明する者を不寛容に迫害した。カトリック教会に非を唱える形で発生した宗教改革もしかし、こうしたカトリック教会の不寛容を是正するような運動ではなかった。ルター、カルヴァン、ツヴィングリといった宗教改革の指導者たちは、改革への熱狂ゆえに、自らの作り上げた秩序を脅かすであろう存在に対し、徹底的な不寛容をもって臨み、こうした急進的分派主義と自分たちを区別した。例えば、カルヴァンにとって異端者を寛容することとは、彼らのうちに正統な真理を認めることと同義であった。一方、寛容をめぐる論争は、まずは再洗礼派という形で登場した分派主義者たちを中心に展開していく。

2-1. 再洗礼派

宗教改革の最も早い段階から再洗礼を实践したといわれる「スイス兄弟団」の創始者、バルタザール・フープマイアー Balthasar Hubmaier (1481-1528) はツヴィングリの主だった敵対者であり、ヨーロッパでも最も早い時期に寛容擁護論を展開した。『異端者とこれを焚殺する者について』において、彼は次のように説いている。

異端審問官は、あらゆる異端者のうちの最大のものである。けだし彼らは、キリストの教えと模範にそむいて、異端者を火刑にさだめ、とりいれ

¹⁹⁹ 深沢・高山『信仰と他者』、i-vi 頁の深沢克己による緒論および、同書収録の深沢克己「近世フランスにおける宗教改革と不寛容——ナント王令 400 周年をめぐる研究動向から」、17-27 頁を参照。

²⁰⁰ カメン『寛容思想』、23 頁。

の時期が来るより先に、毒麦とともに毒を抜き去ってしまうのであるから。キリストは、屠殺し滅ぼし焼き殺すためにではなく、生ける者をより十公に生かすために来り給うたのであるから²⁰¹。

彼は、ドイツ農民戦争に参加しており、その意味では徹底した平和主義者とは言えなかった。彼は世俗権力が宗教に介入するのを否とし、そうした問題を正すためならば力をも用いるという考えの持ち主であった。

同じくスイス兄弟団のコンラート・グレーベル Konrad Grebel (1498-1526) は、あらゆる暴力を罪と考えており、彼らに好意的であったトマス・ミュンツァーに向けた手紙 (1524年) の中で、次のように述べている。

福音とその信奉者は剣でもって守られるべきではなく、彼らも自分自身を剣で守るべきではありません。……正しい信仰をもつキリスト者は狼どものただ中にいる羊であり、屠殺場に赴く羊であり……彼らにあっては被害は完全に廃止されたのですから——わたしたちがもう古い掟 (旧約聖書) に属していないのであれば——、世俗的な剣も戦争も利用してはいけません²⁰²。

再洗礼主義の勃興に伴って、急進派の中にも過激派と穏健派とが現れてくる。メンノ・シモンズやダヴィド・ヨリス David Joris (1501-1556) などのオランダ人は、穏やかで平和主義的な再洗礼主義者であった。ダヴィド・ヨリスは、カルヴァンのセルヴェトゥス処刑に抗議し、普遍的な寛容について語っている。

もし誰も彼もが互いに相手を異端とみなして他人に力をふるったとしたら、どれだけの人間が地上に生き残るであろうか。トルコ人やユダヤ人はキリスト教徒を異端とみなし、キリスト教徒も互いに相手を異端あつかいしている。教皇派とルター派、ツヴィングリの弟子たちと再洗礼派、カルヴァン主義者たちと^{アディアフオリスト}教会組織無用論者たち、みな互いに破門し合っている。このような意見の相違ゆえに人々は憎しみ合い殺しあわねばならないであろうか²⁰³。

²⁰¹ カメン『寛容思想の系譜』、82頁より引用。尚、この際にフープマイヤーが用いた毒麦の譬は、よい麦を蒔いた畑に毒麦を蒔かれた時、毒麦を選び除こうとしてよい麦まで抜いてしまう危険を冒すよりは、収穫の日まで待ち、両者を選び分けるべきだ (マタイ 13 : 24-30、36-43) というもので、「教会は審判のときまでは、正道を踏み外した者たちに対して寛容であるべきだ」と解釈され、寛容論を説く際によく用いられた。

²⁰² コンラート・グレーベル「トマス・ミュンツァーへの手紙 (1524年)」(森田安一訳)『宗教改革著作集 第八巻』出村彰・森田安一・倉塚平・矢口以文訳、教文館、1992年、76頁。

²⁰³ カメン『寛容思想の系譜』、98頁。

彼らの活動を妨げたのは、過激な再洗礼派であった。彼らの神権政治によるミュンスタ一統治の結果、再洗礼派は社会秩序を危うくするものとして、徹底的な迫害を受けることになってしまう。ヨリスも迫害を受けて 1544 年にバーゼルに逃亡するが、1556 年の没後、遺体が掘り起こされ、公衆の面前で焼かれた。

2-2. セルヴェトウスの影響

セルヴェトウスの処刑は、ヨーロッパ各地で大きな反響を呼んだ。彼が反三位一体説を奉じたゆえに殉教したことが、他の反三位一体派による寛容論の展開という事態を誘発することになった。

セルヴェトウスの処刑についてカルヴァンを攻撃したのが、セバスチャン・カステッリョの『異端は迫害さるべきか』であった。彼は序文において「異端とは何か」について次のように記している。

わたしたちが異端と見なすのは、わたしたちと意見を異にする者たちすべてであるということです。このことは、今日数え切れないほど多い分派のうちで、他を異端と見なさないのはほとんど一つもないという事実のうちに明らかです²⁰⁴。

彼はこのようにして「異端者」という概念を退けるべきだとし、また、異端や教義上の不一致による罪が、殺人や姦淫といった道徳的な罪以上に重く見られていることに疑問を呈した。また、これを批判したテオドール・ド・ベーズに対し、カステッリョは『カルヴァンの書を駁す』(*Contra libellum Calvinii*) を著した。これは彼の生前には公刊されず、1612 年にオランダで出版される。ここに記された短い一文は非常に有名である。

ひとを殺すことは教義を守るのではなく、人を殺すことである。ジュネーヴ人たちがセルヴェトウスを殺したとき、彼らは教義を守ったのではなく、ひとを殺したのである²⁰⁵。

セルヴェトウス処刑をめぐるカステッリョの一連の著述は、ヨーロッパに大きな影響を与えた。ヤン・キシユカ Jan Kiszka (1552 頃-1592)、ヤン・オストロルク Jan Ostroróg (1545-1582) のようなカルヴァン派のパトロンであったマグナートたちは、彼をポーランドに招くこと

²⁰⁴ カステッリョ「異端は迫害さるべきか」、49 頁。

²⁰⁵ カメン『寛容思想の系譜』、108 頁。

を計画したが、彼の死がそれを阻んだ²⁰⁶。

セルヴェトゥスの影響が最も及んだイタリアでは、再洗礼派が三位一体論を採用し始めた。彼の弟子として知られている人物としては、ヴァレンティーノ・ジェンティーレがいる。彼も反三位一体を唱えたことで迫害され、ポーランドなどの東ヨーロッパを転々とするも、カルヴァンの没後のスイスで逮捕され、1566年に処刑された。この際、彼の処刑に反対する声はなかったという。

ベルナルディーノ・オキーノは、カプチン会の総会長をも務めた人物だったが、反三位一体説を擁護するようになり、1542年にチューリヒに亡命。ここで、国家と宗教の分離、死刑の禁止などを訴えて迫害され、76歳の高齢でポーランドへと亡命した。しかしながら、彼もジェンティーレも、パルチーフ勅令によってポーランドを追放されてしまう。オキーノはモラヴィアで病に倒れた。

1565年、アコンティウス Iacobus Acontius (1492-1567) がバーゼルで『悪魔の策略』(*Satanæ Stratagemata*) を公にした。この中で、彼は真理を守るために暴力を用いることを禁じ、脱ドグマ的な考えによって宗教選択の自由を支持した。彼の著述はイタリアやオランダでよく読まれた。

2-3. 宗教平和論者

これまで、再洗礼派や反三位一体派のような異端が展開した寛容思想をみてきたが、エラスムスの流れを汲み、キリスト教の合同を求める立場から寛容論を展開する宗教平和論者もいた。彼らの活動は、アウグスブルクの宗教和議によって教会統一の夢が遠のいた後も続けられた。ネーデルラントに生まれ、エラスムスの支持者であったカトリック教徒、カッサンデル Joris Cassander (1513-1566) は、万人が共通して受け入れることのできる信条こそが本質的なものだとし、キリストを信ずる限り、全てのキリスト教徒は互いに寛容されるべきであるとした。しかし、彼は本質的には保守主義者であり、カステリョとカルヴァンの論争の際にカルヴァンを支持し、「節度ある強制は、それが罰でなく薬であるかぎり、有益であろう。咎ある者はこのような仕方での自分の受けた災いを反省し、自分のあやまちに安住するかわりに改善の道を求めるよう導かれるであろう²⁰⁷」という見解を示したように、完全なる寛容論者とはいえなかった。

オランダのグロティウスは、迫害によって亡命を余儀なくされ、各地を転々とした。彼は、寛容精神による教会の統合を主張し、その目的のために教皇の存在が必要だとした。一方で、彼は異端に対する死刑に断乎として反対し続けた。

著名な教育者であったヤン・コメンスキ Jan Amos Komenský (1592-1670) は、モラヴィアで生まれ、1628年から1641年までポーランドのレシュノにあるボヘミア兄弟団の学校で

²⁰⁶ Tazbir, *Reformacja*, s. 76.

²⁰⁷ カメン 『寛容思想の系譜』、133頁。

教授を務めたこともある人物である。彼は教会が分裂し、互いに迫害していることを嘆き、主にプロテスタント諸宗派の統合を訴えた。

2-4. 近世の寛容論者たち

17世紀後半に寛容論を展開した人々は、単なる神学者ではなく、他の分野でも業績を残している。神学が学問の王座から転落した証とも言えるだろうが、彼らの多くが、ポーランド兄弟団に興味をしめし、また個人的な接点を持っていたことは興味深い。

ユダヤ系オランダ人のスピノザは、1670年に刊行された『神学政治論』において、宗教問題における個人の良心の自由を擁護している。ただし、彼は、次のように述べ、国家がその自由を保障するべきだとした。

意見の自由は当然、認められねばならず、人々は、彼らが互いに考えを異にすることはまぎれもない事実であるにもかかわらず、平和に友好的に共同生活ができるように、統治されねばならない²⁰⁸。

ドイツの法学者、プーフェンドルフは、『市民生活におけるキリスト教のありかたについて』(De habitu religionis christianae ad vitam civilem)を1687年公刊し、世俗権力は人の信仰に対する権限をなんら有しないことを主張した。

統治者は、人々がいろいろなしかたで神を礼拝し、しかも互いに相手をそこなわないでいられるのなら、そうした不一致に干渉すべきではない。それはあたかも、人々が物理学その他の科学においてさまざまな説や意見を奉じていても、これに関与すべきでないのと同様である。ただし、人々が宗教の名において統治の平和をみだし、暴動を起こし叛乱を企てるような場合には、彼らが国家権力によって抑制され処罰されるべきことに疑問の余地はない。君主は自己と宗教上の立場を異にする人々を迫害すべきではない²⁰⁹。

しかし、プーフェンドルフもまた、スピノザと同じく、そうした自由を保障するのは世俗権力であると見なしていた。

また、ドイツの哲学者であったライプニッツは、ヨーロッパ諸教会の統一を目指し、様々な人々との書簡のやり取りを通して、宗派間の対立を取り除こうと試みたことが知られている。

²⁰⁸ カメン『寛容思想の系譜』、290頁。

²⁰⁹ カメン『寛容思想の系譜』、292頁。

17 世紀のオランダにおいて、寛容が近代的価値を獲得するのに貢献した人物が、ロックとベールであった。

ジョン・ロックはオクスフォード大学で学び、同大学の講師も務めたが、政治闘争に巻き込まれて 1683 年にオランダに亡命し、著作活動を始める。『寛容についての書簡』(*Epistola de tolerantia*) が刊行されたのは 1689 年のことであった。彼は、「宗教の問題について意見を異にする人々に寛容であることは、福音書と理性とに、かくも適っています…²¹⁰」と述べ、続けて「国政の問題と宗教の問題は区別されるべきであり、教会と国家の間には教会が正しくおかれるべきだ、と私は思います。もしこのことがなされなければ、魂の救いや国家の安泰が真に関心事である人々の間の……論争には、いかなる決着もつけられえないのです²¹¹」という見解を示している。また、教会については次のように語っている。

教会とは……自由で自発的な結社なのです。人は生来、いかなる教会にも拘束されていません……。人は、真の宗教と神を喜ばず礼拝を、そこに見いだしたと信じるその結社に、進んで参加するのです。……宗教的結社の目的は、これまで述べたように、神の公式な礼拝であり……すべての教会法は、この目的によって限定されるべきなのです。ここでは、理由はなんであれ、いかなる権力も用いられるべきではありません。……反抗的な人や強情な人や、自らの改善について少しも見込みの立たない人は、その結社から断固切り離され追放される以外に、残された道はありません。これが教会の権力の最高にして窮極な力なのです²¹²。

また、彼は教会同士の関係についても、互いに強制力を持たないという考えを示している。また、国家権力が信仰の問題に干渉する危険性を強調し、さらに次のように語っている。

宗教に関する為政者の意見がきわめてすぐれたものであり、また彼が入ることを命ずる道が真に福音書に適ったものであるにせよ、もし私がこのことに心底より納得するのでなければ、それは私に救いをもたらすものではないであろう、ということなのです。私が自分の良心にそむいて歩むいかなる道も、私を幸福な住まいに導いてくれることはけっしてないでしょう。……あなたが他人にどれほど善意を示そうと、またその人の救済について〔あなたの〕努力がどんなにすぐれたものであっても、人間は救済へと強制されえないのです。最後にゆだねられるべきものは、自分自身と自

²¹⁰ ジョン・ロック『寛容についての書簡』(レイモンド・リクバンスキー序、平野歌訳) 朝日出版社、1971年、9頁。

²¹¹ ロック『寛容についての書簡』、9頁。

²¹² ロック『寛容についての書簡』、15-21頁。

らの良心であります²¹³。

しかし、一方で、ロックは寛容の例外についても述べている。その一つは、「人間の社会と相容れない教義や、あるいは市民社会の維持に必要なすぐれた道徳に反する教義は、為政者によってけっして寛容に処置されるべきではない……²¹⁴」というもので、あらゆる宗派への迫害を認めるものとして、拡大解釈を許すものであった。また、「その教会に加わる人はみな、そのこと自体によって、よその君主の保護下に入り、それに服従することとなる〔ということをはたして〕ような教会は、為政者によって、寛容に扱われる権利を持つことはできません」という一文は、イングランドにおけるカトリック教徒に対する不寛容を表す、保守的な言説であった²¹⁵。そして最後に、彼は「神が存在することを否定する人々は、けっして寛容に扱われるべきではありません。というのは、人間社会の絆である約束とか、契約とか、誓約とかは、無心論者にとって確固不動で犯しがたいものではありえないからです²¹⁶」と主張することで、自らの寛容思想の限界を示すに至った。

結局のところ、ロックの寛容思想は、当時のヨーロッパにおいて新鋭でリベラルなものというわけではなかった。それまでの諸見解をまとめただけにすぎない彼のこの著述は、彼の影響力ゆえに、歴史的な重要性を得たのだ²¹⁷。

ピエール・ベールはカルヴァン主義者であり、フランスを追われ 1681 年にロッテルダムの哲学教授となった。1688 年、『「強いて入らしめよ」というイエス・キリストの言葉に関する哲学的註解』(Commentaire philosophique sur ces paroles de Jésus-Christ, contrains-les d'entrer) を匿名で著し、異端者の強制的改宗の根拠とされる晩餐の譬について、哲学者としての視点から、論破を試みた。彼はまず、「強いて入らしめよ」という言葉²¹⁸を文字通り解釈することを否定し、その論拠を 9 つ挙げている。そのうちの一つは、次のようなものだった。

「強いて入らしめよ」と言われた時、イエス・キリストの考えられた意味が迫害すること、信仰定式書への署名を強制することにあつたとしたら、キリスト教の正統的な部分が誤った部分に対し適当と思うかぎりの暴力をふるえることは間違いない。それに異論はないだろう。しかし、どちらもみな自分こそ正統派だと思っているから、イエス・キリストが迫害を命じておられたら、どの宗派もそのおおいつけに従って、ほかのあらゆる宗派

²¹³ ロック 『寛容についての書簡』、45 頁。

²¹⁴ ロック 『寛容についての書簡』、75 頁。

²¹⁵ カメン 『寛容思想の系譜』、308 頁。

²¹⁶ ロック 『書簡についての書簡』、79 頁。

²¹⁷ カメン 『寛容思想の系譜』、304 頁。

²¹⁸ この言葉は盛大な宴会の譬(ルカ 14:23)に含まれるもので、古代キリスト教世界でもっとも優れた理論家であった教父、アウグスティヌス Augustinus (354-430) が、強制改宗を正当化するものとして用いて以来、不寛容の根拠として存在していた。

が自分の信仰告白に合わせることを強いられるようになるまで徹底的に迫害する義務があると思うだろう²¹⁹。

また、彼によれば、宗教の本質は内面にあり、礼拝など、外面的行為にすぎない宗教儀礼を強制したところで、真に敬虔な信者を生み出すことはできないのであった。ベールは、一方で、国家・社会の安寧を脅かす宗派に対しては、為政者によって規制されうるとして、その対象としてカトリック教徒を挙げた。これは、ロックと同じく、保守的な見解だと見なされうる。しかし、彼の寛容論の最終的な到達点は、あらゆる宗派に対する完全な寛容であった。

この問題では中道などみつけれまい。オール・オア・ナッシングである。或る宗派を寛容する十分な根拠になるものなら、ほかの宗派も寛容する十分な根拠にならざるを得ない²²⁰。

ここでは、旧教徒もソツィーニ派もイスラム教徒もユダヤ人もみな、寛容さるべき対象として捉えられていた。彼のこうした主張は、神学からは離れた立場から論じられたという点で特徴的であった。

3. ポーランド兄弟団の寛容思想

ポーランド兄弟団の寛容思想を紹介するにあたって、どの人物のどういった思想を寛容思想とするのか、という点が問題となる。ここでは、これまで紹介してきた様々な寛容思想をもとに、寛容とは自身と異なる信条を認容するものだという定義に適った主張を選出した。まず、彼らに関わった寛容令として、トランシルヴァニアの宗教寛容令とワルシャワ連盟協約の内容を簡単に紹介し、その後、ポーランド兄弟団の思想家たちの寛容に関する立場を紹介する。

3-1. 16世紀の寛容令

1568年、トランシルヴァニアにて、ワルシャワ連盟協約に先立つ形で、ひとつの宗教寛容令が発布された。これは、カトリック、ルター派、カルヴァン派、ユニテリアン派という四宗派の宗教的自由を保障するものだった。ジグモンド公がユニテリアン主義を受け入れ、こうした勅令が発布された背後には、ジョルジョ・ビヤンドラータの影響が窺える。

²¹⁹ ベール「哲学的註解」、157-158頁。

²²⁰ ベール「哲学的註解」、233頁。

この寛容令は次のように謳っていた。

我らの主、国王陛下、陛下がその王国〔議会〕と共に、前回の議会で、宗教に関する事項を法律で制定したように、この議会においても次のことを再び確認する。説教者はあらゆる場所で、福音書をその理解する所にしたがって説教し説明することが許される。……人々が正しいと認める説教師を持つことは認められるべきである。それ故に、監督官や他の人々も、説教師を虐待してはならないし、その人の宗教ゆえに、以前の法律のままにののしることも許されない。いかなる人もその新説ゆえに投獄されたり、その地位から追われたりしてはならない。なぜなら信仰は神の賜物であり、それは聞くことから始まり、聞くことも神の言葉によるのである²²¹。

しかし、この寛容令は、その保護対象から正教徒を除いていた。それを克服したのが、その5年後にポーランドで宣言されたワルシャワ連盟協約であった。この協約成立にはポーランド兄弟団の信徒の一人であったミコワイ・シェニツキの力が大きく働いていた。彼は、ズィグムント・アウグストが1572年7月7日に死去するとすぐ、シュラフタに呼びかけてヘウム Chelm で連盟を結成した。これは、後にワルシャワ総連盟にまとまる各連盟の中でも、最も早い時期に結成されたものだった。さらに、彼はワルシャワ連盟協約の提唱者、起草者となった。彼の存在があったからこそ、ワルシャワ連盟協約の保護がポーランド兄弟団のような異端にも適用されたのだとみることもできよう。その内容は以下のようなものであった。

我々は皆、この危険な時代に、君主たる国王を欠いて暮らしていくにあたり、ワルシャワでの集会において、我々の父祖たちの例に倣って、お互いの間で平和、正義、秩序及び共和国の防衛を維持し、守ることができるよう鋭意努力したことを、然るべきすべての者に対し、この事を永遠に記憶すべく告知する²²²。

……我々の共和国においては、キリスト教の信仰の問題に関して大きな相違が存在するので、この原因から他の諸王国に明らかに見られる如き有害な争乱が人々の間で始まることのないように務め²²³……信仰において相異

²²¹ バーク『ユニテリアン思想の歴史』、43頁。

²²² 小山「ワルシャワ連盟協約」、83頁。《Oznajmujemy wszystkim wobec komu należy ad perpetuum rei memoriam, iż pod tym niebezpiecznym czasem, bez króla pana zwierzchniego mieszkając, staraliśmy się o to wszyscy pilnie na zjeździe warszawskim, jako byśmy przykładem przodków swych sami między sobą pokój, sprawiedliwość, porządek i obronę Rzeczypospolitej zatrzymać i zachować mogli.》*Konfederacja warszawska 1573 roku, wielka karta polskiej tolerancji*, oprac. M. Korolko, J. Tazbir, Warszawa 1980 (以下 KW と略記), s. 12.

²²³ 小山「ワルシャワ連盟協約」、88頁。《A iż w Rzeczypospolitej naszej jest dissidium niemałe in causa

なる我々は、お互いの間で平和を維持する。また、異なった信仰と教会における差違のために血を流すことをせず、財産没収、名誉剥奪、投獄、追放によって罰しない。また、如何なる手段によっても何らかの上級者や官吏がこのような行為に及ぶことを援助しない。のみならず、何者かが血を流すことを望む時には常に、たとえその者が勅令を口実にしたり、或いは何らかの裁判上の行為を楯にとってこれを行なおうとしていたとしても、我々は皆、このような理由から、それに反対する義務を負うであろう²²⁴。

ここで注目されるべきなのは、平和共存が保障される対象が、宗派の名前ではなく、「信仰において相異なる我々」となっている点である。制定当初は、これがあらゆる宗派を含むものとして理解された。以上のような内容のワルシャワ連盟協約は、寛容の国ポーランドの誇るべき、最も大きな成果であった。この協約の効力のもと、ポーランド兄弟団はさらに熱心に、寛容思想を展開していくことになる。

3-2. ソツィーニと『ラクフ教理問答』

1579年にポーランドに赴き、ポーランド兄弟団の精神的指導者としてその名を知られたソツィーニは、「私は他の諸教会を非難せず、けっして軽蔑しません。なぜなら私は、われらの主イエス・キリストのみ教えの音が聴かれるすべての教会を、真のキリストの教会と認めるからです²²⁵」という徹底した寛容思想の持ち主であった。また、ポーランド兄弟団が沐浴による再洗礼を入会の条件に定めていたことを批判。ポーランド到着当時、彼はクラクフでローネンベルク、ショーマンと対談し、洗礼に関する考えが異なることのみを理由に、キリストの教えを信ずる人々の受け入れを拒否する姿勢は恥ずべきものだ、と述べている。また、カメンによれば、キリスト教の教義に関して、ソツィーニは次のような立場をとっていた。

ソツィーニは……真の救いの教義は、たいていの教会で理性によって見出されうるし、それどころか、ことによると教会にうったえずとも見いだされうるということを認めた。真理とは、彼にとっては、一度かぎり

religiounis christianae, zabiegając temu, aby się z tej przyczyny między ludźmy sedycyja jaka szkodliwa nie wszczęła, którą po inszych królestwach jaśnie widzimy, ...) KW, s. 25.

²²⁴ 小山「ワルシャワ連盟協約」、84頁。《którzy jestechny dissidentes de religione, pokój między sobą zachować, a dla różnej wiary i odmiany w Kościolech krwie nie przelewać, ani się penować confiscatione bonorum, poczcivością, carceribus et exilio, i zwierzchności żadnej ani urzędowi do takowego progressu żadnym sposobem nie pomagać. I owszem, gdzie by ją kto przelewać chciał, ex ista causa zastawiać się o to wszyscy będziemy powinni, choćby też za pretekstem dekretu albo za postępkim jakim sądowym kto to czynić chciał.》KW, s. 25-26.

²²⁵ カメン『寛容思想の系譜』、165頁。

えられたひとかたまりの教義ではなく、一連の発展を通じ、直接的で連続的な啓示を通じて到達され得るものであった。ルターが旧教会を正したように、別の人々はルターを正した、そして窮極の真理がついに見出されるまで、さらに別の人々がやがてこれらを正すであろう、というのである²²⁶。

彼のこうした非ドグマ的な姿勢に、寛容がその近代的価値を獲得するための重要な要素をみることができよう。というのも、人間の徳という問題は、福音書を離れ、宗教的要素を徐々に失うことで、より世俗的で、普遍的な概念へと転化するのであり、寛容概念もまた、この道を歩んだはずだからである。こうした姿勢は、ポーランド兄弟団が寛容を論じる原点となった。また彼は、初期のポーランド兄弟団の指導者ほどラディカルではなかったにしろ、平和主義の護り手であった。宗教問題に関して剣を用いることは許されず、キリスト教徒はいかなる場合も殺人をおかすべきではない、というのが彼の立場であった。

1605年、いわゆる『ラクフ教理問答集』が刊行された。ヒエロニム・モスコジョフスキ、ヴァレンティン・シュマルツなどが中心となって編集したこの作品は、初版がポーランド語で出された。

この教理問答書を編むことによって、われわれは何びとにも命令するものではない。われわれの意見を表明することによって何びとをも抑制するものではない。各人は、われわれもまた危害や屈辱をうけずに神聖な事柄についてのわれわれの意見を表明することが許されるという条件で、宗教問題に対する彼の判断を自由に表明するがよい。……われわれに関するかぎり、われわれはみな兄弟であって、他人の良心を左右するいかなる力も、権威もわれわれには与えられていない。兄弟たちのなかで、ある人々はひとより学識があるかもしれないが、自由において、また神の子とせられる権利においては、すべては対等なのである²²⁷。

高らかにこう謳っているこの教理問答集は、その刊行前年に世を去ったソツィーニの影響を受けた当時のポーランド兄弟団の教理をまとめたものだった。この教理問答集は、今日でもイギリスやアメリカのユニテリアン派によって利用されているという²²⁸。

3-3. ソツィーニ派

ソツィーニ派によれば、寛容を実現する道は2つあった。一つはキリスト教的な愛の原則に従うこと、一つは国家と教会を分離することであった。彼らの寛容思想の出発点と

²²⁶ カメン『寛容思想の系譜』、165-166頁。

²²⁷ カメン『寛容思想の系譜』、166頁。

²²⁸ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 130.

もいえるものが、「異端」概念への批判であった。この点に関しては、カステッリョの影響を多分に受けている。彼らによれば、異端とは自身とは異なる方法で神を信仰する者にすぎず、それだけを理由に彼らを投獄し、拷問し、殺害することはキリスト者として相応しくない行為であった。宗教は人間の精神に関わる問題なのだから、宗教に関する罪に対しては、ペンや議論といった、精神的な武器を用いて対するべきであり、キリスト者が行使しうる最も強大な武器は、破門であった。さらに、カトリックにとってはプロテスタント諸派が、プロテスタントにとってはカトリックがそれぞれ異端者であるように、異端という概念は決して絶対的なものではなかった。あるソツィーニ主義者は、キリスト教における真の異端者とは、宗教問題において剣を用いる迫害者自身なのである、と主張している²²⁹。

ポーランド兄弟団の寛容に関する表明が見られた最初の論文は、クレルの『信教の自由のための弁明』であったとされる²³⁰。この著述は、1632年、ズィグムント3世の空位期に執筆され、5年後にアムステルダムで刊行されたもので、3章で構成されていた。

市民社会の生存に貢献し、他人の平和を乱さない人々はすべて市民社会から排除されてはならず、何びとたりとも彼らが平和に生活するのを妨げることが決してゆるされない²³¹。

こうしてあらゆる宗派の平和共存を説いたこの作品は、敵対者の著述を、なんら中傷することなしに引用した傑作であった²³²。また、ポーランド兄弟団による政教分離思想の第一歩となるものであり、フランス語、オランダ語など、様々な言語に翻訳され、広く読まれた。

ステグマンは、カトリックが信仰の問題を力によって解決しようとしているとした上で、カトリックを批判する立場にありながら、同様の行動に走っているプロテスタントを批判し、宗派共存を説いた。

プシプコフスキは、1628年にアムステルダムで『教会の平和と一致』(*De pace et Concordia ecclesiae*)を刊行し、次のように述べた。

われわれは誰に対しても精神的な譴責を加えてはならない。なぜならわれわれは各々自分自身を評価する権利を持っているからである。……われわれは何びとに対しても、個人的にであれ公然とであれ他人の良心の自由を犯したり、力づくで自分の宗教を宣伝したりする自由を認めない²³³。

²²⁹ Ogonowski, *Socynianizm polski*, s. 107.

²³⁰ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 276.

²³¹ カメン 『寛容思想の系譜』、168-169頁。

²³² Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 276.

²³³ カメン 『寛容思想の系譜』、168頁。

彼は、重要なのは宗教の最も基本的な部分での一致であり、神学的なその他の要素は、道徳的な生活を送ることに比べればそれほど重要ではないことを確信していた。こうした彼の寛容論には、ソツツィーニの主張したドグマ排斥の影響がはっきりと見られる。彼は、読者の先入観を避けるため、この著述を匿名で出版した。オランダ語に訳された他、イングランドではラテン語、英語に翻訳されている。

国家と教会の分離については、キリスト教徒は官職につくべきではないとするグジェゴシュ・パヴェウやチェホーヴィツなどの初期の指導者や、戦争への参加に疑問を示し、宗教問題に関して世俗法廷がキリスト教徒を死刑に処すことを批判したソツツィーニの思想に、その源流を見出すことができる。しかし、この点に関する、末期ポーランド兄弟団の見解は、そうした先達の思想から——彼らをソツツィーニ派と呼ぶことが困難なほど——大きく離れる。

この問題に関して、クレルは先に挙げた著述において、教会と国家は互いの問題に関与するべきではないと主張した。彼によれば、宗教を理由とした動乱や戦争は、世俗権力が不寛容政策をとり、不寛容を唱える人々を支持した結果によるものであった。

シュリフティングは、『真理のための弁明』で、オランダのカルヴァン派を、宗教上の問題を福音書のみで解決することができず、世俗権力に頼っているとして批判。真理は軍や勅令によって護られるものではないとしている。また、異端者は教会に対する犯罪者であるのだから、世俗の罰則が適用されるべきではないとした。さらに彼は、ステファン・バトリー王の「余は人民の王であって、良心の王ではない²³⁴」という言葉を引用し、教会と国家の分離を説いた。しかし、初期の指導者やソツツィーニとは違い、シュリフティングの説いた政教分離は、国家と教会の共存を可能とするものであった。彼によれば、教会はイエスの教えを奉ずる者を受け入れ、国家は、あらゆる人を——異教徒であれ異端者であれ、受け入れるべきであった。また、双方の最終的な目的は異なるものの、互いとその領域を侵さないかぎり、人は敬虔なキリスト者にも、良き臣民にもなれるのだった。この点に関して同様の見解を示したブシプコフスキも、教会の平穏を実現するためには、国家による保護が不可欠であるという確信を持っていた。

彼らのこうした立場は、カトリックが数的に優位を占め、対抗宗教改革がまさに最盛期を迎えていたポーランドでは受け入れられることはなかった。しかし、彼らの達成は、その後の寛容の擁護者たる思想家たちによって展開された思想の中に、多少なりとも見出すことができる。また、彼らの寛容思想に特徴的な非ドグマ的な解釈も、近代的な寛容概念形成の要素の一つであろう。ただし、彼らの思想が啓蒙期の思想家たちにどこまで影響したかについては、研究者によってその見解がわかれるところである。

²³⁴ Ogonowski, *Socynianizm polski*, s. 168.

終論

第3章の最後に概観したように、近代的な思想の構築に貢献した近世の思想家たちの多くが、ポーランド兄弟団の何らかの關係を持っていた事実は、彼らが当時のポーランドを代表するほどの知識・先進性を誇っていたことを示している。彼らの思想は、すでに伝統的なキリスト教神学の軛に縛られてはいなかった。「彼らの原理は宗教を卑しくし、哲学に変えてしまう²³⁵」というベールの言葉は、彼らの本質を表すものであろう。それほどの存在でありながら、彼らの重要性は、その異端思想ゆえに排除され、現代まで軽視されてきたといえる。そうした彼らのソツツイーニ主義思想の中心をなすものの一つが、寛容論であった。寛容を悪徳だと捉えていた当時の神学者が、寛容思想は「ソツツイーニ派の発明²³⁶」だと罵ったことは、寛容が人間の基本的徳目として認識される今となつては、彼らの重要性をより高めるものでしかない。ここでは、彼らの寛容についての整理を試みるが、その前にまず、「ポーランド的寛容」について考えてみたい。

ポーランドにおける寛容は、2人のズィグムント王の治世とワルシャワ連盟協約の成立が、その評価を決定付けたといえる。例えばパレオログスのように、ポーランド兄弟団の急進派と対立した人物が、他国では急進主義者として異端宣告を受け処刑されたという事実は、ポーランドの寛容を物語る一つのエピソードとなるだろう²³⁷。もちろん、こうした状況は、多くの批判を呼んだ。ポーランドへやってきた教皇特使たちは、カトリック教会のすぐ隣にカルヴァン派の教会があることを嘆き、カルヴァンの後継者テオドール・ド・ベーズ²³⁸はポーランドの寛容を悪魔の所業と非難した。一方、迫害と戦う少数派の人々にとっては、ポーランドはまさに理想郷であった。ドイツからは再洗礼派が、イタリアからは反三位一体派が、イングランドからはカトリック教徒が、祖国を終われ、ポーランドへとやってきた。フランスのユグノーの指導者たちは、ポーランドが寛容によって秩序を維持していることを例に出して、国王に寛容を訴えた。

ワルシャワ連盟協約と同じく、寛容条例として評価の高いものにフランスのナントの勅令がある。この両者について、カメンは次のように述べている。

ワルシャワ協約は、自由の開花といったものよりも、むしろシュラフタの間での勢力均衡に由来していたし、ナントの勅令は、〔中略〕結局は政治

²³⁵ ベール『歴史批評辞典』III、607頁。

²³⁶ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 322.

²³⁷ 彼はポーランドを離れた後、モラヴィアで捕えられて異端審問にかけられ、ローマで斬首された。Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 97.

²³⁸ Théodore de Bèze (1519-1605) : ローザンヌ大学のギリシア語の教授だった頃、セルヴェトゥスの処刑に反対したカステリオの著述に対してカルヴァンを擁護する論文を発表。のちにカルヴァンのあとを継ぎ、ジュネーヴの宗教改革に尽力した。

のないし王朝的な諸党派間の一見解決不可能な紛争の所産だったのである。スカンディナヴィアやイギリスやオランダなど宗教改革を行なった国々が、なぜフランス、ポーランドと同様に宗教的自由に向かって前進しなかったかは、これらの国には強力なカトリックの反対派がなく、教会と国家の機構がプロテスタント幹部によって独占されてしまったことから説明されるであろう²³⁹。

ワルシャワ連盟協約が、空位という異常事態においてポーランド国内の安定を保つための妥協策であったのは事実である。ただ、ナントの勅令がユグノーに信教の自由を認めるという形で国家の首脳が発布した、いわば宗教的多数派が少数派を認容するものだったのに対し、ワルシャワ連盟協約は各宗派が対等に信教の自由を認め合うものだったということは、ポーランドに特徴的な点であろう。連盟協約前にサンドミェシュ協定が結ばれたのも、プロテスタント諸派がそれぞれ対等の力をもっていたという、他国では見られなかった現象によるものだった。また、よく言われるように、他国が大迫害や長年にわたる宗教戦争の末、その反省からようやく寛容を実現したのに対し、ポーランドでは、大規模な迫害や戦争を経ることなく宗派共存に到達したという点は、評価されるべきだろう。また、ポーランドのカルヴァン派は、その多くが、カルヴァンによるセルヴェトゥス処刑に嫌悪感を示したように、他国のそれとは性格が少し異なっていたという点を指摘することもできる。ともかく、その成立の背景はどうあれ、ワルシャワ連盟協約が結果として——限られた期間とはいえ、宗派共存を生み出したことは間違いない。寛容の現れという視座に立てば、この当時、ポーランドに並ぶ国は他になかったと断言できよう。

ポーランドで見られた数多くの寛容という現象が、政治的・経済的妥協の産物だったことは否定できないだろう。異教徒であったリトアニアとの合同はドイツ騎士修道会という脅威の排除およびバルト海への進出という目的があったし、宗教改革の受容もシュラフタの権力への欲求と、教会権力に対する不満が背景にあった。再洗礼派などの異端の流入も経済的な理由が大きい。しかし、政治的・経済的な理由のために宗教的な拘束を度外視できたという点に、「ポーランド的寛容」の特徴があるのではないだろうか。高いレベルの寛容を実現するほどの妥協を生み出した要因はいったい何だったのか。

まず、ポーランドのキリスト教化は、君主ミェシュコ1世 Mieszko I (在位 960 頃-992) が洗礼を受けた 966 年だと言われているが、農民層にまで浸透したのは 14—15 世紀になってからだともいわれており、数世紀の間キリスト教と異教の共存があったという²⁴⁰。さらに、キリスト教文化圏の東端という地理的状况により、古くからイスラム教徒、プロイセン人、リトアニア人などの異教徒と接する環境にあった。こうした状況は、おそらくドイツ騎士修道会と対立した際に、異教徒であるリトアニア人との同盟を容易にしたであろう。

²³⁹ カメン『寛容思想の系譜』、191-192 頁。

²⁴⁰ Wyrozumski, *Tolerancja*, s. 50.

その結果、ポーランドは、広大な領土を持つ複合民族国家としての性質を備えることになった。領土内には様々な宗教が存在。カトリック教徒のほか、全人口の五分の二に及びギリシア正教徒（ポーランド人口の四分の一、リトアニア人口の三分の一から二分の一）を始めとして、アルメニア教徒、ユダヤ人とその分派のカライ派、イスラム教を信仰するタタール人が住み、チェコのフス派も散在していた²⁴¹。ポーランドとリトアニアは、1569年にはルブリンで正式な合同条約を締結し、その性質を確固たるものにした。この、複合民族・複合宗教国家としての伝統が、他者との共存への抵抗を弱めたとの見方もできる。また、ポーランド人は元来穏やかな民族であったという指摘²⁴²や、宗教に対して無関心であったという見解²⁴³、さらに、西ヨーロッパではフランスやイングランドが絶対王政を築いていく中、ポーランドでは選挙王制がとられ、国王が反異端勅令を發布するだけの力を持っていなかったという指摘もある。その一方でシュラフタが大きな権力を獲得していたゆえに、ポーランドでは宗教的寛容を制限するいかなる法も、シュラフタ身分の権利を制限する試みとしてみなされた、という事実もある。また、ナントの勅令と比較した際のワルシャワ連盟協約の特殊性から見えてくるものは、シュラフタという身分同士の、超宗派的な同胞意識である。こうした様々な要因が、「ポーランド的寛容」を生み出したと言えよう。

ポーランド兄弟団のような異端が誕生し、1世紀もの間活動を続けることができたのは、こうしたポーランドの環境によるところが少なからずあつただろう。では、彼らが表明した「寛容」はどのように捉えればいいのだろうか。まず、初期のポーランド兄弟団の思想家たちの中に、寛容思想をその主だった特徴として示し得る人材を見出すことは難しい。グジェゴシュ・パヴェウやピョートル・ズ・ゴニョンヅァなどが唱えた農奴制の廃止には、人間は皆、神の被創造物であるという平等意識が窺える。しかし、初期の彼らの思想に寛容な性格を見出すことができるとはいえ、それが思想として成熟するには、ソツィーニの登場を待たねばならなかった。また、「新しいエルサレム」建設の過程で、ラクフにポーランド兄弟団以外の宗派が多く存在したかという点、その数は決して多くはなかった。ポーランド兄弟団自身は、他者との接触を積極的に試みており、それに関連して他宗派の代表者が何度もラクフを訪問したが、その都度、彼らの反三位一体思想がその障害となった。メンノ派などの少数派は、ポーランド兄弟団と合同することで蒙るであろう迫害を恐れ、カトリック教徒やカルヴァン派がラクフを訪れる理由とえば、異端者であるポーランド兄弟団を正すための論争もしくは襲撃であった。ベールが言うように、ソツィーニ派の思想は「国民全体のものでも、その大多数のためのものでもない……。それは或る種の選ばれた気質の者にしか適さない²⁴⁴」のだった。16世紀後半、彼らはその規模と思想ゆえに、他者の受容を実践することが困難だったのではないだろうか。そして、ラクフ学院が、ポ

²⁴¹ 小山「ワルシャワ連盟協約の成立」、91頁および Gołaszewski, *Bracia Polscy*, s. 41.

²⁴² Tazbir, *Tradycje*, s. 6.

²⁴³ Tazbir, *Reformacja*, s. 109.

²⁴⁴ ベール『歴史批評辞典』III、605頁。

ーランドにおけるプロテスタント系学校のうちでトップクラスの教育水準を誇り、広く知られるようになってようやく、満を持す形で、カトリックやカルヴァン派、ルター派の学生を受容するという、寛容が実現した。

ポーランド兄弟団は宗教の合理主義的解釈を展開し、西欧の近代思想の形成に影響を及ぼしたといわれる。寛容概念の変遷との関わりも、その一つと見なすことができるだろう。シュリフティングやプシプコフスキの唱えた寛容思想と、ロックのそれとが、多くの類似点を持っていたという指摘については第5章で述べたが、その他、17世紀に寛容を唱えたベール、プーフェンドルフ、スピノザなどはみな、ポーランド兄弟団と接点があった。ここに、寛容論の展開に関してなんらかの関係があったのではないかという疑問が起こるのは当然であろう。ただし、こうした寛容論者たちの主張をつぶさに検証し、その相関性を検証する作業は、筆者の能力を大きく超えている。従って、ここでは彼らの寛容論と同時代の思想との関わりに関する一般的な認識を整理したい。

まず、再洗礼主義は、初期のポーランド兄弟団の特徴の一つといえる。16世紀の西欧の再洗礼派の寛容論をみると、宗教問題への世俗権力の干渉の否定や、「異端」概念の捉え方などに類似点が見られる。また、後者については——すでに第5章で述べたが、カステッリョの影響が見受けられる。彼らの寛容論の原点ともいえる脱ドグマ的主張は、彼らの中ではソツィーニが最初に主張した。こうした主張は、エラスムスやその弟子たちにその源流を求めることができる²⁴⁵が、彼に影響を及ぼしたのは、おそらくアコンティウスであろう。というのも、両者は、アコンティウスがソツィーニの叔父レリオの知人の一人という関係であった。

政教分離の主張は、寛容論の重要な要素の一つだった。中世において、国家と教会はひとつの「キリストの身体」を形成し、教会の教えに従わない者を、国家の力を用いて排除した。異端者の迫害は、国家による武力行使と結びついていたのである。中世後期に起こった聖書主義と、迫害を批判する寛容論が結びつき、世俗権力からの分離という考えに至ったのは、必然といえるだろう。グレーベルのような初期の再洗礼派の中に、政教分離へと発展しうる主張を見出すことができる²⁴⁶。この見解を論じる際には、国家の持つ役割が問題となり、オランダに生まれたエラストゥス主義は、国家が教会問題の内部にまで干渉することを否定しつつも、国家権力を、教会を支配・管理する存在と位置づけていた。スピノザなどは、こうした考えを引き継いでいる。一方、ポーランド兄弟団による政教分離に関する見解は、シュリフティングやプシプコフスキが示しており、彼らの、国家は精神の問題には一切関わってはならず、ただ国民が真理に到達する環境を保障することのみに努めるべきだという考えは、ロックと共通していた。

近代思想の形成への彼らの貢献の度合いについて様々な立場があるように、寛容思想の変遷への関わりについても、その評価はわかれる。ゴワシェフスキによれば、再洗礼派の

²⁴⁵ カメン『寛容思想の系譜』、112頁。

²⁴⁶ 第5章68頁参照。

寛容論には、他宗派を平等に認容するという類の発言がほぼ見られないこと、カステリヨは無心論者への世俗権力による改宗強制に反対していないこと、ロックは、自らの寛容論の保護対象からカトリック教徒や無心論者を除外したことなどを挙げ、ポーランド兄弟団の寛容思想を評価している²⁴⁷。これに関しては、ロックがとりわけ優れた寛容の擁護者というわけではなかったという評価はある程度市民権を得ているようだが、それでも、ロックと異端であるポーランド兄弟団の社会的立場は全く異なっていたということを考慮する必要があるだろう。

一方で、オゴノフスキは、例えばロックとポーランド兄弟団の寛容論に共通点を認めつつも、その影響力や論理性などを考えた場合、ロックがポーランド兄弟団の影響を受けてこうした寛容論を示すに至った、などという過度な評価には注意が必要であると述べている²⁴⁸。カメンも、「ソツィエニ派は……ヨーロッパという巨大なパンの微細なパン種としてはたらいたにすぎない²⁴⁹」としているように、彼らの寛容思想が西欧に近代的寛容思想の形成に与えた影響力の大きさについては、簡単に過大評価してしまうわけにはいかないだろう。しかし、直接的な影響を与えるには至らなかったとしても、彼らの寛容論が、近代的寛容思想と共通点を持ち、ロックやベールなどのへ影響を思わせるほどのものであったことに間違いはない。

ポーランドにおける寛容は、対抗宗教改革の成功によって一時は失われてしまったが、宗教的迫害や宗教戦争の闇がヨーロッパ中を覆っていた時代に、ポーランドは寛容を実現したという事実は、ポーランドの人々の意識の中に、「誇るべき歴史」として蓄積されることになった。ポーランド人が、迫害される少数派の人々に対して無条件に同情を示す時、この特徴の原点はポーランド分割という経験に見出すことができるだろうが、しかし、今ひとつ、分割の経験によってより洗練された「ポーランド的寛容」への誇りもまた、その源となっているのかもしれない。一方で、ポーランド兄弟団への認識は、一般のポーランド人にとっては、単に歴史の授業で聞いたことがある名前、といった程度のものだという²⁵⁰。大半がカトリック教徒であるポーランドにおいて、さらに裏切り者とされているポーランド兄弟団が受け入れられるのは難しかったのかもしれない。しかし、筆者は、彼らと向き合ってきた今、彼らは、ポーランドの人々にとっての「誇るべき歴史」の単なる一片ではなく、より大きな歴史的重要性を持つ存在であると感じている。

²⁴⁷ Gołaszewski, *Bracia polscy*, s. 273-274.

²⁴⁸ 700 lat myśli polskiej. *Filozofia i myśl społeczna XVII wieku*, cz. 1, red. Zbigniew Ogonowski, Warszawa 1979, s. 63.

²⁴⁹ カメン『寛容思想の系譜』、170頁。

²⁵⁰ ポーランドの友人数人から得た情報に過ぎないが、出身地も年齢も異なる数人から全く同じ回答が得られたことから、妥当性ありと判断した。

巻末資料 I

主要人物略歴 (50 音順)

アルチシェフスキ, クシシュトフ Arciszefski, Krzysztof (1592-1656) 1592年12月9日、ポズナン近郊のアリウス派シュラフタの家庭に生まれる。シミギェルのポーランド兄弟団学校で学ぶ。1619年からはクシシュトフ・ラヂヴィウに仕え、1621年にはインフランティに侵入したスウェーデン軍との戦争に参加。1622年に遠征から帰ると、翌年4月、両親の財産を騙し取っていたブジェジニツキを兄エリアシュ **Eliasz (1590頃?)** と共謀して殺害。ポーランドを追放され、ハーグへ赴き、ラヂヴィウの経済援助を受けながら砲術を修める。兄エリアシュもオランダへ亡命したが、1633年にはポーランドに帰国、新国王ヴワディスワフの軍に参加し、スモレンスクでロシアを破った。彼はその後も、スウェーデン戦争などに参加している。一方クシシュトフはハーグからパリに留学した後、1629年にオランダ西インド会社の遠征に参加しブラジルへ。1637年にオランダに帰港した際、アムステルダムにてアンジェイ・ヴィショヴァティと顔を合わせている。クシシュトフの功績を耳にしたポーランド王ヴワディスワフ4世からのポーランド帰国の誘いを、信仰を理由に拒否。1638年8月16日にはブラジル派遣軍の提督に任じられた。1645年、彼はようやくヴワディスワフ4世の誘いに応じ、翌年の初めポーランドに帰国。ポーランド軍を率いてフミェルニツキとの戦いなどに参加。1655年に引退し、グダンスクの親戚の家で余生を過ごした。

ヴィショヴァティ, アンジェイ Wyszowaty, Andrzej (1608-1678) 1608年、当時リトアニア領だったフィリプフ **Filipów** に生まれる。彼の母はファウスト・ソツィエニの娘、アグニェシュカ **Agnieszka** (生没年不明)。クラクフで学び、1619年にラクフ学院に入学。クレルの家に住み込んで勉学に励んだ。1632年、奨学金を受け、数人の学生とともに留学へ出発。アルミニウス派との合同任務を帯びたルアールがグダンスクで合流し、まずドイツのハンブルクへ。ここでグロティウスと接触している。その後、オランダのライデンに到着し、1632年6月28日に神学部に入學。その後、アムステルダム、イングランド、パリを歴訪し、1637年にポーランドへ帰国する。1639年にはラクフ解体に抗議し、国会でオソリンスキと論争を交わしている。ポーランド各地で牧師を務め、1648年5月3日に結婚。シュリフティングの『キリスト教信仰告白』がきっかけで1647年にポーランド兄弟団の活動を制限する法が定められると、ヴィショヴァティはルアールのいるグダンスク近郊のストラシンへ身を寄せる。スウェーデン軍侵攻の際には、クラクフでスウェーデン王の庇護下へ。1660年3月にはカトリックとの討論会に参加。その後、ハンガリーとポー

ランドを歩き来し、1663年にドイツのマンハイムへ。ルター派による迫害に遭ってアムステルダムに逃れた後、1678年7月29日に死去するまでそこで過ごした。

ヴォイドフスキ, アンジェイ Wojdowski, Andrzej (1550頃-1622頃) 幼少期については知られていない。ヴィッテンベルクやシュトラスブルクで学んだ。頻繁に西欧各国を旅し、ソツィーニ主義の布教に励んだ。1592年にはシュトラスブルクでシュマルツをポーランド兄弟団に引き入れた。1598年にはクシシュトフ・オストロトと共にライデンに留学しているポーランド兄弟団の学生たちを訪ね、同時に多くの出版物を流布しようと試みて国外退去を命じられた。この際、エルンスト・ゾナーを改宗させることに成功している。ゾナーはこの後、アルトドルフ・バイ・ニュルンベルクでソツィーニ主義の布教活動を行い、クレルヤルアールに影響を与えている。ヴォイドフスキはルブリンやフミェルニクなどの牧師を経て、ラクフに赴任し、おそらくこの地で没した。

ヴォルツオーゲン, ヨハン・ルートヴィヒ Wolzogen, Johann Ludwig (599-1661) ポーランドでは、ヤン・ルドヴィク・ヴォルゾーゲン Jan Ludwik Wolzogen。オーストリアのカルヴァン派貴族の家に生まれる。1625年頃にポーランドに移住してポーランド兄弟団と接触を持ち、彼らを代表する作家、思想家となった。1641年からポズナン知事クシシュトフ・オパリンスキのもとに滞在し、1645年、ヴワディスワフ4世がルドヴィカ・マリア Ludwika Maria Gonzaga (1611-1667) と婚姻を結ぶため、使節としてオパリンスキをパリに派遣した際には、それに同行している。1647年頃、スィノドの勧めに従い、国外で布教活動を始め。ヨハン・シュリフティング Johann Georg Schlichting (1597-1658) が1644年に建設したポーランド南西部の町シュリフティンゴーヴァ Szlichtyngowa で没した。

オストロト, クシシュトフ Ostorodt, Krzysztof (?-1611) ニーダーザクセン地方の都市ゴスラーのルター派牧師の家に生まれる。ケーニヒスベルク大学で学び、1583年にはポーランド北部の都市チュウフフ Człuchów のルター派学校に赴任する。徐々に反三位一体論を奉ずるようになり、1585年、王領プロイセンの反三位一体派の代表者としてフミェルニクで洗礼を受け、ポーランド兄弟団に迎えられた。クラクフ、ラクフなどを遍歴した後、シミギェルの牧師となる。1605年にはグダンスク近郊の村に移り住んだ。晩年、彼は急進主義を唱えるようになった。

ズ・カリシャ, ヴォイチェフ z Kalisza, Wojciech (?-1601 頃) おそらくカリシュの平民の生まれで、クラクフ大学で学んだとされる。1581年にドイツへ赴き、シュトラスブルクやテュービンゲン、ハイデルベルクで学んだ。ポーランドに戻ると、ルブリンの南に位置する町トゥロービン Turobin のカルヴァン派学校の教師となり、その後フミェルニクの学校の校長をつとめる。1586年にポーランド兄弟団に参加し、1588年にレヴァルトゥフに新設された学校の学長となる。1597年に職を辞すと、1600年にはルスワヴィツェのポーランド兄弟団学校の学長を引き受けた。おそらく1601年頃死去。

クレル=スピノフスキ, クシシュトフ Crell-Spinowski, Krzysztof (1622-1680)
ヨハン・クレルの次男。父親の名がアリウス派の指導者としてあまりに広く知られていたため、彼は国外ではスピノフスキ姓を名乗った。ラクフで生まれ、父の死後はスィノドの援助を受け、ラクフ学院で学んだ。1642年頃から、グダンスクのルアールのもとで教育を受ける。1646年頃にルスワヴィツェの教師に任ぜられた。1648年、ライデンに赴き、アレクサンデル・コナルスキなどと共にライデン大学に入学。また、イングランドやフランスを訪問し、アルミニウス派と接触を持った。1650年にはポーランドに戻り、各地で牧師を務めた。ポーランド兄弟団追放令が出された後の1659年、彼はシロンスク、オランダ、イングランドを転々とし、他の兄弟団の信徒たちが亡命する環境を整えた。1671年にはプロイセン公国のクシノヴォの牧師となり、この地で没した。彼の息子、サムエル・クレル=スピノフスキは、ニュートン、ロックなどと親交をもった。

クレル, ヨハン Crell, Johann (1590-1636) ポーランドではヤン・クレル Jan Krell もしくはツレル Jan Crell。フランケン地方のルター派牧師の家に生まれる。10年間は家で父から教育を受け、その後ニュルンベルクなどで学んだ後、1606年にアルトドルフ大学に入学。1610年の秋、友人の紹介によってソツツィーニ主義者であるエルンスト・ゾナーと出会い、アルトドルフにおけるソツツィーニ派の活動の中心となる。この頃、ルアールとも知り合っている。ゾナーの死後、1612年12月クレルはポーランドへ到着。シュマルツやヤン・ストインスキによって、ポーランド兄弟団に迎えられた。ほどなくしてポーランドに到着したルアールと共に、彼はヤクブ・シェニェンスキのもとに滞在し、ポーランド語を学びながらシュマルツ、モスコジョフスキなどの教えを受けた。そして、翌年からはすでにギリシア語の教鞭を取った。1616年、彼は一時的にラクフ学院の学長職に就いた。この年、彼はシュラフタの娘と結婚している。正式に学長に就任し、1621年まで学院の運営に携わった後、彼は教育から離れ、執筆活動に励んだ。ルアールを通じてグロティウスと親交を深めたという。1636年5月11日、ラクフにて死去。

ズ・ゴニョンヅァ, ピョートル **z Goądza, Piotr** (1530 頃-1572 頃) 1530 年頃、非シュラフタの家庭に生まれる。クラクフ大学で学んでいた際、ヘブライ語の教授であり、宗教改革を進めていたヘブライ語教授のフランチェスコ・スタンカーロ Francesco Stancaro (1501-1574) と対立。この出来事がヴィルノ司教パヴェウ・ホルシャンスキ Paweł Holszański (?-1555) の目に留まり、その援助を受けてイタリアのパドヴァ大学に留学。この留学中に、法学教授グリバルディと出会い、反三位一体主義者となる。1555 年の中頃、モラヴィアの再洗礼派と接触しつつポーランドに帰国。ミコワイ・ラヂヴィウ・チャルニの薦めでカルヴァン派聖職者となると、1556 年にセツェミンのカルヴァン派宗教会議にて反三位一体論を展開し、カルヴァン派教会を混乱させる。2 月には、彼の過ちを正そうとした人々によってメランヒトンのもとへ送られている。彼は二神論を奉じていたが、最終的にはそうした論争からは距離を置き、ヴェングルフで牧師を務めた。

クロヴィツキ, マルチン **Krowicki, Marcin** (1501 頃-1573) 1501 年頃、エルブロンク南に位置するルバーヴァ Lubawa のシュラフタの家に生まれる。1515 年にクラクフ大学に入学。クラクフ知事ピョートル・クミタ Piotr Kmita (1477-1533) の秘書を務め、スタニスワフ・オジェホフスキと出会う。1551 年、オジェホフスキの説得に応じて結婚し、破門された。同年、彼はピンチュフでカルヴァン派説教師となり、その後もポーランド国内を転々とした。1562 年、グジェゴシュ・パヴェウの影響でアリウス派へ転向。ヴェングルフに住むが、1570 年にはルブリンへ移住し、1573 年 11 月に死去した。

シュマルツ, ヴァレンティン **Schmalz, Valentyn** (1572-1622) ポーランドではヴァレンティ・シュマルツ Walenty Szmalc またはスマルツ Walenty Smalc。1572 年にドイツ中央に位置する都市ゴータ Gotha に生まれる。ヴィッテンベルク、イエーナ、シュトラスブルクなどで学び、このシュトラスブルクでヴォイドフスキと知り合った。彼の影響でポーランド兄弟団の教義に興味を抱き、1592 年にポーランドへ赴く。シミギェルのポーランド兄弟団学校の学長を短期間務めた後、1598 年にルブリンの牧師となり、クシシュトフ・ルビェニェツキ (シニア) と共に運動を指導した。1605 年にはラクフ学院の教師となった。毎日、彼の家には学生達が集まり、討論会が開かれていたという。1611 年、モスコジョフスキと共にグダンスクのメンノ派に合同を提案している。スカルガなどと論争したことで有名。1622 年ラクフにて死去した。

シュリフティング, ヨナシュ **Szlichtyng, Jonasz** (1592-1661) 1592 年にシミギェル近郊のソチコーヴォ Sączkowo に生まれる。母はアルチシェフスキ家出身。1609

年にグダンスクの学校に入学し、その後ラクフ学院へ。1616年にポーランドを出て、アルトドルフ、ライデン、イングランド、パリを歴訪し、1619年に帰国。ラクフで牧師を務め、解体後はルスワヴィツェへ。1644年の「慈愛会議」にポーランド兄弟団の代表として派遣され、参加を拒否される。1647年、『キリスト教信仰告白』が焚書処分となる。彼はオランダ、トランシルヴァニアなどを転々として身を隠し、スウェーデン信仰の際にクラクフに戻る。スウェーデンの撤退後はシロンスクに隠れ住み、1661年秋に死去した。

ショーマン, ゲオルク Schomann, Georg (1530頃-1591) ポーランドではジェジー・ショーマン Jerzy Szoman。当時の神聖ローマ帝国領ラーティボル Ratibor (現在のポーランド領ラチブシュ Racibórz) に生まれる。カトリック教徒の家で育ったが、クラクフ大学を経てヴィッテンベルク大学に入学し、ルター派を受け入れた。ほどなくしてカルヴァン派に転向すると、1558年にピンチュフのカルヴァン派学校の教師となる。1562年にグジェゴシュ・パヴェウの影響で反三位一体派へ改宗。1569年にはモラヴィア兄弟団を訪れた。1579年にはソツィーニと再洗礼について議論を交わしている。

スタトリウス, ピョートル Statorius, Piotr (1530頃-1591) またはピョートル・ストインスキ Piotr Stoiński。フランス出身。ローザンヌで学び、カルヴァンやベーズと接触し、宗教改革の活動家となる。1549年にポーランドへ到着。1556年にはピンチュフのカルヴァン派学校の教師となり、1561年には学長に着任したが、徐々に反三位一体派に傾いてゆく。1568年にポーランド語の文法書を著したことで有名。この頃からストインスキ姓を名乗り始めたという。1591年にクラクフにて死去。

ソツィーニ, ファウスト Sozzini, Fausto (1539-1604) 1539年にイタリア中部の都市シエナの裕福な貴族の家に生まれる。反三位一体主義者として有名だったレリオ・ソツィーニ Lelio Sozzini (1525-1562) の甥にあたる。ソツィーニは法学、哲学、倫理学、神学などを独学で学び、1559年にはリヨンに留学。レリオの死の知らせと共にチューリヒへ赴き、葬儀の後、レリオが遺した論文などを譲り受けた。イタリアに戻ると、1563年からはメディチ家に仕えた。1574年、彼はバーゼルに赴き、叔父であるレリオの友人達に迎えられ、様々な神学知識を養った。1579年、ビヤンドラータの招きに応じてトランシルヴァニアに赴き、この年の暮れ、ポーランドに足を踏み入れた。パレオログスに対抗する論文を著し、それがステファン・バトーリ王の怒りに触れたことを知ると、1583年、迫害を避けるためにヴィエリチカ近郊のクシシュトフ・モルシュティンの所領、パヴリコヴィツェ Pawlikowice へ身を寄せた。1586年、モルシュティンの娘と結婚、翌年のバ

トリー王の死を機に、妻とともにクラクフへ戻る。1598年、クラクフ大学の学生がソツツイーニを襲い、騒ぎに気づいたクラクフ大学の教授によって救われる。その後、ソツツイーニは更なる迫害を恐れルスワヴィツェに逃れた。ポーランド兄弟団に正式に迎え入れられたわけではなかったが、彼らの教義に大きく影響した。

チェホーヴィツ, マルチン Czechowic, Marcin (1532-1613) 1532年、ヴィエルコポルスカ地方の貧しい職人の家に生まれる。17才まではポズナンで学び、1554年にライプツィヒに留学、ギリシア語、ヘブライ語を学んだ。1555年の時点ではまだルター派を奉じていた。1559年頃、ミコワイ・ラヂヴィウ・チャルニが彼を教師としてヴィルノのカルヴァン派学校へ招いた。1561年には、ビヤンドラータを擁護するラヂヴィウ公の頼みで、手紙を携えカルヴァンを訪ねている。ポーランドに帰国する際、モラヴィアの再洗礼派のもとに立ち寄る。ポーランド兄弟団に参加するも、二神論を唱えていた。1565年にラヂヴィウ公が死去すると、クヤーヴィのニェモイエフスキのもとへ。1569年3月にベウジツェで開かれたスィノドにおいてユニテリアン主義に転じた。新都市ラクフへ赴くも、その混乱した状況に幻滅し、1570年にルブリンへ移る。急進主義を代表する思想家として、ブドニと論争。1582年にはグダンスクへ赴き、メンノ派との合同を試みている。1613年、ルブリンにて死去。

ニェミリチ, イェジー Niemirycz, Jerzy (1612-1659) ヴォウイン地方のシュラフタの家に生まれる。ラクフ学院へ入学し、1630年にライデンへ留学し、フランス、イングランド、イタリア、スイスを歴訪。ポーランド軍のモスクワ遠征の知らせを聞き帰国すると、コニェツポルスキ軍の一員として、トルコと戦う。キエフの境界問題評定官 *podkomorzy* をつとめ、代議員としても活躍。ラクフ解体の際には国会に抗議を行った。スウェーデン軍侵攻の際にはスウェーデン王を支援。1658年にロシア正教へ改宗すると、ウクライナ解放を求めるコサックの戦いに参加した。

ニェモイエフスキ, ヤン Niemojewski, Jan (1530頃-1598) 裕福なシュラフタの家に生まれ、イノヴロツワフの地方法廷判事を務める。1545年にケーニヒスベルク大学へ留学。1561年にチェホーヴィツと出会い、彼の影響で反三位一体主義を信奉するようになる。二神論を説いていたが、1569年以降はユニテリアン主義を奉ずるようになった。初期のポーランド兄弟団の中心的指導者、パトロン。最初期にラクフへ移住した一人だったが、翌年にはチェホーヴィツとともにルブリンへと移り急進派を指導。1598年に没した。

パヴェウ, グジェゴシュ Paweł, Grzegorz (1525 頃-1591) ブジェジンの平民の家に生まれる。1540年にクラクフ大学に入学。1547年にはケーニヒスベルク大学に入学し、神学を学んだ。1549年、ポズナンのカトリック学校の校長となるが、翌年、カルヴァン派への転向を理由にその座を追われた。カルヴァン派教会の指導者として、故郷ブジェジン、クラクフなどで活動。1562年4月にピンチュフで開催されたカルヴァン派宗教会議をきっかけに反三位一体派へ転向。8月には自身も反三位一体論を唱え、カルヴァン派教会の分裂を引き起こした。1569年にラクフに移住し、パレオログスと論争を繰り広げながら、教義の統一に尽力する。1591年、ピンチュフにて死去した。

ビヤンドラータ, ジョルジョ Biandrata, Giorgio (1515 頃-1588) ポーランドではイェジー・ブランドラタ Jerzy Blandrata。イタリアのピエモンテにある小都市に生まれ、フランスのモンペリエにて医学を学ぶ。この頃、作家のラブレールFrançois Rabelais (1483 頃-1553) もこの大学で学んでいた。1550年初め、ボナ王妃の宮廷医としてポーランドを訪れ、その後トランシルヴァニア公サポヤイ・ヤーノシュの死後未亡人となっていたイザベラ・ヤギェロンカに仕えた。1552年にイザベラがポーランドに戻るのと同時に、ビヤンドラータはイタリアに戻り、1553年にはアルチャーティと共にパドヴァにカルヴァン派の共同体を組織しようと試みた。1557年に逮捕令が出されると、彼はジュネーヴへ逃げ、市民権を得た。当時のジュネーヴには、セルヴェトゥス処刑の影響から、反三位一体派が多く潜んでおり、彼はその影響を受けてカルヴァンと対立するようになったという。カルヴァンに異端と見なされるようになったビヤンドラータはジュネーヴを離れ、ポーランドへ到着した。彼は熱心なカルヴァン主義者を装い、プロテスタント運動の指導者であったワスキからの信頼を得、彼からミコワイ・ラヂヴィウ・チャルニを紹介された。1559年、ズィグムント・アウグストの支持により、彼はイザベラ女王の看護のためトランシルヴァニアへ訪れ、彼女の死(1559年9月20日)後、ポーランドへと戻った。ワスキの死後、ポーランドのプロテスタント運動の指導的地位を手に入れたビヤンドラータは、徐々に反三位一体思想を表明し始めた。1562年の末、ヤーノシュ・ジグモンドの招きに応じてトランシルヴァニアに向かうと、この地でも布教活動に励んだ。1565年には、三神論を唱えていたグジェゴシュ・パヴェウに対し、ユニテリアン主義を受け入れるように勧める手紙を送っている。1578年、急進的なダーヴィト・フェレンツと対立し、バーゼルからソツィーニを招く。トランシルヴァニアにイエズス会の王が即位すると、逃れるようにポーランドへ。宗教運動から離れ、バトーリ王に仕えて晩年を過ごした。

フィリポフスキ, ヒエロニム Filipowski, Hieronim (?-1574 頃) 裕福なシユラフタの家に生まれる。法令執行運動に積極的に参加し、宗教改革運動を最も早い時期

から支持。カルヴァン派が分裂すると小教会を支持。カルヴァン派との和解を求め、1567年のスクシンノおよびワンツトの会議を指揮した。ポーランド兄弟団を支持したことで、カトリック司教のシモン・ザツイウシュ Szymon Zacjusz (1507-1591) から、全裸で結婚式を挙行しているという中傷も受けた。クラクフの代議員として国会に何度も出席するなど、国政への発言力も強かったが、1566年にヤン・ザモイスキから批判されたことをきっかけに、政界から退いた。1569年、ローネンベルクやショーマンとともに、モラヴィア兄弟団を訪問している。

フェルケル, ヨハン Völkel, Johann (?-1618) ポーランドではヤン・フェルケル Jan Völkel。マイセン近郊の生まれ。ヴィッテンベルクで学び、1585年からヴェングルフのポーランド兄弟団学校の教師となり、その後フィリップフやシミギェルの牧師を務めた。ポーランド兄弟団を代表する論客として多くの活動に参加し、『ラクフ教理問答集』の編集にも携わった。

プシプコフスキ, サムエル Przypkowski, Samuel (1592頃-1670) 1592年、ルスワヴィツェのソツツイーニ派シュラフタの家に生まれる。1611年にラクフ学院へ入学。その後アルトドルフ、ライデンへ留学し、1619年に帰国した。1621年、クシシュトフ・ラジヴィウに仕える。1633年、ラヂヴィウとともにモスクワ遠征に参加。1639年にはウクライナに移り住んだ。1648年にフミェルニツキの乱が起こると、クラクフ、トルンなどを転々とし、「大洪水」の際にはボグスワフ・ラヂヴィウに仕えた。追放令が出された後の1658年、プシプコフスキはポーランドを離れ、ボグスワフ・ラヂヴィウのもとへ身を寄せた。ケーニヒスベルク、コシノヴォなど、プロイセン公国における運動を指導。1670年、ケーニヒスベルクで生涯を閉じた。

ブドニ, シモン Budny, Szymon (1530頃-1593) 1530年頃、マゾフシェ地方のさほど裕福でないシュラフタの家に生まれたとされるが、正確な時期は定かではない。1544年にクラクフ大学に入学したといわれている。ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語、古代スラヴ語、ルーシ語などに通じたインテリだった。1558年1月、ヴィルノのカルヴァン派教会の説教師に任命され、その後もリトアニアを中心に活動。1563年、ポーランド兄弟団に参加し、リトアニアのマグナート、ヤン・キシユカのもとで説教師を務める。急進主義を批判したことから、1582年にポーランド兄弟団から破門され、1584年にはルツワヴィツェのスイノドで再び糾弾される。1593年1月13日死去。

モスコジョフスキ, ヒエロニム Moskorzowski, Hieronim (1560頃-1625)

クラクフ南方の裕福なシュラフタの家に生まれる。1576年からライプツィヒ、次いでヴィッテンベルクに留学。大きな力を持ったシュラフタであり、代議員として何度も国会に出席。ポーランド兄弟団に参加したのは1590-1594年のことだといわれており、ポーランド兄弟団の強大なパトロンとなった。1606年にはゼブジドフスキの乱に参加している。

ラデツケ, マテウシュ Radecke, Mateusz (1540-1612) グダンスクの貧しい

カトリック教徒の家に生まれたが、彼が生まれてすぐに家族はルター派に改宗した。1560年にケーニヒスベルク大学に入学。オランダ、フランス、ドイツなどを歴訪し、カルヴァン派に改宗する。グダンスクに帰った後、彼はメノ派や反三位一体派と接触していく。1582年に始まり、一度は頓挫しかけたグダンスクの反三位一体派とポーランド兄弟団との合同の試みは、ラデツケとソツツィーニの書簡のやり取りを通して成功した。ラデツケはポーランド兄弟団に参加したことからグダンスクを追われた。その後はシミギェルほか、ポーランド各地を遍歴して布教活動を行なった。彼の娘の一人はアンジェイ・ヴォイドフスキと結婚した。

ルアール, マルティン Ruar, Martin (1589-1657) ポーランドではマルチン・

ルアール Marcin Ruar。ドイツ、ホルシュタインのルター派の家庭に生まれる。アルトドルフ大学で学んでいた1611年にエルンスト・ゾナーと出会い、反三位一体思想に傾倒する。ここでクレルとも出会った。クレルがポーランドへ去った後も、アルトドルフで布教活動を続たことでポーランド兄弟団に招かれ、1614年にポーランドへ。シミギェル、ピョートルクフを経てラクフへ到着し、1615年の春まで滞在した。その後、ドイツ、オランダ、イングランド、フランス、イタリアを遍歴。その際、ケンブリッジ大学から歴史学教授への就任を要請され、断っている。また、グロティウスやメルセンヌと交流を持ったのもこの頃であった。1621年、ルアールは再びポーランドを訪れ、クレルに代わってラクフ学院の学長となる。1623年に受けた暴徒の襲撃をきっかけに学長を辞し、グダンスクへ。この町の有力者の娘と結婚し、布教活動に励んだ。1632年にはアルミニウス派との合同を試みるためにオランダへ赴いている。ラクフ解体後、彼はグダンスクを追われ、ストラシンへと逃れ、1657年にこの町で没した。

ルビェニェツキ, アンジェイ (シニア) Lubieniecki, Andrzej starszy (1550

頃-1623) クシシュトフ、スタニスワフの兄。パリで学び、ズィグムント・アウグスト、ヘンリク・ヴァレーズィ、ステファン・バトーリ、ズィグムント3世などに仕える。ソ

ツツィーニ主義に転向した後は、シミギェルで教会を指導。サムエル・プシプコフスキの妹と結婚した。ヴォウインやラクフを経てルブリン近郊に移り住み、その地で没した。

ルビェニェツキ, アンジェイ (ジュニア) Lubieniecki, Andrzej młodszy (1590-?) クシシュトフ (シニア) の息子であり、アンジェイ・ルビェニェツキ (シニア) の甥にあたる。幼少期から王宮に仕え、13歳の1603年にはハイデルベルクのフリードリヒ4世の宮廷に仕える。1605年にライデン大学に入学。帰国後はしばらくの間ルブリンに滞在。1527年にアンジェイ・フィルレイの邸宅が暴徒に襲われた際、抵抗して戦った。スウェーデン侵攻の際にはビャウイストク Białystok に逃れ、1660年にはセツェミン近郊の村ロポチツェ Ropocice へ移動。その後、アリウス派の追放に伴ってプロイセン公国へと亡命した。

ルビェニェツキ, クシシュトフ (シニア) Lubieniecki, Krzysztof starszy (1561-1624) アンジェイ (シニア)、スタニスワフ (シニア) の弟。幼少期についてはあまり知られていない。1598年までレヴァルトウフで説教師を務め、その間にクシシュトフ・オストロトや兄のアンジェイなどと共に、聖三位一体説をめぐる様々な討論に参加。1598年にルブリンにおけるポーランド兄弟団の指導者ヤン・ニェモイェフスキが死去すると、ルビェニェツキはそのあとを継ぎ、シュマルツと共にソツツィーニを支持して急進派と対立した。1616年にラクフへ定住し、1624年2月に死去した。

ルビェニェツキ, クシシュトフ (ジュニア) Lubieniecki, Krzysztof młodszy (1598-1648) クシシュトフ (シニア) の息子であり、アンジェイ (ジュニア) の弟。幼少期については不明だが、1616年にアルトドルフを経てライデンへ留学し、その2年後にはフランスへ。帰国後ラクフで聖職者となり、ラクフ学院の運営にも携わる。1626年にスィノドの要請でルブリンの教会へ赴任。この頃ルブリンの教会は暴徒によって破壊され、1627年には法廷から再建禁止令が発せられていたが、ポーランド兄弟団の組織は維持されており、ルビェニェツキは彼らの指導を任された。1635年にはその信仰を理由に罰金を科せられている。1648年にラクフで没したとされている。

ルビェニェツキ, スタニスワフ (シニア) Lubieniecki, Stanisław starszy (1558頃-1633) アンジェイ (シニア)、クシシュトフ (シニア) とは兄弟。1577年からステファン・バトーリに仕えたが、ショーマンの誘いで聖職者となり、ラクフで活動。その後ル

スワヴィツェに赴任し、この地で没した。

ルビェニェツキ, スタニスワフ (ジュニア) Lubieniecki, Stanisław młodszy
(1623-1675) 1623 年、ラクフに生まれる。父はクシシュトフ (ジュニア)。ラクフ学院に通っていたが、1638 年に閉鎖された後はキシェリンへと移住する。1644 年からはトルンで学んだ。1646 年から、オルレアン、ライデン、アムステルダムなどに留学。1649 年に帰国し、1654 年にはチャルコーヴィの牧師になる。翌年、この町をカトリック教会に扇動された暴徒が襲い、教会が破壊されると、彼はスウェーデン軍の保護を求めてクラクフへ移った。1660 年にはデンマーク王フレデリク 3 世のもとへ亡命し、翌年にはハンブルクで他の亡命者を世話した。彼の息子、テオドルはライプニッツと親交を持っていた。

巻末資料 II

歴史年表

年代	ヨーロッパ	ポーランド兄弟団	ポーランド
1200 前	962 〔独〕 神聖ローマ帝国誕生 1054 教会の最終的な東西分裂 1096 第一回十字軍遠征		966 ミェシュコ 1 世、キリスト教を受容 1000 神聖ローマ皇帝オットー 3 世、ポーランドの独立を認める
1200	06 〔蒙〕 チンギス・ハーン、モンゴルを統一		26 マゾフシェ公の招きでドイツ騎士修道会がポーランドに入植 41 レグニツァの戦い
1300	09 教皇のバビロン捕囚 37 〔英・仏〕 100 年戦争（～1453） 47 黒死病流行 78 教会大分裂（～1417） 82 ウィクリフが聖書を英訳		08 ドイツ騎士修道会、グダンスクおよび東ポモージェを占領（～09） 33 カジミェシュ 3 世大王即位（～70） 64 クラクフ大学創立 70 ルドヴィク 1 世即位（～82） 84 ヤドヴィガ即位（～99） 85 クレヴォにおいてポーランド＝リトアニアの連合成立 86 リトアニア大公ヤギェウォ、キリスト教を受容しポーランド王ヴワディスワフ 2 世として即位（～1434）

年代	ヨーロッパ	ポーランド兄弟団	ポーランド
1400	<p>14 コンスタンツの公会議（～18） フスの処刑</p> <p>45 頃 〔独〕グーテンベルク、活版印刷術を発明</p> <p>55 〔英・仏〕バラ戦争（～85）</p> <p>81 〔西〕スペインで異端審問開始</p> <p>90 エラスムス『愚神礼賛』</p> <p>92 コロンブスの新大陸発見</p>		<p>10 グルンヴァルトの戦い</p> <p>14 コンスタンツの公会議に参加</p> <p>34 ヴワディスワフ 3 世即位（～1444）</p> <p>47 カジミエシュ 4 世即位（～92）</p> <p>54 ドイツ騎士修道会との 13 年戦争（～66）</p> <p>66 ドイツ騎士修道会とトルンの和約締結</p> <p>73 クラクフに最初の印刷所</p> <p>92 ヤン 1 世オルブラフト即位（～1501）</p>
1500	<p>17 〔独〕ルターによる宗教改革開始</p> <p>22 〔独〕ルター、新約聖書のドイツ語訳</p> <p>31 セルヴェトウス『三位一体の誤謬について』</p>		<p>01 アレクサンデル即位（～06）</p> <p>05 「ニヒル・ノヴィ法」成立</p> <p>06 ズィグムント 1 世即位（～48）</p> <p>18 ボナ・スフォルツァがポーランドに到着</p> <p>20 頃 ルター派がポーランドへ流入</p> <p>25 プロイセンの臣従</p>

年代	ヨーロッパ	ポーランド兄弟団	ポーランド
	36 カルヴァン『キリスト教綱要』		35 「法令執行運動」本格化 40 頃 カルヴァン派がポーランドへ流入 43 コペルニクス『天体の回転について』
	53 セルヴェトゥスの処刑		48 ズィグムント 2 世アウグスト即位 (～72) ボヘミア兄弟団がポーランド流入
	55 〔独〕アウグスブルクの宗教和議	56 ピョートル・ズ・ゴニョンザ、セツェミンにおいて反三位一体宣言 61 チェホーヴィツ、カルヴァンと面会 62 4 月、ビヤンドラータ、ピンチュフにて信仰告白 8 月、グジェゴシュ・パヴェウの反三位一体宣言	64 パルチュフ勅令発布、外国人宣教師の追放 65 イエズス会、ポーランドに進出
	68 トランシルヴァニアの宗教寛容令発布 〔蘭〕オランダ独立戦争(～1648)	67 シェニェンスキ、ラクフ建設を宣言	69 ルブリン合同
		69 モラヴィア兄弟団との接触	

年代	ヨーロッパ	ポーランド兄弟団	ポーランド
	72 〔仏〕 サン・バルテルミーの虐殺 98 〔仏〕 ナントの勅令	70 ニェモイエフスキ、チェホーヴィツなどがラクフを離れルブリンへ 74 『教理問答と信仰告白』 75 チェホーヴィツ『キリスト教徒の対話』 79 ソツィーニがポーランド来訪 82 ブドニがポーランド兄弟団から破門される 83 ブドニ『武器を用いる官職に関して』 85 グダンスクの反三位一体派が加入 88 レヴァルトゥフ学校創立 97 オストロト、ヴォイドフスキがオランダを訪問	70 サンドミェシュ協定成立 73 ワルシャワ連盟協約成立 ヘンリク・ヴァレーズィ即位（～74） 76 ステファン・バトーリ即位（～86） 78 ヴィルノ大学創立 87 ズィグムント 3 世即位（～1632） 96 ワルシャワ遷都
1600	13 〔露〕 ロマノフ朝成立 18 〔独〕 30年戦争勃発（～48）	02 ラクフ学院創立 05 『ラクフ教理問答集』 09 モスコジョフスキ、『ラクフ教理問答集』をラテン語訳し、ジェームズ 1 世に献呈 12 クレル、ポーランドへ到着 23 ラクフが襲撃され、甚大な被害を蒙る	04 偽ドミートリーを支援しモスクワ遠征（～06） 06 ゼブジドフスキの反乱（～09） 07 第二の偽ドミトリー出現、ロシアとの戦争（～18） 21 ホチムの戦いでタタール軍を破る スウェーデン軍がリガを占領

年代	ヨーロッパ	ポーランド兄弟団	ポーランド
		28 プシプコフスキ『教会と平和の一致について』	26 ポモージェにおけるスウェーデンとの戦争（～29）
		32 ルアールがオランダを訪問し、アルミニウス派と接触	32 ロシアとの戦争（～34） ヴワディスワフ 4 世即位（～48）
		37 クレル『宗教の自由について』	
		38 オックスフォードで布教活動 ラクフ解体	
42	〔英〕清教徒革命（～49）	47 シュリフティングの著述が焚書となり、兄弟団の学校、印刷所の閉鎖が命じられる	45 慈愛会議の開催
48	〔独〕ウェストファリア条約締結	48 ワルシャワ連盟協約の保護対象から削除される	48 フミエルニツキの乱（～54） ヤン 2 世カジミェシュ即位（～68）
49	〔英〕チャールズ 1 世処刑され、共和制（～60）となる		
51	ホブズ『リヴァイアサン』		
		54 シュリフティング『真理のための弁明』	54 ポーランド・ロシア戦争（～67）
		55 各地で兄弟団の集落が襲われる	55 ポーランド・スウェーデン戦争 （大洪水）（～60）
		56 『ポーランド兄弟団文庫』（～92）	
		58 ポーランド兄弟団追放令	
60	〔英〕王政復古		60 オリヴァでスウェーデンと和約締結
		62 国内における最後のシノド召集	65 ルボミルスキの反乱（～66）

年代	ヨーロッパ	ポーランド兄弟団	ポーランド
	70 スピノザ『神学政治論』 71 〔露〕ステンカ・ラージンの乱 85 〔仏〕ナントの勅令廃止 88 〔英〕名誉革命 89 ロック『寛容についての書簡』 95 ベール『歴史批評辞典』	85 ルビェニェツキ『ポーランド宗教改革史』	68 ワルシャワ連盟協約の実質廃止 69 ミハウ・ヴィシニョヴィエツキ即位(～73) 74 ヤン3世ソビェスキ即位(～96) 97 アウグスト2世即位(～1706)
1700	00 北方戦争(～21) 01 スペイン継承戦争(～14) 40 〔独〕プロイセン、フリードリヒ2世即位(～86) オーストリア、マリア・テレジア即位(～80) 62 〔露〕エカチェリーナ2世即位(～96) 69 ネジョン、『信教の自由のための弁明』をフランス語訳 75 〔米〕独立戦争(～83) 89 フランス革命勃発	02 テオドル・ルビェニェツキによるドイツ布教活動	40 スタニスワフ・コナルスキ、ワルシャワに貴族学院創設 64 スタニスワフ・アウグスト・ポニャトフスキ即位(～95) 95 三国分割によりポーランド滅亡

地図



参考文献一覧

[外国語文献]

- 700 lat myśli polskiej. *Filozofia i myśl społeczna XVI wieku*, red. Szczucki, Lech, Warszawa 1978.
- 700 lat myśli polskiej. *Filozofia i myśl społeczna XVII wieku*, cz. 1-2, red. Ogonowski, Zbigniew, Warszawa 1979.
- Bibliografia literatury polskiej Nowy Korbut*, 1-3, Warszawa 1963-1965.
- Brzostowski, Tadeusz., *Paweł Włodkowic*, Warszawa 1954.
- Chmaj, Ludwik, *Bracia polscy: ludzie, idee, wpływy*, Warszawa 1957.
- Chmaj, Ludwik, *Faust Socyn: 1539-1604*, Warszawa 1963.
- Gołaszewski, Zenon, *Bracia polscy*, Toruń 2004.
- Jean, Bérenger, *Tolerancja religijna w europie w czasach nowożytnych (XV-XVIII wiek)*, Poznań 2002.
- Konfederacja warszawska 1573 roku, wielka karta polskiej tolerancji*, oprac. Korolko, Mirosław, Tazbir, Janusz, Warszawa 1980.
- Kwieciński, Jerzy, *Bracia człowieka, arianie*, Warszawa 1961.
- Ogonowski, Zbigniew, *Arianie polscy*, Warszawa 1952.
- Ogonowski, Zbigniew, *Socynianizm polski*, Warszawa 1960.
- Ogonowski, Zbigniew, *Arianizm w polsce*, Warszawa 1972.
- Polska myśl demokratyczna w ciągu wieków*, oprac. Kridl M., Malinowski W., Wittlin J., Warszawa 1986.
- Polski Słownik Biograficzny*, 1-34, Kraków-Wrocław-Warszawa-Gdańsk-Łódź 1935-1993.
- Raków ognisko arianizmu*, red. Cynarski, Stanisław, Kraków 1968.
- Socinianism and its role in the culture of the XVI-th to XVIII-th centuries*, Szczucki, Lech ed., Warszawa-Łódź 1983.
- Tazbir, Janusz, *Bracia polscy na wygnaniu*, Warszawa 1977.
- Tazbir, Janusz, *Tradycje tolerancji religijnej w Polsce*, Warszawa 1980.
- Tazbir, Janusz, *Reformacja, kontrreformacja, tolerancja*, Wrocław 1996.
- Wood, Ian, *The Missionary Life – Saints and the evangelisation of Europe, 400 – 1050*, Longman 2001.
- Wyrozumski, Jerzy, „Tolerancja jako przejaw pluralizmu kultury polskiej”, w: *Zeszyty Naukowe Uniwersytetu Jagiellońskiego, Prace Pedagogiczne* 9, Kraków 1988.

[邦語文献]

- 阿部謹也『ドイツ中世後期の世界』(阿部謹也著作集 第10巻) 筑摩書房、2000年。
- 伊勢田奈緒「ポーランドにおける宗教改革運動の受容についての一考察」『和泉短期大学研究紀要』第25号、2004年。
- 『異端運動の研究』会田雄次・中村賢二郎編、京都大学人文科学研究所、1974年。
- 『岩波キリスト教辞典』大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃編、岩波書店、2002年。
- 『岩波講座世界歴史15 近代世界の形成II』井上幸治ほか編、岩波書店、1969年。
- ヴォルテール『哲学書簡』(林達夫訳) 岩波書店、1951年。
- 岡本崇男「シモン・ブドニと『教理問答』」『神戸市外国語大学外国学研究』第56号 2003年。
- ヘンリ・カメン『寛容思想の系譜』(成瀬治訳) 平凡社、1970年。
- ステファン・キェニューヴィチ編『ポーランド史』(加藤一夫・水島孝生訳) I、恒文社、1986年。
- 木村武雄「欧州と社会システム——史的展開を中心に——」『筑波学院大学紀要』第3集、2008年。
- 『キリスト教人名事典』日本基督教団出版局、1986年。
- 『キリスト教大事典』日本基督教協議会文書事業部キリスト教大事典編集委員会編、教文館、1963年。
- オリヴィエ・クリスタン『宗教改革』(佐伯晴郎監修・木村恵一訳) 創元社、1998年。
- 小泉徹『宗教改革とその時代』山川出版社、1996年。
- 児玉善仁『イタリアの中世大学：その成立と変容』名古屋大学出版会、2007年。
- 小山哲「ワルシャワ連盟協約の成立——16世紀のポーランドにおける宗教的寛容の法的基盤——」『史林』第73巻 第5号、史学研究会、1990年。
- 『宗教改革急進派』倉塚平・田中真造・出村彰・萩原溢恵・森田安一編、ヨルダン社、1972年。
- 『宗教改革著作集 第8巻』出村彰・森田安一・倉塚平・矢口以文訳、教文館、1992年。
- 『宗教改革著作集 第10巻』出村彰・丸山忠考・飯島啓二訳、教文館、1993年。
- 『詳細世界史研究』木下康彦・木村靖二・吉田寅編、山川出版社、1995年。
- 白木太一『近世ポーランド「共和国」の再建 四年議会と五月三日憲法への道』彩流社、2005年。
- 『新カトリック大事典』上智学院新カトリック大事典編纂委員会編、1-3、研究社、1996-2009年。
- 『信仰と他者 寛容と不寛容のヨーロッパ宗教社会史』深沢克己・高山博編、東京大学出版会、2006年。
- 甚野尚志『中世の異端者たち』山川出版社、1996年。
- 『新約聖書』新約聖書翻訳委員会訳、岩波書店、2004年。

- 『新約聖書略解：新共同訳』日本基督教団出版局、2000年。
- 高橋薫「フランス宗教戦争期の若干のパンフレに於けるポーランドの政治的イメージについて」『駒澤大学外国語学部論集』第25巻、1987年。
- 鳥山成人『ロシア・東欧の国家と社会』恒文社、1985年。
- 中山昭吉「ポーランド啓蒙思想の源流」『京都産業大学論集』人文科学系列 第11巻、1984年。
- 中山昭吉「ポーランド兄弟団と形成期西欧啓蒙思想——ロック研究への一視点」『京都産業大学論集』人文科学系列 第13巻、1986年。
- 中山昭吉『近代ヨーロッパと東欧』ミネルヴァ書房、1991年。
- デーヴィッド・B・パーク『ユニテリアン思想の歴史 自由宗教の歴史の原史料による述作』（紺野義継訳）アポロン社、1978年。
- 『フォーラム・ポーランド 2005-2006 年会議録』関口時正・田口雅弘編、ふくろう出版、2007年。
- 『ポーランド・ウクライナ・バルト史』伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編、山川出版社 1998年。
- ピエール・ベール『寛容論集』（野沢協訳）（ピエール・ベール著作集 第2巻）法政大学出版局、1979年。
- ピエール・ベール『歴史批評辞典』（野沢協訳）I-III（ピエール・ベール著作集 第3-5巻）法政大学出版会、1982-1987年。
- 堀米庸三『正統と異端 ヨーロッパ精神の底流』中央公論社、1964年。
- チェスワフ・ミウオシュ『ポーランド文学史』（関口時正他訳）未知谷、2006年。
- ジョン・ロック『寛容についての書簡』（レイモンド・リクバンスキー序、平野耿訳）朝日出版社、1971年。

Streszczenie

Bracia polscy i „tolerancja”

Kei Sugimoto

„Tolerancja” oznacza postawę, która przyjmuje poglądy lub przekonania innych, różniące się od siebie. Aktualnie uważa się to słowo za cnotę, którą człowiek powinien posiadać, a która jest niezbędna, żeby on współżył z innymi. Zanim jednak „tolerancja” zdobyła taką wartość, miała miejsce długa walka i było bardzo wiele ofiar batalii o „tolerancję”. Ten pogląd dotyczy natury chrześcijaństwa, a od dawna jest przedmiotem sporu w Europie. W średniowieczu było kilka osób, które głosiły tolerancję, a jednak dla większości herezja musiała być prześladowana, poganie musieli być zmuszani do nawrócenia. W tym okresie tolerancja była złem. Kiedy reformacja stworzyła różne wyznania, każde poczęło się nawzajem prześladować. Jednocześnie dla zachowania porządku państwa, tolerancja wobec innych była potrzebna. Coraz więcej ludzi dążyło do tolerancji, a od czasu do czasu państwo akceptowało ją, choć niechętnie. XVII wiek to okres, w którym tolerancja jako zło konieczne zmieniała swoje znaczenie. W tym stuleciu wybitni myśliciele, jak na przykład Spinoza, Locke oraz Bayle zaczęli się zajmować zagadnieniem tolerancji, w wyniku czego ukształtowano nowoczesny pogląd na jej temat.

Reformacja w Polsce zaczęła się w latach 20. XVI wieku. Mimo że w tamtych czasach panował w Polsce Kościół katolicki, dysydenci mogli żyć stosunkowo swobodnie. Ponieważ w tym kraju pozwolono prześladowanym z innych krajów żyć bez nacisku, Polska była słynna jako kraj tolerancyjny. W takim otoczeniu grupa antytrynitarzy oddzielała się od Zboru kalwińskiego w latach 60. XVI wieku. Przeciwnicy nadali im imię „arian”, oni sami używali określenia „bracia polscy”. Od samego początku kierowali się oni duchem tolerancji, a w XVII wieku zostali czołowymi obrońcami tolerancji w Polsce.

* * *

Tematem niniejszej pracy są dzieje oraz postawa tolerancyjna braci polskich, którzy pojawili się w kraju tolerancyjnym. Rozdział pierwszy, drugi i trzeci traktują ich historię, a w rozdziałach czwartym i piątym przedstawiam dzieje polskiej tolerancji, a także myśl oraz praktykę tolerancji braci polskich.

W pierwszym rozdziale, śledząc proces przyjęcia reformacji w Polsce i rozłamu zboru kalwińskiego, wyjaśniam okoliczności powstania braci polskich. W XVI w. szlachta

zdobyła dużą potęgę ekonomiczną dzięki handlowi na Morzu Bałtyckim. Walcząc z królem, magnaterią i Kościołem zaczęła uczestniczyć w administrowaniu państwem. Najpierw luteranie wpłynęli do Prus około roku 1520 za Zygmunta I Starego. W latach 40. XVI w. za Zygmunta II Augusta, weszli do Polski przez Śląsk kalwini i bracia czescy. Ruch reformacyjny, przeważnie kalwinizm, który przyjęła większość szlachty wpływał na kulturę polską. Mariaż króla Zygmunta I z Boną Sforzą spowodował napływ kultury włoskiej oraz antytrynitaryzmu, który wówczas rozprzestrzenił się we Włoszech pod wpływem dzieł Serweta i Castelliona.

Próbie propagandy antytrynitaryzmu podjęli lekarz z Włoch, Giorgio Biandrata (Jerzy Blandrata), Piotr z Goniądza oraz, pozostający pod ich wpływem, Marcin Czechowic i Grzegorz Paweł. Wkrótce polscy antytrynitarze wzrosli w siłę i ostatecznie oddzielili się od zboru kalwińskiego.

W drugim rozdziale traktuję o działalności braci polskich do roku 1600. Nawiązawszy kontakt z braćmi morawskimi w roku 1569 bracia polscy próbowali realizować „Nową Jerozolimę” w Rakowie, który właśnie wtedy zbudowano. Wówczas wśród przewodniczących zboru było mało szlachty, a mieszczaństwo było głównym motorem ruchu. Dyskutowali z Szymonem Budnym i Jakubem Paleologiem, głosząc radykalne postulaty społeczne. Następnie szlachta o umiarkowanych poglądach zaczęła górować nad mieszczaństwem, energicznie działając pod naciskiem Kościoła katolickiego oraz zboru kalwińskiego. W roku 1579 Faust Socyn przybył do Polski i przyczynił się do zjednoczenia doktryny braci polskich, ogromnie wpływając na ich myśl.

W trzecim rozdziale wyjaśniam proces przemian od złotego wieku braci polskich do ich upadku. W roku 1602 zbudowano w Rakowie szkołę, którą określano mianem Akademii Rakowskiej, a która stała się popularna również poza granicami Rzeczypospolitej. Nazywano ją „Atenami Sarmackimi”. Niemal równocześnie z powstaniem Akademii założono w Rakowie drukarnię, w której drukowano wiele dzieł braci polskich, jak również innych pisarzy. Na początku XVII wieku Raków przeżywał więc swój największy rozkwit, a bracia polscy byli sławni w całej Europie. Z drugiej jednak strony, po wstąpieniu na tron Zygmunta III Wazy, kontrreformacja poczyniała sobie coraz śmielej. Gdy Szwecja zaatakowała Polskę w roku 1655, niemało szlachty, która była w konflikcie z królem Janem II Kazimierzem, poparło króla szwedzkiego Karola X Gustawa. W takiej sytuacji bracia polscy również z nadziejami oczekiwali króla protestanckiego. Kiedy jednak Polsce udało się pokonać Szwecję, Kościół katolicki potępił jedynie braci polskich, uznając ich za zdrajców i zmuszając do opuszczenia kraju. Na emigracji nawiązali oni kontakty z intelektualistami, wpływając na powstanie unitarianizmu w Anglii oraz Stanach Zjednoczonych.

W czwartym rozdziale wspominam o tolerancji polskiej. W XVI wieku Polska była schronieniem dla tych, którzy byli ciemnieni w innych krajach. Mimo że królowie polscy, jak na przykład Zygmunt I i Zygmunt August rzeczywiście wydawali немало edyktów przeciw herezji, nie przestrzegano ich. Ponieważ oni sami traktowali heretyków stosunkowo łagodniej w porównaniu z władcami innych państw, mimo nacisków Kościoła i zboru kalwińskiego, można powiedzieć, że posiadali ducha tolerancji. W roku 1570 uchwalono tak zwaną zgodę sandomierską, potwierdzającą zasady współżycia wyznawców trzech konfesji: luteranów, kalwinistów i braci czeskich. Podczas bezkrólewia, z kolei, po śmierci Zygmunta Augusta w roku 1572, szlachta na czele z bratem polskim Mikołajem Sienickim uchwaliła konfederację warszawską, która zapewnia każdemu wyznaniu wolność sumienia. Ten symbol tolerancji polskiej został przywołany w roku 2003 w ramach programu UNESCO ku Pamięci świata.

Ten specyficzny charakter Polski i jej tradycje postaw tolerancyjnych pojawiały się od dawna. Polska geograficznie graniczyła z poganami, a po stworzenia unii personalnej z Wielkim Księstwem Litewskim stała się państwem o różnych narodach i religiach. Do tego jeszcze szlachta walczyła z Kościołem, pragnąc władzy. Takie rzeczy stały się czynnikami powstania tolerancji polskiej w XVI wieku.

Bracia polscy zdecydowanie głosili idee tolerancji w takim państwie. Na początku propagowali zrównanie stanów i zwolnienie chłopów z obowiązku pańszczyzny. W szkole lewartowskiej, którą zbudowali w roku 1588, nie zmuszano studentów do wstępowania w szeregi braci polskich. Próbowali kilka razy zjednoczyć się z mennonitami i zwolennikami Arminiusza. W Akademii Rakowskiej zakazano stosowania wszelkich kar cielesnych, gwarantowano studentom tolerancję w kwestii przekonań religijnych.

W piątym rozdziale przedstawiam myśl tolerancji w ówczesnej Europie. Anabaptyści głosili, że nietolerancja jest sprzeczna z nauką chrześcijaństwa. Po egzekucji Serweta, który sprzeciwił się poglądom Kalwina, antytrynitarze głosili konieczność tolerancji. Tolerancja w Oświeceniu, wychodząc z ram religii, stała się znacznie bardziej uniwersalna.

Bracia polscy aktywnie bronili zasad tolerancji. Głosili poglądy tolerancji z punktu widzenia ducha chrześcijańskiego oraz oddzielenia Kościoła od państwa. Według nich heretyk to nie taki człowiek, który inaczej wierzy. Heretyk to przede wszystkim ten, kto stosuje przemoc w sprawach religii. Wspominając o tym, że w średniowieczu państwo udzielało kościołowi pomocy w walce z heretykami, myśliciele braci polskich doszli do przekonania, że sprawy religii nie powinny wchodzić w zakres działania władzy świeckiej. Podobne poglądy często widać wówczas w całej Europie wśród innych intelektualistów, którzy mieli związki z braćmi. Można dziś śmiało powiedzieć, że bracia polscy stanowili ogniwo w powstaniu nowoczesnej koncepcji tolerancji.

あとがき

「ポーランド兄弟団」と出会ったのは、ポーランドのクラクフ留学中のことだった。その頃私は「ポーランド的寛容」というテーマに興味を持ち、どうした方法でこのテーマと向き合っていくかを始終考えていた。「寛容」という漠然としたテーマを扱うためには、まず「寛容」を具体的に現す「何か」——法令なり異教・異端との交流のありかたなり——との出会いが必要であると考えていた私は、私が通っていた語学学校で「ポーランド史」の講義を持っていたヤヌシュ・ペズダ **Janusz Pezda** 先生に相談に行った。先生からは „*Odrodzenie i Reformacja w Polsce*” という学術雑誌を読んでテーマを探すのがいいというアドバイスをいただき、それから毎日のように図書館に通い、そのバックナンバーをチェックするようになった。そこで気づいたのが、**Bracia polscy** や **Arianie** という単語をタイトルに含んだ論文が非常に多いことだった。そして、その時、その少し前に読んだカメンの『寛容思想の系譜』において、ポーランドで寛容思想を表明した反三位一体派として紹介されていた「ポーランド兄弟団」と **Bracia polscy**、**Arianie** が脳裏でリンクしたのだった。

その後、彼らに関係すると思われる論文や著述を手当たり次第に手に入れて帰国したが、卒業論文の執筆を開始した当初は、そのあまりの情報量に困惑した。さらに、彼らの実態を十分に把握しないままに、それを卒業論文のテーマに決め、資料集めをしたことで、彼らについて知れば知るほどそのスケールの大きさに翻弄され、本来の「寛容」というテーマを見失い、さらに本当に必要な資料の不足に悩まされることになった。執筆を終えた今でも、「ポーランド兄弟団」と「寛容」に対するアプローチには、もっと良い方法があったと思っている。扱う内容をもっと凝縮し、テーマを浮かび上がらせるような展開方法が理想ではあった。また、私の語学力、知識では、「ポーランド兄弟団」の具体的な姿を明らかにすることは到底不可能だった。膨大な研究が存在する欧米においてすら、彼らに対する研究の切り口はまだ存在するだろう。ただ、私自身に関して言えば、限られた時間の中で外国語文献を翻訳し、情報を整理し、こうして執筆を終えることができたことに非常に満足している。また、満足のいく作品を完成させるためには、気の遠くなるような労力と知識の吸収とが必要なのだと実感できたことは、よい経験だった。

最後に、本稿の執筆にあたり、テーマ設定から翻訳や論文の内容のチェックまで、あらゆる場面でご指導いただいた関口時正先生に、篤く感謝を申し上げたい。また、論文のポーランド語要旨執筆を助けてくださったピョートル・ホルバトフスキ先生、何度も相談にのっていただいた千葉敏之先生、家族、暖かい励ましをくれた友人達にも、心より感謝を捧げる。

2010年1月 杉本啓